

平成二十一年度

学生実態調査「大学院」

報告書 筑波大学



# まえがき

このたび、「平成 22 年度学生実態調査（大学院）報告書」が発行される運びとなりました。筑波大学の大学院生を対象とした実態調査は、昭和 58 年度（1983）と昭和 63 年度（1988）に学群と同様の内容で実施されました。平成 7 年度（1995）には大学院生を対象とした調査が初めて実施され、その 13 年後の平成 20 年度（2008）にも実施されました。その翌年、平成 21 年は大学院入学生数が学群の入学生数を初めて上回った年で、今後は大学院生の数が次第に増えると思われます。したがって、院生の実態や意向を、より正確に把握し、生活支援や教育研究支援の質を高める必要が強くなりました。そのために平成 22 年度（2010）から 2 年に 1 度、調査を実施することになりました。実施にあたっては、各支援室並びに各教育組織の協力はいうまでもありませんが、学生生活支援室と学生部が中心となって、それに調査や解析を専門とする教員の参加を得て行いました。日常業務に追われる中、教職員関係各位に心からお礼を申し上げます。

今回の調査において、特に留意したのは次の 4 点です。1) 生活及び学修支援向上に資するデータの取得を第一としました。2) 留学生が回答しやすいように、英文調査票を準備しました。3) 東京キャンパス社会人大学院生向けの調査を別途作成しました。4) 正確な情報を得るため悉皆調査とし、自由記述欄も設けました。

調査は印刷物を用い、回答肢に印を付けてもらう、最も一般的な方法としました。回答者数は筑波キャンパスでは 2,321、回答率は 38.1%でした。東京キャンパスでは、回答者数 188、回答率 27.8%でした。回答率の向上は今後の課題です。

調査結果は報告書で配布する他、ホームページにも載せ、学内の教職員および学生はもとより、必要に応じて学外にも公表していきます。教職員におかれましては、結果として表れた学生諸君の意向を最大限汲み取り、各部署との連携を図りながら、支援の質の向上に活用していただくことを願っております。

なお、筑波キャンパスは 3 月 11 日に震度 6 という大地震の直撃を受けました。学生部と学生生活支援室はその対応に追われましたが、幸いにして大きく遅れることなく本報告が刊行の運びとなりましたのは、加賀学生生活支援室はじめ関係者の努力に負うところ大です。心から感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月

学生担当副学長 西 川 潔

# 目 次

## まえがき

## 概要

平成 22 年度学生実態調査（大学院）概要 .....	1
-----------------------------	---

## 筑波地区

第 1 章 あなた自身について .....	16
1.1 性別・年齢・所属・在籍年次について（問 1～問 4） .....	16
1.2 外国人留学生について（問 5） .....	17
1.3 社会人の経験について（問 6） .....	18
1.4 職場の理解について（問 7） .....	19
1.5 筑波大学大学院を志望した主な理由について（問 8） .....	20
1.6 入学前の大学・大学院について（問 9） .....	21
1.7 現在の住まいについて（問 10） .....	22
1.8 学生宿舎への入居希望について（問 11） .....	23
1.9 現在の居住地について（問 12） .....	24
第 2 章 生活全般について .....	25
2.1 主たる家計支持者について（問 13） .....	25
2.2 世帯の年間収入について（問 14） .....	26
2.3 奨学金の受給について（問 15） .....	27
2.4 「つくばスカラシップ」制度について（問 16） .....	28
2.5 希望する経済支援について（問 17） .....	29
2.6 1ヶ月の収入について（問 18） .....	30
2.7 収入源について（問 19） .....	32
2.8 1ヶ月の生活費・研究活動費について（問 20） .....	34
2.9 アルバイトの種類について（問 21） .....	35
2.10 アルバイトに費やす時間について（問 22） .....	36
2.11 アルバイトの研究・学修への影響について（問 23） .....	36
2.12 平均的な起床・就寝時刻について（問 24） .....	37
2.13 学生宿舎の満足度について（問 25、問 26） .....	38
2.14 学生宿舎内での生活について（問 27） .....	39
2.15 現在の日常生活の満足度について（問 28） .....	40

第3章 通学・事故等について .....	41
3.1 通学手段について (問 29) .....	41
3.2 通学時間について (問 30) .....	42
3.3 学内循環バスの利用頻度について (問 31) .....	43
3.4 交通事故経験の有無について (問 32) .....	44
3.5 盗難被害について (問 33) .....	45
3.6 傷害等の被害について (問 34) .....	46
3.7 カルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘について (問 35) .....	47
3.8 教員によるセクハラ、アカハラについて (問 36) .....	48
第4章 健康状態について .....	49
4.1 健康状態について (問 37) .....	49
4.2 悩みごとについて (問 38) .....	50
4.3 精神的な健康状態について (問 39) .....	51
第5章 相談相手について .....	52
5.1 悩みの相談相手について (問 40) .....	52
5.2 相談しやすい人との接触頻度について (問 41) .....	53
第6章 サークル活動について .....	54
6.1 サークル活動について (問 42) .....	54
6.2 サークル活動の動機について (問 43) .....	55
第7章 筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について .....	56
7.1 教員に期待することについて (問 44) .....	56
7.2 教育面や制度面で不十分な点について (問 45) .....	58
7.3 整備・充実してほしい施設について (問 46) .....	59
7.4 学内の福利厚生施設に関する満足度について (問 47) .....	60
7.5 TWINS の満足度について (問 48) .....	61
7.6 キャンパス内でのマナーについて (問 49) .....	62
第8章 進路や就職活動について .....	63
8.1 修了後の進路について (問 50) .....	63
8.2 進路決定の理由について (問 51) .....	64
8.3 将来の進路についての感じ方について (問 52) .....	65
8.4 就職活動の情報源について (問 53) .....	66

8.5	指導教員への相談について (問 54)	67
第 9 章	その他	68
9.1	学修・研究や生活に関わる情報源について (問 55)	68
9.2	相談機関について (問 56)	69
9.3	学内広報誌について (問 57)	70
9.4	学外研修施設の利用について (問 58)	71
第 10 章	自由記述	72
東京地区		
第 1 章	あなた自身について	85
1.1	性別・年齢・所属・在籍年次 (問 1～問 4)	85
1.2	外国人留学生について (問 5)	86
1.3	社会人の経験について (問 6)	86
1.4	職場の理解について (問 7)	87
1.5	筑波大学大学院を志望した主な理由について (問 8)	88
1.6	入学前の大学・大学院について (問 9)	89
1.7	現在の住まいについて (問 10)	89
1.8	現在の居住地について (問 11)	90
第 2 章	生活全般について	91
2.1	主たる家計支持者について (問 12)	91
2.2	世帯の年収について (問 13)	91
2.3	奨学金の受給について (問 14)	92
2.4	「つくばスカラシップ」制度について (問 15)	92
2.5	希望する経済支援について (問 16)	93
2.6	1ヶ月の収入について (問 17)	93
2.7	収入源について (問 18)	94
2.8	1ヶ月の生活費・研究活動費について (問 19)	94
2.9	平均的な起床・就寝時刻について (問 20)	95
2.10	日常生活の満足度について (問 21)	95
第 3 章	通学・ハラスメント等について	96
3.1	職場からの通学時間について (問 22)	96

3.2	教員によるセクハラ、アカハラ、会社におけるパワハラについて（問 23）	97
第 4 章	健康状態について	98
4.1	健康状態について（問 24）	98
4.2	悩みごとについて（問 25）	99
4.3	精神的な健康状態について（問 26）	100
第 5 章	相談相手について	101
5.1	悩みの相談相手について（問 27）	101
5.2	相談しやすい人との接触頻度について（問 28）	102
第 6 章	筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について	103
6.1	教員に期待すること（問 29）	103
6.2	教育面や制度面で不十分な点（問 30）	104
6.3	整備・充実してほしい施設（問 31）	105
6.4	TWINS の満足度（問 32）	106
第 7 章	その他	107
7.1	学修・研究や生活に関わる情報源について（問 33）	107
7.2	相談機関の利用希望について（問 34）	108
7.3	学外研修施設の利用について（問 35）	109
第 8 章	自由記述	110

# 平成 22 年度学生実態調査（大学院）概要

## 1. これまでの実態調査の実施と目的

筑波大学では、学群学生に対して 1978 年（昭和 53 年）度から 2008 年（平成 20 年）度まで 5 年毎に「学生生活実態調査」を実施してきた。一方、大学院学生に対しては、第 2 回（1983 年度）と第 3 回（1988 年度）に学群学生と同一の調査票を用いて調査が行われたが、第 4 回（1993 年度）の調査では、学群学生と同一の調査票を用いることは適切でないとの理由から、大学院学生は調査の対象から外されている。その代わりとして、2 年後（1995 年度）に第 5 回学生生活実態調査が行われ、この時は大学院学生のみを対象として調査が実施された。しかし、その後の第 6 回（1998 年度）と第 7 回（2003 年度）の調査は、再び学群学生のみを対象として行われた。そして、2008 年（平成 20 年）度に学群学生向けの調査と同時に、大学院学生には「生活等に関するアンケート調査」として、13 年ぶりの調査が行われた。

前回の調査実施後、学生生活支援室では、実態調査の実施について再検討を行い、学生生活支援の質をさらに向上させるためには、よりきめ細かな生活実態および学生の要望・提言等の把握が重要になること、また、大学院修士課程、博士前期課程が 2 年間の課程であることを踏まえれば、5 年間隔の調査では不十分であること、などの理由により、今後は 2 年に 1 度の間隔で実態調査を実施する旨の案を作成した。西川学生担当副学長のご判断を仰ぐとともに、平成 21 年度第 7 回大学院教育会議にその旨を報告し、基本的な了解を得ることができた。このような経緯で、今回の大学院生に対する学生実態調査は前回から 2 年後、平成 22 年度に実施されることになったわけである。なお、上述のように、学群学生に対する調査も同時に実施され、その結果は別冊子『平成 22 年度学生生活実態調査（学群）報告書』としてまとめられている。

今回の実態調査の目的は、調査票の冒頭に掲げたように、「大学院学生の生活・教育・研究環境の実態を把握し、本学大学院学生の生活の一層の向上および教育・研究環境の改善に資すること」である。

## 2. 実施方法の検討と調査項目の設定

学生生活支援室では、2010 年 4 月に入るとすぐに学生実態調査の準備にとりかかった。第 1 回学生生活支援室会議において、室長から学生生活実態調査の実施に向けて、室員全員への協力要請があり、第 2 回会議では、具体的な実施要領を検討し、1) 実態調査を 2010 年 9 月に実施すること、2) 大学院全学生を対象とすること、3) 回答は調査票に直接記入する方式とすること、4) 東京キャンパスに本拠を置く研究科・専攻については、筑波キャンパスと異なる調査票の作成を検討すること、などを決定している。第 3 回会議で実態調査の作業工程について議論し、第 4 回から第 7 回の会議では、前回（平成 20 年度）の調査票設問項目をもとに、すべての設問について慎重な検討を行い、7 月上旬までに第 1 次案を作成している。なお、調査の実施形態や調査項目の検討を進める段階において、社会・市場調査を専門とされる石井健一学生生活支援室員から、有益な情報や建設的な意見を多数提供していただいたことを付言しておきたい。

調査項目の設定においては、回答率を向上させるためにも、設問総数を増やさないことが重要であるとの認識から、項目を厳選する作業を続けた。その結果、前回調査で 61 問であった調査項目は、今回は 58 問となっている。ただし、これはティーチング・アシスタント（TA）制度に関わる調査を教育推進部が独立に行うことになったため、TA 関連の設問が除かれたことが大きく、前回調査にはなかった設問で、今回新たに設けられたものもいくつかある。たとえば、経済支援の充実につなげるための家計状況に関する設問、食堂など厚生施設の満足度についての設問、カルト宗教団体への勧誘に関する設問などである。

東京地区の調査票については、7 月上旬までにまとめられた第 1 次案をもとに、ビジネス科学研究科および関係する専攻の先生方、事務職員の方にご検討を依頼し、東京地区の実情に合わせて設問を修正し、

また、該当しない設問については削除するなどの作業を行っていただいた。時間的に余裕のない日程であったが、7月中には東京地区の調査票案をまとめていただいた。ビジネス科学研究科長を始め、関係した教職員の方々に感謝を申し上げたい。

以上のような準備作業を経て、平成22年度第4回大学院教育会議（7月20日開催）に「平成22年度筑波大学大学院学生実態調査」の実施案が提案され、調査の実施が了承された。また、各研究科の学生担当教員には、電子メールで実施案および調査票案が提示され、意見の聴取が行われた。大学院教育会議の委員および学生担当教員から調査票および実施方法についていくつかの意見・要望が出されたため、それに応じて調査票の修正などの作業を行った。同時に、筑波大学の国際化拠点整備事業（G30）への採択をうけ、留学生が増加傾向にあることから、英文の調査票を用意することとし、業者に英文翻訳作業を委託した。最終的に8月末までに、筑波地区と東京地区の調査票のそれぞれについて日本語版と英語版とを確定させ、実施の細部について詰めの作業を行った。調査は、学群学生向けの調査と同時に実施するため、混乱を招かないように、前回同様、大学院学生向けの調査票は青色（学群学生向けの調査票は黄色）にすることとした。また、今回から、情報の秘匿性を確保するため、回答後に調査票を封印する保護シールを導入している。

### 3. 調査の実施

9月上旬に調査票が各研究科・各専攻に届けられ、9月8日（水）から各教育組織の実情に合わせて配布および回収が開始された。実施期間は9月30日（木）までとした。実施期間中、またその後の回収作業においても、トラブルなど問題になることはなく、とりわけ学生部学生生活課と各支援室・専攻事務室の担当事務員の方々のご尽力により、スムーズに調査を実施することができたのはたいへん有難かった。回収率は全体で37.1%（筑波地区38.1%、東京地区27.8%）となり、前回の34.8%から向上させることができた。これは、研究科長・専攻長を始め、各教育組織の教員・職員の方々にひとかたならぬお骨折りをお願いした賜物である。心より感謝申し上げたい。

### 4. 調査結果の分析と報告書の作成

10月上旬に調査票の回収を終え、データの集計を業者に委託した。データ集計は12月中旬までに終了し、戻ってきた集計結果を踏まえて、学生生活支援室員と学生部職員が各項目の分析と報告書の作成に取りかかった。報告書の原稿が1月末までにほぼ出揃い、編集と全体の統一に関する作業を行い、2月中には原稿を印刷所に入稿することができた。このまま予定通りに進めば、本報告書を平成22年度内に刊行することができたはずであったが、3月に入り、東北関東大震災が起これ、校正作業が一定期間ストップせざるを得ず、実際の発刊は平成23年度に入ってからになってしまった。天災の影響とはいえ、予定の期日に発刊できなかったことに対してはお詫びを申し上げなければならない。

本報告書の原稿は、次頁に記した学生生活支援室員および関係部局の方々に用意していただいたが、様々な角度からデータの分析を行い、要領よく原稿を作成していただいたことに感謝したい。

なお、本報告書では、表記等において以下のような工夫を施している。

- 1) グラフにはできるだけ、回答率等の数字をいれることにしたが、小さい数値でスペースが確保できないところでは、数字を省略している場合がある。
- 2) 表において、注意を喚起したい数値については、黄色で表示している部分がある。
- 3) 回答率の表示では、原則、%を省いている。小数点下一桁の数字は、回答率であるにご理解いただきたい。

**執筆分担：**

概要	加賀 信広 (人文社会科学研究科)
問(1)～問(6)【問1～問6】	加賀 信広 (人文社会科学研究科)
問(7)～問(12)【問7～問11】	丹藤 勝次 (学生部学生生活課長)
問(13)～問(17)【問12～問16】	学生部学生生活課
問(18)～問(24)【問17～問20】	森継 修一 (図書館情報メディア研究科)
問(25)～問(27)	学生部学生生活課
問(28)～問(32)【問21～問22】	白木賢太郎 (数理物質科学研究科)
問(33)～問(36)【問23】	学生部学生生活課
問(37)～問(41)【問24～問28】	佐藤 純 (人間総合科学研究科)
問(42)～問(43)	前田 清司 (人間総合科学研究科)
問(44)～問(46)【問29～問32】	黒田 享 (人文社会科学研究科)
問(47)	学生部学生生活課
問(48)～問(49)	黒田 享 (人文社会科学研究科)
問(50)～問(54)	キャリア支援室・学生部就職課
問(55)～問(58)【問33～問35】	石井 健一 (システム情報工学研究科)
自由記述	仏山 輝美 (人間総合科学研究科)
	宮本エジソン (人文社会科学研究科)
	田中佐代子 (人間総合科学研究科)

※【 】は東京地区調査票の設問番号

# 筑波地区

# 平成 22 年度 筑波大学大学院学生実態調査

\*\*\* お願い \*\*\*

この調査は、筑波大学大学院学生の生活・教育・研究環境の実態を把握し、本学大学院学生の生活の一層の向上および教育・研究環境の改善に資することを目的として実施するものです。

今回の調査対象者は、筑波大学大学院に在籍する学生全員です。

この調査は無記名で、他の目的に用いることはありませんので、ありのままを記入してください。

調査結果は、調査報告書として公表し、必要な方策を講じる予定です。

この調査の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

平成 22 年 9 月

筑波大学 副学長(学生担当) 西川 潔

\*\*\*\*\*

## 1. 記入の方法などについて

- ① 回答は、すべてこの調査用紙（次頁から全 8 ページ）に記入してください。
- ② 回答は、番号を選ぶ選択方式と、具体的に記入または記述するものがあります。  
番号選択方式の場合はあてはまる番号に○をつけてください。  
記入または記述の場合は指定された欄に書き込んでください。
- ③ 氏名・学籍番号などあなた自身を特定し得る情報を書く必要はありません。回収した調査用紙は無記名のまま統計的に処理されます。
- ④ 平成 22 年 9 月 1 日現在で記入してください。

## 2. 提出期間

平成 22 年 9 月 8 日（水）～平成 22 年 9 月 30 日（木）

## 3. 回収方法

記入が済んだ調査用紙は、専攻事務室等の「回収箱」に投函してください。

## 4. 問い合わせ

この調査に関する質問・ご意見等は、

学生生活支援室：電話 029-853-2465

にご連絡ください。

問(1) あなたの性別をお答えください。

1. 男性      2. 女性

問(2) あなたの年齢をお答えください。

1. 24歳以下      2. 25～29歳      3. 30～34歳      4. 35～39歳      5. 40歳以上

問(3) あなたが所属する研究科の番号に○を付け、在籍する専攻名を記入してください。

1. 教育研究科 ( \_\_\_\_\_ ) 専攻      2. 人文社会科学研究科 ( \_\_\_\_\_ ) 専攻  
 3. 数理工学科学研究科 ( \_\_\_\_\_ ) 専攻      4. システム情報工学研究科 ( \_\_\_\_\_ ) 専攻  
 5. 生命環境科学研究科 ( \_\_\_\_\_ ) 専攻      6. 人間総合科学研究科 ( \_\_\_\_\_ ) 専攻  
 7. 図書館情報メディア研究科

問(4) あなたは筑波大学大学院に在籍して何年目(休学および留学した期間を含めて下さい)ですか?

あてはまる課程の在籍年数の番号一つに○を付けてください。

- |          |   |  |         |                        |
|----------|---|--|---------|------------------------|
| 修士課程の    | → | 1. 1年目   | 2. 2年目  | 3. 3年目以上               |
| 博士前期課程の  | → | 4. 1年目   | 5. 2年目  | 6. 3年目以上               |
| 博士後期課程の  | → | 7. 1年目   | 8. 2年目  | 9. 3年目      10. 4年目以上  |
| 一貫制博士課程の | → | { 11. 1年目      12. 2年目      13. 3年目<br>14. 4年目      15. 5年目      16. 6年目以上 |         |                        |
| 3年制博士課程の | → | 17. 1年目  | 18. 2年目 | 19. 3年目      20. 4年目以上 |
| 専門職学位課程の | → | 21. 1年目  | 22. 2年目 | 23. 3年目      24. 4年目以上 |

問(5) あなたは外国人留学生ですか? 「はい」の場合は、2～6のうちであてはまる番号一つに○を付けてください。

1. いいえ  
 はい → { 2. 私費留学生      3. 文部科学省国費留学生      4. 文部科学省以外の日本の団体等の奨学生  
 5. 自国の奨学生      6. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(6) 社会人の経験はありますか? 「ある」の場合は、2～6のうちであてはまる番号一つに○を付けてください。

1. ない  
 ある → { 2. 現在も在職中      3. 現在は休職中      4. 退・辞職し、現在、定職はない  
 5. 定職はなかった      6. その他 ( \_\_\_\_\_ )

**次の問(7)には社会人で有職の方のみ(上の問(6)で2または3に○を付けた方)が回答して下さい。**

問(7) 筑波大学大学院に入学するにあたって職場の理解は得られていますか? あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 学費の負担を含め、全面的に得られている      2. 就学を支障のない程度に得られている  
 職場の制度を利用した → 3. 休職制度      4. 派遣制度      5. その他の制度 ( \_\_\_\_\_ )  
 6. 職場には秘密にしている      7. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(8) 筑波大学大学院を志望した主な理由について、あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- |                     |                             |
|---------------------|-----------------------------|
| 1. 研究領域に魅力がある       | 2. 教育内容が優れている               |
| 3. 希望する分野がある        | 4. 指導教員の資質・能力、指導体制が優れている    |
| 5. 研究室の雰囲気の魅力がある    | 6. 教育・研究施設が優れている            |
| 7. 幅広い専門が学べる        | 8. 学費や生活費などの経済的な支援体制が充実している |
| 9. 修了後の進路など就職に有利である | 10. 修了年限の弾力的な運用がある          |
| 11. 親や指導教員などから勧められた | 12. 実家から通える                 |
| 13. 資格などが取りやすい      | 14. その他 ( _____ )           |

問(9) あなたが筑波大学大学院に入学する前の大学または大学院としてあてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 筑波大学・大学院                      2. 日本国内の他大学・大学院                      3. 日本国外の大学・大学院

問(10) あなたの現在の住まいについて、あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 筑波大学学生宿舎                      2. 民間のアパート・マンションなど                      3. 親と同居                      4. 親戚・知人宅  
5. その他 ( \_\_\_\_\_ )

以下の問(11)～問(12)の間には、問(10)において2～5に○を付けた方がのみが回答してください。

問(11) 学生宿舎への入居を希望していますか。

1. 希望する (理由: \_\_\_\_\_ )  
2. 希望しない

問(12) あなたの現在の居住地について、あてはまる番号一つに○を付けてください。

- |                       |   |   |         |         |         |         |
|-----------------------|---|---|---------|---------|---------|---------|
| ・筑波大学外でつくば市内の         | → | { | 1. 天久保  | 2. 春日   | 3. 桜    | 4. 柴崎   |
|                       |   | } | 5. 吾妻   | 6. その他  |         |         |
| ・つくば市以外で茨城県内の         | → |   | 7. 県南地域 | 8. 県西地域 | 9. その他  |         |
| ・茨城県外で関東地方の           | → |   | 10. 東京都 | 11. 千葉県 | 12. 埼玉県 | 13. その他 |
| 14. 上記以外の地域 ( _____ ) |   |   |         |         |         |         |

II. 生活全般について

問(13) あなた、もしくは、あなたの家族の主たる家計支持者はどなたですか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. あなた自身                      2. 配偶者                      3. 父親・母親                      4. 両親以外の親族                      5. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(14) あなたを学資支援している世帯の年間収入についてお答えください。あてはまる番号一つに○を付けてください。

- |                            |                    |                      |
|----------------------------|--------------------|----------------------|
| 1. 200万円未満 (約 _____ 万円)    | 2. 200万円以上～300万円未満 | 3. 300万円以上～400万円未満   |
| 4. 400万円以上～500万円未満         | 5. 500万円以上～600万円未満 | 6. 600万円以上～700万円未満   |
| 7. 700万円以上～800万円未満         | 8. 800万円以上～900万円未満 | 9. 900万円以上～1,000万円未満 |
| 10. 1,000万円以上 (約 _____ 万円) | 11. 学資支援は受けていない    | 12. 分からない            |

問(15) あなたは奨学金などを受給していますか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

- |                  |                      |                  |
|------------------|----------------------|------------------|
| 1. 受けていない        | 2. 日本学生支援機構の奨学金      | 3. 私費外国人留学生学習奨励費 |
| 4. 地方公共団体の奨学金    | 5. 日本の民間団体・財団などの奨学金  | 6. 日本学術振興会の特別研究員 |
| 7. 文部科学省国費留学生    | 8. 自国政府の奨学金 (留学生の場合) |                  |
| 9. その他 ( _____ ) |                      |                  |

問(16) 本学独自の奨学金「つくばスカラシップ」制度をご存じですか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 知っている  
2. 知らない (ホームページに掲載していますのでご覧ください)  
「つくばスカラシップ」についての意見等がありましたら記入してください。  
( \_\_\_\_\_ )

問(17) 大学に希望する経済支援は何ですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

- |   |                   |                   |          |
|---|-------------------|-------------------|----------|
| 1. とくに希望しない   | 2. 給付型(返還義務なし)奨学金 | 3. 貸与型(返還義務あり)奨学金 | 4. 授業料免除 |
| 5. 一時貸付金 (必要理由に○をつけてください。 ① 授業料のため ② 生活費のため ③ その他 ) |                   |                   |          |
| 6. その他 (具体例: _____ )                                |                   |                   |          |

問(18) あなたの1か月の収入はどれくらいですか？今年4月以降で臨時的な収入を除いた1か月の平均であてはまる番号一つに○を付けてください。

- |              |              |             |              |              |
|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 6万円未満     | 2. 6～9万円未満   | 3. 9～12万円未満 | 4. 12～15万円未満 | 5. 15～18万円未満 |
| 6. 18～25万円未満 | 7. 25～30万円未満 | 8. 30万円以上   |              |              |

問(19) あなたの1ヶ月の平均的な収入の収入源はどのようなものですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

- |                            |   |
|----------------------------|---|
| 1. 有職者としての給与               | 2. 奨学金                                      |
| 3. 仕送り                     | 4. 筑波大学での TA・TF (ティーチング・アシスタント, ティーチングフェロー) |
| 5. 筑波大学での RA (リサーチ・アシスタント) | 6. 指導教員から頼まれた学内でのアルバイト                      |
| 7. 上記4～6以外の学内でのアルバイト       | 8. 他大学での非常勤講師                               |
| 9. 民間会社の契約社員や派遣社員          | 10. 筑波大学以外での定常的なアルバイト                       |
| 11. 筑波大学以外での不定期なアルバイト      | 12. 借入金                                     |
| 13. 貯金                     | 14. その他 ( _____ )                           |

問(20) 平均的な1ヶ月の生活費や研究活動費などは充分ですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

- |          |                           |                      |
|----------|---------------------------|----------------------|
| 1. 充分である | 2. まあまあ足りている              | 3. ぎりぎりである           |
| 不足している   | 4. 授業料の納入ができない            | 5. 研究時間確保でアルバイトができない |
|          | 6. 研究用資料・書籍が購入できない        | 7. IT環境を整備できない       |
|          | 8. 学会・研究会などに行けない          | 9. 研究のための調査に行けない     |
|          | 10. 研究論文の投稿料・査読料・掲載料が払えない |                      |
|          | 11. その他 ( _____ )         |                      |

以下の問(21)～問(23)の3問には、平成22年度中に筑波大学以外でアルバイトをした方が回答してください。

問(21) アルバイトの種類はどのようなものですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 1. 家庭教師                   | 2. 塾講師、添削指導                |
| 3. 一般事務                   | 4. 研究所における研究補助             |
| 5. 特殊技能(翻訳、通訳など)の活用       | 6. 飲食店でのウェイター、ウェイトレス、調理係など |
| 7. 飲食店以外での軽労働(調査、販売、配達など) | 8. 建築・土木作業、工事現場、工場などでの重労働  |
| 9. 建物解体作業、劇薬取扱い作業などの危険作業  | 10. その他 ( _____ )          |

問(22) アルバイトに費やす時間はどれくらいですか？1週間当りの平均的な時間を記入してください。

1週間に平均 \_\_\_\_\_ 時間 程度

問(23) アルバイトに費やされる時間は研究・学修の妨げになっていますか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

- |                |               |              |
|----------------|---------------|--------------|
| 1. かなり妨げになっている | 2. 多少妨げになっている | 3. 妨げになっていない |
|----------------|---------------|--------------|

問(24) 平均的な起床時刻と就寝時刻は何時頃ですか？それぞれについて、およその時刻を24時間制で記入して下さい。

起床時刻：だいたい \_\_\_\_\_ 時頃      就寝時刻：だいたい \_\_\_\_\_ 時頃

以下の問(25)～問(27)は、学生宿舎に入居している、または、入居していた方が回答してください。

問(25) 入居している(た)学生宿舎について、それぞれあてはまる番号一つに○を付けてください。(学生宿舎は現在、一部で改修工事が始まっていますが、改修効果等を知るため、差し支えなければ棟名についてもお答えください。)

- |         |              |         |                       |
|---------|--------------|---------|-----------------------|
| A 居室タイプ | 1. 単身宿舎      | 2. 世帯宿舎 | 3. 二人室                |
| B 地区    | 1. 平砂地区      | 2. 追越地区 | 3. 一の矢地区      4. 春日地区 |
| C 棟名    | ( _____ ) 号棟 |         |                       |

問(26) 学生宿舎のA～Kに関する満足度について、それぞれあてはまる番号一つに○を付けてください。

	満足	まあ満足	普通	やや不満	不満		満足	まあ満足	普通	やや不満	不満
A 料金	1	2	3	4	5	B 居室	1	2	3	4	5
C 補食室	1	2	3	4	5	D トイレ	1	2	3	4	5
E 洗濯室(ランドリー)	1	2	3	4	5	F 浴場	1	2	3	4	5
G 認証システム	1	2	3	4	5	H 外灯	1	2	3	4	5
I 管理事務所の対応	1	2	3	4	5	J 売店	1	2	3	4	5
K 全体として	1	2	3	4	5						

学生宿舎において不便を感じていることがあればお書きください。

( \_\_\_\_\_ )

問(27) 学生宿舎での生活についてお答えください(入居していた方は入居時における状況をお答えください)。

- A 入居している棟の中に友人はいますか? 1. いる( \_\_\_\_\_ 人位) 2. いない
- B 近隣の入居者との関係は? 1. ときどき会話する 2. あいさつを交わす程度 3. まったく知らない
- C 宿舎生活に不安を感じますか? 1. 不安はない 2. 不安がある(理由: \_\_\_\_\_)
- D 学生宿舎にコミュニティ組織が必要だと思いますか?
1. 思う → 主な活動内容は? : a 懇親会開催 b 清掃等の実施 c イベント開催・参加  
d その他( \_\_\_\_\_ )
2. 思わない → (理由: \_\_\_\_\_)

問(28) 現在の日常生活に、全体として、満足していますか?あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. かなり満足 2. おおむね満足 3. どちらとも言えない 4. 少し不満 5. かなり不満

Ⅲ. 通学・事故等について

問(29) あなたが1回の通学のために利用している交通手段はどのようなものですか?雨天および雨天以外の日のそれぞれについて、下の○数字の番号四つまでを記入してください。

A 雨天時 : ( \_\_\_\_\_ )、( \_\_\_\_\_ )、( \_\_\_\_\_ )、( \_\_\_\_\_ )

B 雨天以外 : ( \_\_\_\_\_ )、( \_\_\_\_\_ )、( \_\_\_\_\_ )、( \_\_\_\_\_ )

- ① 徒歩 ② 自転車 ③ バイク(原付を含む) ④ 自家用車  
⑤ キャンパス交通システム(学内循環バス) ⑥ 学内循環バス以外の路線バス ⑦ つくばエクスプレス(TX)  
⑧ JR常磐線 ⑨ その他-1( \_\_\_\_\_ ) ⑩ その他-2( \_\_\_\_\_ )

問(30) 雨天の日以外のあなたの通学時間は片道どのくらいですか?あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 15分未満 2. 15分~30分 3. 30分~45分 4. 45分~1時間  
5. 1時間~1時間半 6. 1時間半~2時間 7. 2時間以上

問(31) キャンパス交通システム(学内循環バス)の利用頻度はどのくらいですか?あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. ほぼ毎日 2. 週に2~3回 3. 月に2~3回 4. 年に数回  
5. いままでに数回 6. 利用したことはない

問(32) 大学院入学後、交通事故の経験がありますか?あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 事故の経験はない 2. 加害者になったことがある  
3. 被害者になったことがある 4. 自損事故の経験がある

問(33) 大学院入学後、盗難の被害に遭ったことがありますか?あてはまる番号すべてに○を付けてください。また、被害に遭った方は、盗難物と具体的な場所をお答えください。

1. 被害に遭ったことはない
2. 学内で被害に遭った (盗難物: \_\_\_\_\_ 場所: \_\_\_\_\_)
3. 学生宿舎内で被害に遭った (盗難物: \_\_\_\_\_ 場所: \_\_\_\_\_)
4. 学外で被害に遭った (盗難物: \_\_\_\_\_ 場所: \_\_\_\_\_)

問(34) 大学院入学後、引ったくりや暴行・傷害・たかり・恐喝などの被害に遭ったことはありますか?あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 被害に遭ったことはない 2. 学内で被害に遭った 3. 学生宿舎内で被害に遭った  
4. 研究学園都市内で被害に遭った 5. 上記以外の場所で被害に遭った

問(35) カルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘についてお尋ねします。あてはまる番号一つに○を付けてください。

- A 大学院入学後、勧誘を受けていやな思いをしたことが 1. ある 2. ない
- B 大学院入学後、他人が勧誘を受けて困っているのを見たり、聞いたりしたことが 1. ある 2. ない



Ⅶ. サークル活動について

問(42) 大学院学生になってからのサークル活動について、あてはまる番号一つに○を付けてください。

- 現在活動中** → 1. 正式メンバーで      2. コーチ・顧問などで      3. その他 ( \_\_\_\_\_ )  
 4. 以前、活動していた      5. 活動したことはない

次の問(43)は、現在、サークル活動をしている、または、以前していた方がのみが回答してください

問(43) サークル活動の動機はどのようなものですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 友人が欲しくて      2. 知識・教養のため      3. 健康のため      4. 技術向上のため  
 5. 団体生活を体験したい      6. 趣味と一致      7. 余暇の利用のため      8. レクリエーションの一環で  
 9. 希望の進路と同じで有益      10. 就職などにプラス      11. 大学時代からの継続      12. 勧誘されて  
 13. 社会貢献のため      14. その他 ( \_\_\_\_\_ )

Ⅷ. 筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について

問(44) 筑波大学の教員に期待することはどのようなことですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 優れた研究者であって欲しい      2. 授業内容を充実させて欲しい      3. もっと解りやすく教えて欲しい  
 4. 休講を無くして欲しい      5. 研究指導の時間を確保して欲しい      6. 学生との対話の場を持って欲しい  
 7. 社会的実践との結び付きを示して欲しい      8. ハラスメントの問題に敏感になって欲しい  
 9. メンタル面に関するサポートをして欲しい      10. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(45) 教育面や制度面で不十分であると感じるのはどのようなことですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 教育研究スタッフ      2. カリキュラム      3. 講演会等課外教育プログラム  
 4. 留学制度      5. 授業料免除等の経済的支援      6. 就職活動の支援  
 7. 教員との懇談会      8. 支援室や事務室の対応      9. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(46) キャンパス内の施設等で、特に整備・充実して欲しいのはどれですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 教室・実験室      2. 図書館      3. IT環境      4. 体育施設      5. 課外活動施設  
 6. セキュリティ      7. 駐車場      8. 自転車置き場      9. 学内循環バス      10. ペDESTリアン  
 11. 外灯      12. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(47) 学内の福利厚生施設A～Gに関する満足度について、それぞれあてはまる番号一つに○を付けてください。

	満足	まあ満足	普通	やや不満	不満
A 食堂	1	2	3	4	5
B 喫茶	1	2	3	4	5
C パン販売	1	2	3	4	5
D 書店	1	2	3	4	5
E 画材	1	2	3	4	5
F その他売店	1	2	3	4	5
G 自動販売機	1	2	3	4	5

① 上記の回答について特に理由があればお書きください。

(理由: \_\_\_\_\_ )

② 現在の学内の食堂や売店等に不便を感じたり改善してほしい点があればお書きください。

( \_\_\_\_\_ )

問(48) 学務システム：TWINSの使いやすさの満足はどの程度ですか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 満足している      2. 満足とも不満とも言えない  
 3. 不満である (理由: \_\_\_\_\_ )





# 第1章 あなた自身について

## 1.1 性別・年齢・所属・在籍年次について（問1～問4）

- ◎大学院学生（筑波地区）の在籍数は6,084名。
- ◎年齢別構成は、前回とほぼ同様。30歳以上は14.5%。

まず基本的事項として、性別（問1）・年齢（問2）・所属研究科（問3）・年次（問4）について尋ねた。結果は、表1.1.1および表1.1.2にまとめた通りである。

大学院学生の在籍数（平成22年9月1日現在）は全体として6,760名で、前回調査時（平成20年10月）よりも463名（7.4%）増となっている。この内、筑波地区の大学院学生は6,084名である。筑波地区における在籍学生数の男女比は、男性4,055名（66.7%）に対して、女性2,029名（33.3%）となっており、ちょうど女性が3分の1を占めている。

回答率については、筑波地区で38.1%となり、前回調査の回答率34.8%を上回った。男女別では、回答数の割合が、男性65.9%、女性33.5%（無効・無回答0.6%）で、これは男女の在籍数の割合とほぼ同じである。研究科でみると、数理工学系研究科とシステム情報工学研究科で高く、人文社会科学系研究科でやや低くなっている。

回答者について年齢別に見てみると、年齢が上がるにつれて学生数は減少する傾向にあるが、40歳以上の学生だけは、35歳～39歳の学生とほぼ同数になっている。前回の調査では、東京地区の大学院生も併せて集計していたため、40歳以上の学生数が多くなっていたが、東京地区の学生を除いて比較すると、今回の年齢別構成は前回とほぼ同様である。ちなみに、30歳以上の大学院生は、前回（ビジネス科学研究科を除く）14.6%で、今回は14.5%となっている。

表 1.1.1 回答者数（研究科別、男女別、年齢別、人間総合科学研究科は東京地区を除く）

研究科名	在籍数	回答者数	回収率	男性	女性	無回答	24歳以下	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40歳以上	無回答
教育	227	73	32.2%	45	28	0	53	10	2	2	5	1
人文社会	659	176	26.7%	74	101	1	54	76	32	10	4	0
数理工学	835	387	46.3%	337	49	1	275	90	15	3	4	0
シス情	1,308	604	46.2%	531	72	1	417	159	17	5	6	0
生命環境	1,148	434	37.8%	264	170	0	215	140	41	19	17	2
人間総合	1,708	557	32.6%	240	316	1	205	217	72	29	33	1
図情メ	199	77	38.7%	37	40	0	36	21	6	7	7	0
白紙・無回答		13		2	1	10	0	3	0	0	0	10
合計	6,084	2,321	38.1%	1,530 (65.9%)	777 (33.5%)	14 (0.6%)	1,255 (54.0%)	716 (30.8%)	185 (8.0%)	75 (3.2%)	76 (3.3%)	14 (0.6%)

表 1.1.2 回答者数（在籍年次別）

	全体			全体			
	回答数	回答率		回答数	回答率		
修士課程	1年目	288	12.4	一貫制博士課程	1年目	26	1.1
	2年目	251	10.8		2年目	29	1.3
	3年目以上	12	0.5		3年目	25	1.1
博士前期課程	1年目	566	24.5	3年制博士課程	4年目	15	0.6
	2年目	485	21.0		5年目	21	0.9
	3年目以上	39	1.7		6年目以上	29	1.3
博士後期課程	1年目	143	6.2	3年制博士課程	1年目	31	1.3
	2年目	124	5.4		2年目	29	1.3
	3年目	95	4.1		3年目	36	1.6
	4年目以上	39	1.7		4年目以上	3	0.1
				無効・無回答	28	1.2	

## 1.2 外国人留学生について（問5）

◎全体の18.4%が外国人留学生。

「あなたは外国人留学生ですか」の問いに、全体で77.0%が「いいえ」と回答している。無回答の4.6%を除くと、回答者のうち18.4%が外国人留学生ということになる。

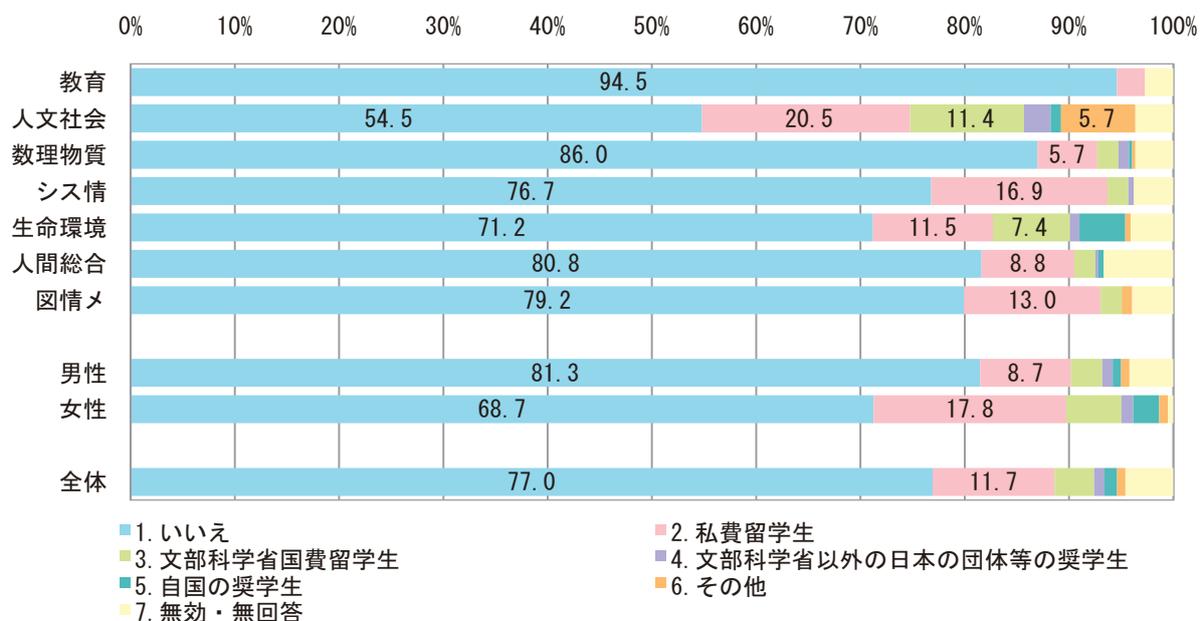
平成22年9月1日現在で、在籍する正規留学生は1,163名（そのうち女性555名）であるので、留学生の回答率は36.5%ということになる。

留学生のうちの63.7%（全体の11.7%）が私費留学生であり、文部科学省国費留学生がそれに次ぎ、20.5%を占める。その他の日本の団体等の奨学生ならびに自国の奨学生が、それぞれ5.2%と6.3%である。男女別では、留学生数ではほぼ対等であり、割合からいえば、母数となる回答者数で女性が男性の半分であるので、女性の留学生の率が高くなっている。

研究科別にみると、留学生が多い研究科は、人文社会科学研究科（41.5% [研究科の全回答数に対する留学生の割合。以下同様。]）が飛びぬけており、生命環境科学研究科（24.7%）、システム情報工学研究科（19.5%）が続く。このうち、留学生の内訳に関しては、生命環境科学研究科において、国費留学生の割合が留学生うちの29.9%と際立って高い点が注目される。なお、これらの数値は在籍数で計算した場合とほぼ平行している。

前回の調査（平成20年度）では、外国人留学生の割合が全体で11.5%であったので、6.9%の増加である。研究科別では、教育研究科を除くすべての研究科で留学生の割合が増えており、とりわけ人文社会科学研究科と生命環境科学研究科における伸び率が高い。

図 1.2 外国人留学生（研究科別、男女別、全体）



### 1.3 社会人の経験について（問6）

◎全体の22.4%が社会人の経験あり。

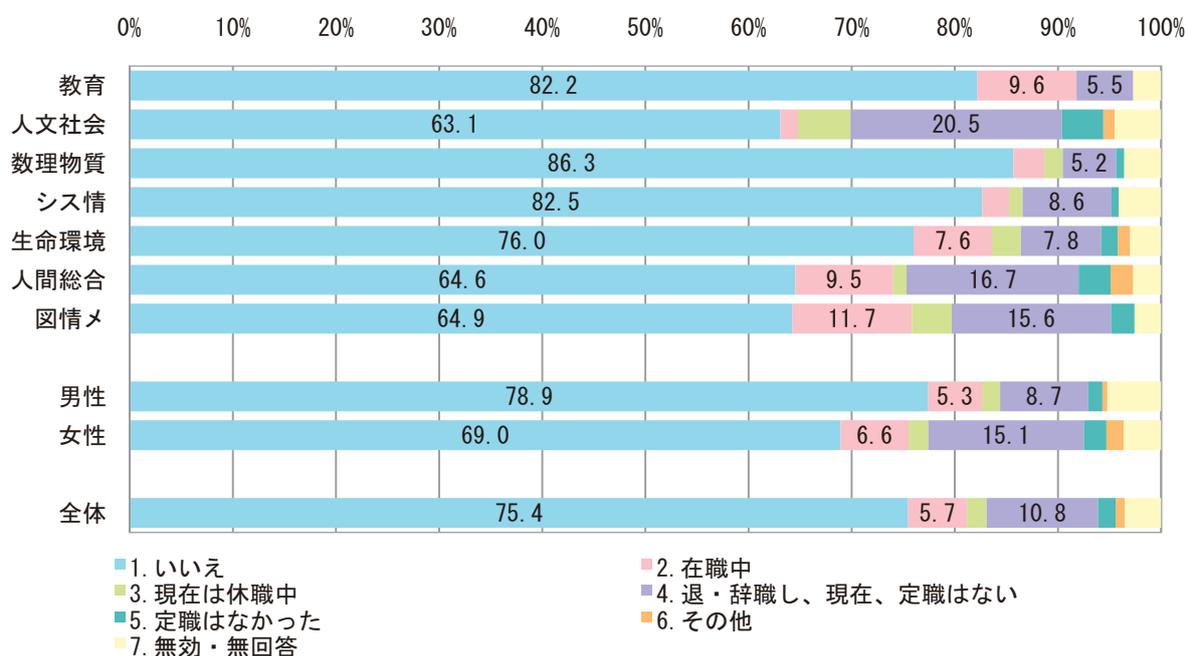
「社会人の経験がありますか」の問いに対して、社会人の経験が「ない」と答えた者の割合は75.4%である。無回答の3.5%を除くと、21.1%が何らかの形で社会人の経験を持っていることになる。前回の調査（平成20年度）では20.6%（ビジネス科学研究科を除く）であったので、微増という結果になっている。

社会人経験のあるものの中では、現在も在職中のものは27.3%（全体の5.7%）、現在休職中の者は8.8%（全体の1.9%）である。内訳として最も多いのは、「退・辞職し、現在、定職はない」者で、51.5%（全体の10.8%）である。前回の調査では、在職中32.7%、休職中6.8%、退・辞職51.1%であったので、今回、在職中が少し減り、休職中が少し増えた結果になっているが、大きな変動はみられない。

研究科別にみると、何らかの形で社会人の経験を持つ学生の多い研究科は、人間総合科学研究科（32.7%）、図書館情報メディア研究科（32.5%）、人文社会科学研究科（32.4%）である。この中では、人文社会科学研究科はこの2年間で社会人経験者が7.6%増となっており、増加が目立っている。また、同研究科では、「退・辞職し、現在、定職はない」者が63.2%（全体の20.5%）となっており、高い割合を占めている。

社会人経験者の割合が低い研究科は、数理物質科学研究科（10.1%）、システム情報工学研究科（13.4%）、教育研究科（15.1%）である。

図 1.3 社会人の経験（研究科別、男女別、全体）



## 1.4 職場の理解について（問7）

- ◎全体の68.7%は全面的な理解を得られている。
- ◎職場の制度を利用した割合は19.9%と前回より微増している。

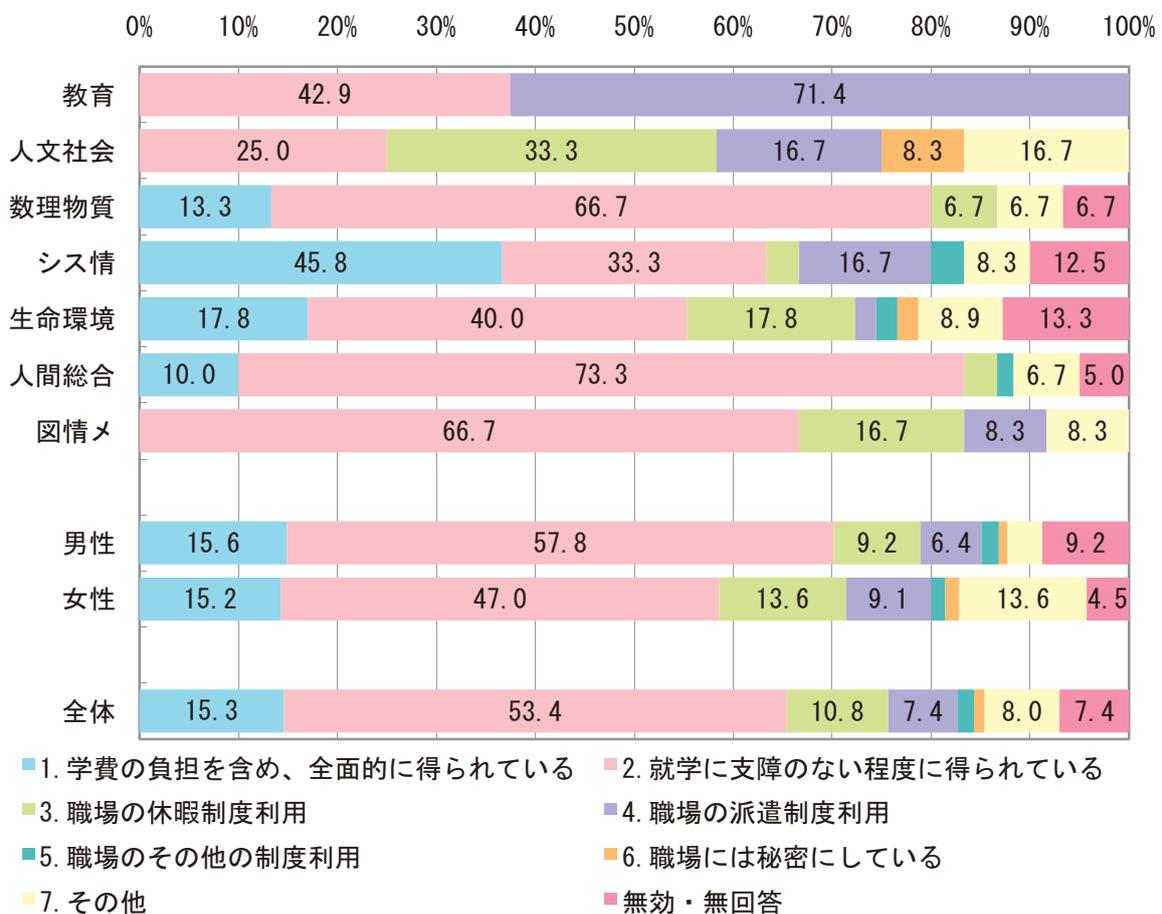
問6で「現在も在職中」または「現在は休職中」と答えた者（全体の7.6%）に対して、「筑波大学大学院に入学するにあたって職場の理解は得られていますか」と尋ねた。全体で「学費の負担を含め、全面的に得られている」が15.3%、「就学に支障がない程度に得られている」が53.4%で、合わせて全体の68.7%である。

職場の制度を利用しているケースは、休職制度（10.8%）、派遣制度（7.4%）、その他の制度（1.7%）を合わせて19.9%で、2年前の前回（16.6%）に比べると微増している。

「学費の負担を含め、全面的に得られている」が男性15.6%に対して、女性も15.2%と前回（2.4%）から増加しており、職場の理解をより得やすくなっていることが推測される。

研究科別にみると、何らかの制度を利用していると回答した者が多い研究科として、教育研究科（派遣制度71.4%）、人文社会科学研究科（休暇制度33.3%、派遣制度16.7%）と際立っている。また、職場には秘密にしている者の割合は全体で1.1%と減少している。

図 1.4 職場の理解（研究科別、男女別、全体）



### 1.5 筑波大学大学院を志望した主な理由について（問 8）

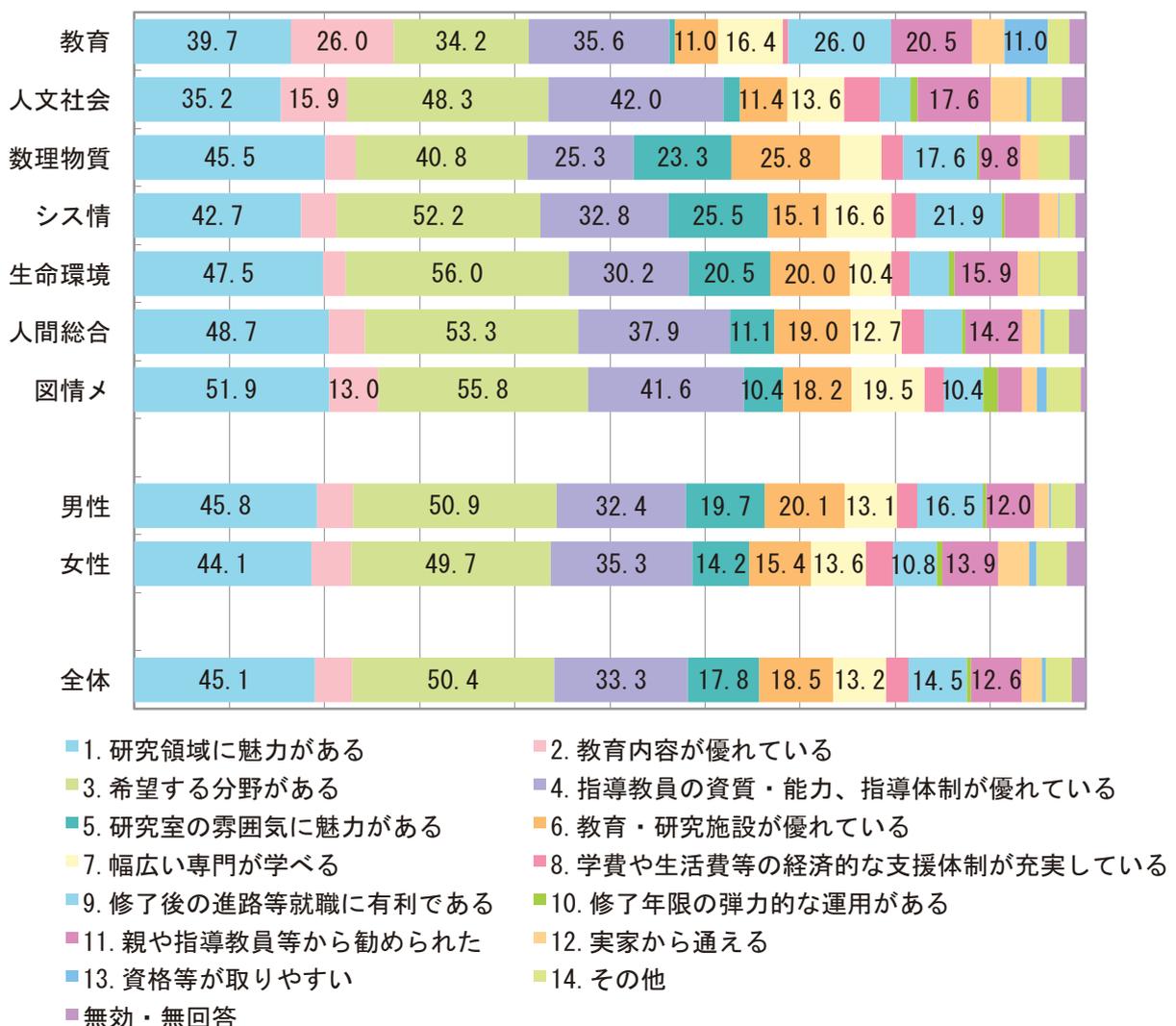
- ◎志望動機として多いのは「希望分野」「研究領域」「指導教員」。
- ◎「研究室の雰囲気」「修了後の進路等就職に有利」が増。

筑波大学大学院を志望した理由について 14 項目の中から 3 つ以内の選択で回答してもらった。志望動機の中で最も多かったのは「希望する分野がある」(50.4%) であり、次いで「研究領域に魅力がある」(45.1%)、「指導教員の資質・能力」(33.3%) となっており、2 年前の前回と上位項目に変化はなかった。

それ以外の理由を選んだ学生はいずれも全体の 2 割以下であり、「研究室の雰囲気」「修了後の進路等就職に有利」が前回より微増しているが、筑波大学大学院進学者の多くは、大学の教育・研究施設や学費等よりも、研究環境に重きを置いて進学先を決めていることがうかがえる。

研究科別にみえていくと、研究科間に大きな差異は認められないが、教育研究科では「教育内容が優れている」が 26.0% と他研究科に比べて高くなっている。

図 1.5 志望理由（研究科別、男女別、全体）



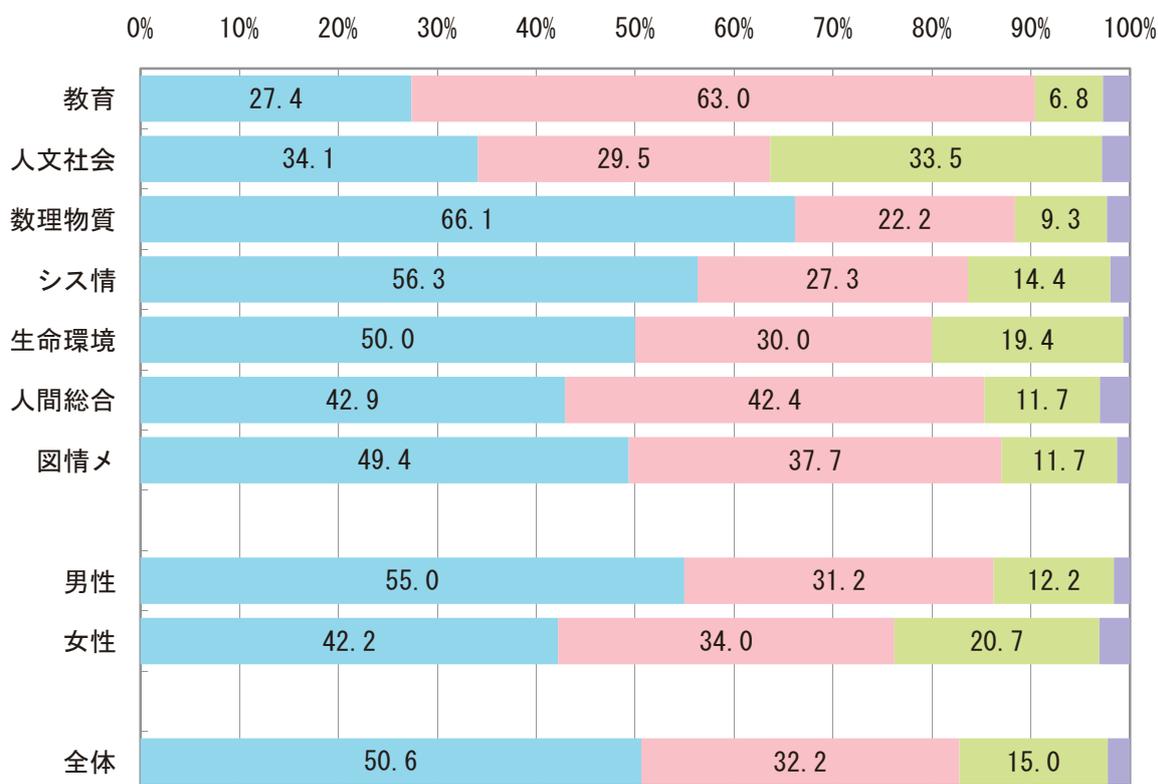
## 1.6 入学前の大学・大学院について（問9）

- ◎全体の半数以上が筑波大学・大学院出身。
- ◎他大学出身者が多いのは教育研究科及び人文社会科学研究科。

筑波大学大学院に入学する前の大学または大学院について尋ねた。全体の内、50.6%は筑波大学または筑波大学大学院に所属していた者であり、その他の日本国内の他大学・大学院は32.2%、国外の他大学・大学院は15.0%である。日本国外の他大学・大学院出身が前回（9.9%）から増加しており、男女間でも女性が前回（13.7%）から20.7%と増えている。

研究科別にみると、筑波大学・大学院出身者が多い研究科は、数理物質科学研究科（66.1%）、システム情報工学研究科（56.3%）、生命環境科学研究科（50.0%）である。また教育研究科では国内の他大学・大学院出身者が63.0%と高く、人文社会科学研究科は国外の他大学・大学院出身者が33.5%と高くなっている。

図 1.6 入学前の大学または大学院について（研究科別、男女別、全体）



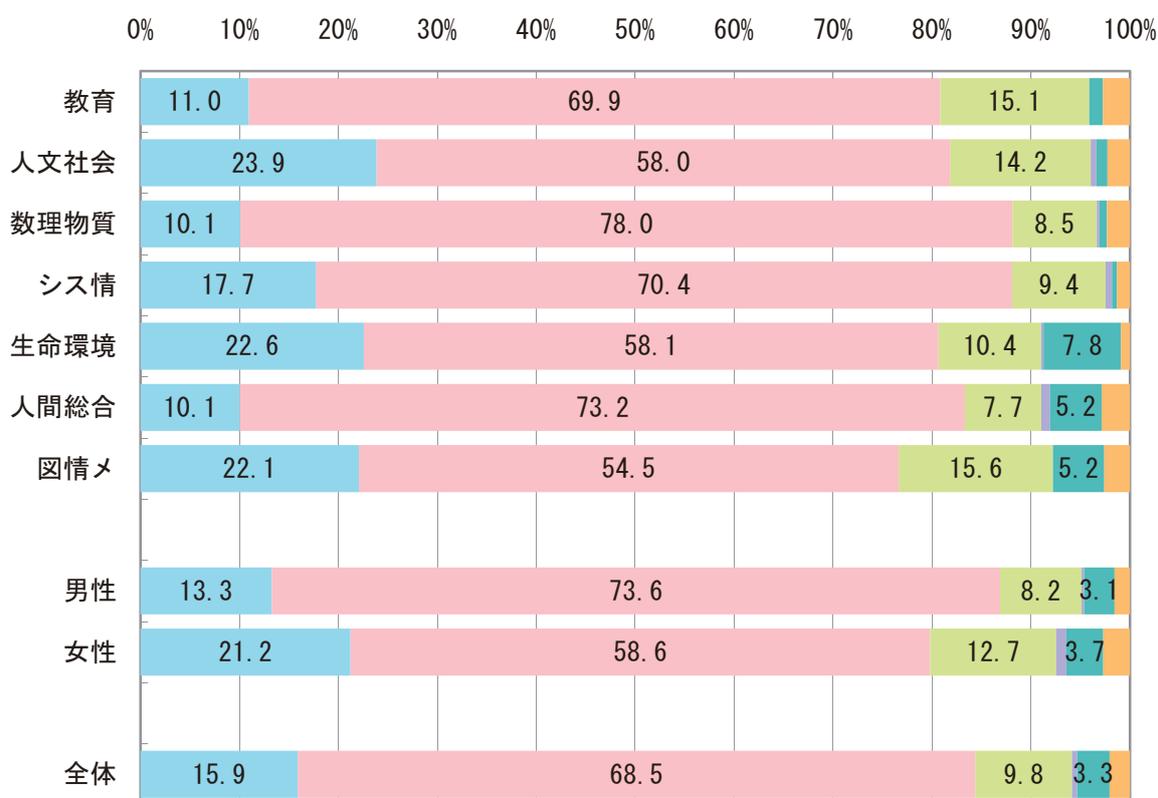
- 1. 筑波大学・大学院
- 2. 日本国内の他大学・大学院
- 3. 日本国外の大学・大学院
- 無効・無回答

## 1.7 現在の住まいについて (問 10)

- ◎大学院生の大半（68.5％）は民間のアパート・マンションに住んでいる。
- ◎男性に比べ女性の学生宿舎入居率が高い。

現在の住まいについて尋ねた。大学院生の大半（68.5％）は民間のアパート・マンションなどに住んでおり、その他では「筑波大学学生宿舎」（15.9％）と「親と同居」（9.8％）となっており、前回の調査と比べても大きな変化は見られない。研究科別には有意な差は見うけられないが、女性では、「筑波大学学生宿舎」（21.2％）「親と同居」（12.7％）と男性の割合（それぞれ13.3％、8.2％）より高くなっている。

図 1.7 現在の住まい（研究科別、男女別、全体）



- 1. 筑波大学学生宿舎
- 2. 民間のアパート・マンション等
- 3. 親と同居
- 4. 親戚・知人宅
- 5. その他
- 無効・無回答

## 1.8 学生宿舎への入居希望について（問 11）

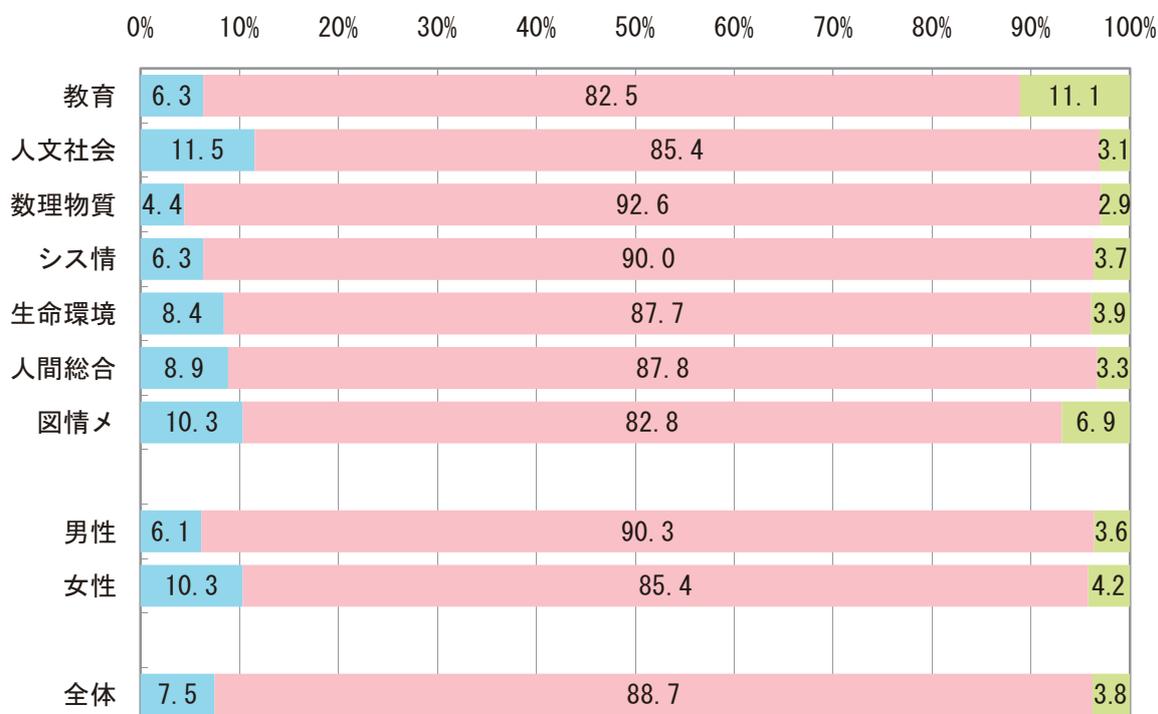
◎学生宿舎以外に現在居住している者で入居希望しないが88.7%。

◎男性に比べ、女性の入居希望率が高い。

問 10 で筑波大学学生宿舎に現在住んでいない者に対して、入居希望について尋ねた。その結果は、大半（88.7%）が学生宿舎への入居を希望していない。男女の違いでは、女性の「希望する」が10.3%に対して、男性は6.1%と低くなっている。しかし、割合は少ないながらも、150人程度の大学院生は、経済的な理由などにより学生宿舎への入居を希望している。

研究科間では、「希望する」との回答が人文社会科学研究科(11.5%)と図書館情報メディア研究科(10.3%)で幾分高くなっており、これは男女の違いと相関していると推測される。

図 1.8 学生宿舎への入居希望（研究科別、男女別、全体）



■ 1. 希望する    ■ 2. 希望しない    ■ 無効・無回答

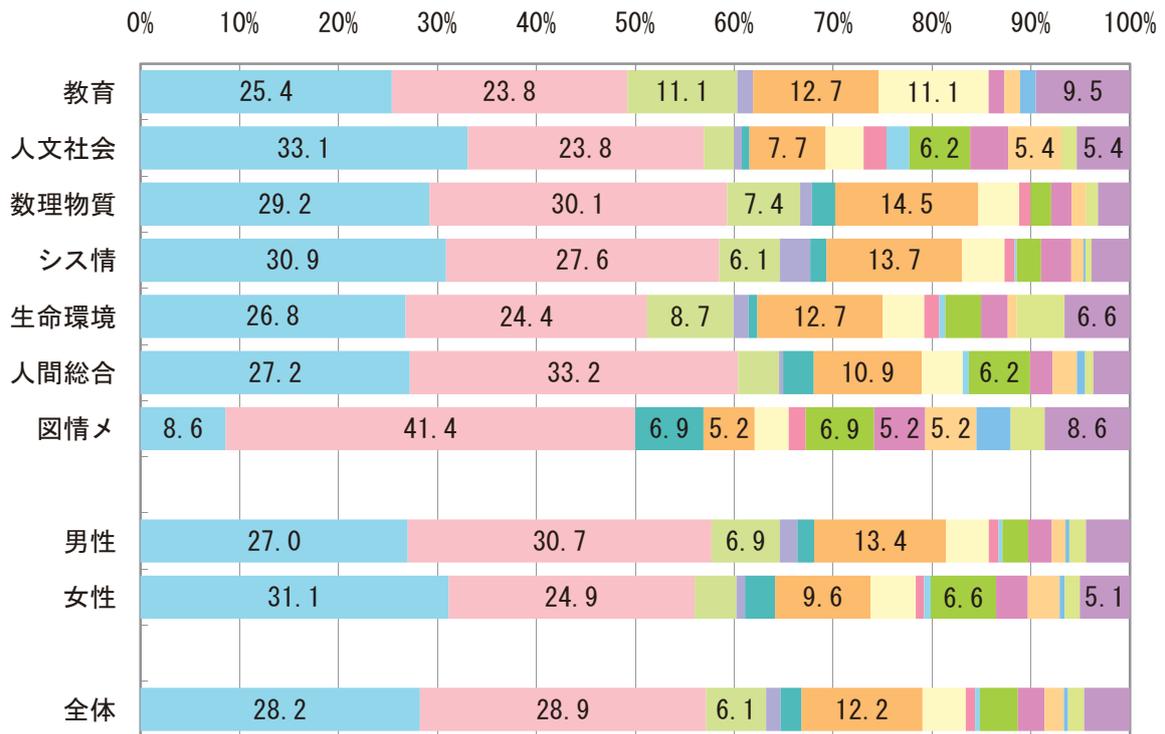
## 1.9 現在の居住地について（問 12）

◎大学院生の約8割がつくば市内に居住している。

現在の居住地について尋ねた。その結果、地理的には約8割（79%）がつくば市内に居住している。残りは県内の他の地域や近郊の東京都・埼玉県・千葉県などに住んでいる。

もう少し細かくみると、つくば市内では「天久保」「春日」で57.1%、「桜」まで含めると6割以上となっている。前回よりも1割以上も増えており、依然としてこの3地域に集中していることがわかる。

図 1.9 現在の居住地（研究科別、男女別、全体）



- 1. つくば市 天久保
- 2. つくば市 春日
- 3. つくば市 桜
- 4. つくば市 柴崎
- 5. つくば市 吾妻
- 6. (筑波大学外でつくば市内) その他
- 7. 茨城県南地域
- 8. 茨城県西地域
- 9. (つくば市以外で茨城県内) その他
- 10. 東京都
- 11. 千葉県
- 12. 埼玉県
- 13. (茨城県外で関東地方) その他
- 14. 上記以外の地域
- 無効・無回答

## 第2章 生活全般について

### 2.1 主たる家計支持者について（問13）

◎博士後期課程の半数近くは独立生計者。

主たる家計支持者について尋ねた。全体では、家計支持者が「本人」か「配偶者」である場合は25.2%、「父親・母親」である場合は72.7%となっている。この結果は、前回調査（平成20年度）においてビジネス科学研究科を除いて計算した数値とほぼ同様である。

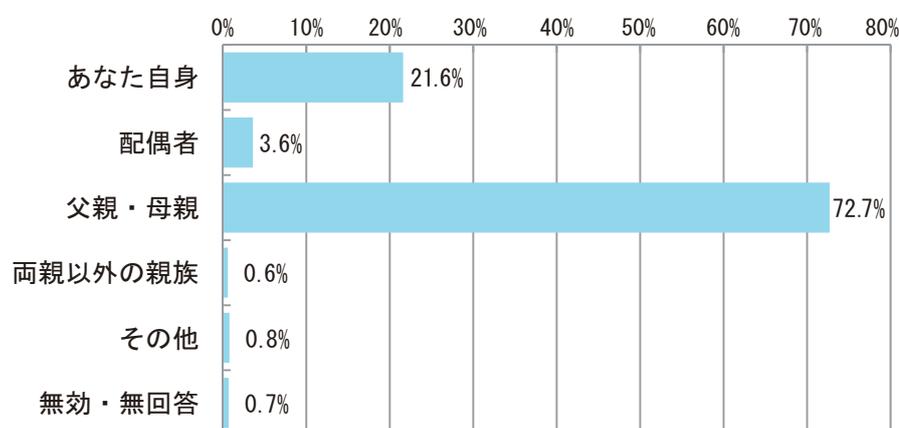
修士課程では「本人」18.8%、「配偶者」1.8%、博士前期課程および一貫制博士課程1、2年生では「本人」16.4%、「配偶者」2.7%のように、「本人」と「配偶者」を合わせた割合が2割程度であるが、博士後期課程および一貫制博士課程3年次以上では、「本人」38.7%、「配偶者」8.4%といわゆる独立生計者が半数近くになっている。また、3年制博士課程では、「本人」56.6%、「配偶者」11.1%であった。

年齢別では、30歳以上の学生に限ると、「本人」59.8%、「配偶者」17.3%と、年齢が上がるにつれて、父母等からの経済支援に頼らず修学している状況を見ることが出来る。

留学生では、主たる家計支持者が「本人」44.5%、「配偶者」4.7%であった。また、「父親・母親」である割合は44.9%であった。

男女別にみると、「本人」が主たる家計支持者であるのは、男性21.8%、女性21.7%でほとんど違いがみられないが、「配偶者」については、男性1.4%、女性8.0%とはっきり差が出ている。

図2.1 主たる家計支持者（全体）



## 2.2 世帯の年間収入について（問 14）

◎年間収入が400万円未満の世帯が4割強を占めている。

「あなたを学資支援している世帯の年間年収について」の調査は今回が初めてである。表 2.2 にみるように、「分からない」がもっとも多く 22.6%となっているが、授業料免除や奨学金の申請をしていない学生は親の年間収入まで把握していないためであると思われる。ちなみに、学群生向けの同質問では「分からない」が 42.7%に上っている。

年間収入が 200 万円未満の世帯が 11.6%、200 万円～ 300 万円が 9.6%、300 万円～ 400 万円が 5.6%などとなっている。300 万円未満を除くと、1000 万円以上を含めて、収入額の層はほぼ均等に広がっている形である。回答率を「学資支援は受けていない」「分からない」および「無効・無回答」を除いて計算しなおしてみると、表の右側のような結果になる。この集計では、年間収入が 400 万円未満の世帯が 43.1%となる。また、学群生の回答率（計算しなおしたもの）と比べてみると、学群生では 200 万円未満の世帯が 7.8%、200 万円～ 300 万円が 9.8%、300 万円～ 400 万円が 10.5%、1,000 万円以上が 15.4%となっている。学群生でも収入額の層はほぼ均等に広がっているが、大学院生の方が収入額が低い方の割合が高くなっている。これは大学院生に独立生計者が多いためであろう。

外国人留学生では、年間収入が 200 万円未満の世帯が 36.5%、年間収入が 400 万円未満の世帯が 54.8%を占めている。

表 2.2 世帯の年間収入（全体）

		全体		
		回答数	回答率	11、12 および無回答を除いた回答率
1	200 万円未満	268	11.6	18.8
2	200 万円以上～ 300 万円未満	221	9.6	15.3
3	300 万円以上～ 400 万円未満	130	5.6	9.0
4	400 万円以上～ 500 万円未満	120	5.2	8.3
5	500 万円以上～ 600 万円未満	130	5.6	9.0
6	600 万円以上～ 700 万円未満	112	4.8	7.8
7	700 万円以上～ 800 万円未満	106	4.6	7.4
8	800 万円以上～ 900 万円未満	94	4.1	6.5
9	900 万円以上～ 1,000 万円未満	118	5.1	8.2
10	1,000 万円以上	141	6.1	9.8
11	学資支援は受けていない	281	12.1	
12	分からない	523	22.6	
	無効・無回答	70	3.0	
	合計	2,314	100.0	100.0

### 2.3 奨学金の受給について（問 15）

- ◎大学院生全体の半数以上が何らかの奨学金を受けている。
- ◎日本学生支援機構の奨学金受給者は減少傾向にある。

奨学金の受給について尋ねた（複数回答であったが、回答率の合計が100.7%であるので、実際の複数回答者は10数人である）。大学院生で何らかの奨学金を受給している学生の割合は全体の56.4%である。前回調査でビジネス科学研究科を除いた割合は58.3%であったので、2年前よりわずかに受給者が減少した格好である。

日本学生支援機構の奨学金の貸与を受けている学生の割合は42.1%で、前回調査時の48.2%よりやや低くなっている。奨学金受給者の内訳では、73.7%が日本学生支援機構の貸与型奨学金であるが、前回調査時の約84.4%と比較すると11%ほど低くなっている。それ以外の「日本の民間団体・財団等の奨学金」および「日本学術振興会の特別研究員」が（奨学金受給者の内訳で）それぞれ1.5%ほど増加している。

修士課程、博士前期課程および一貫制博士課程1、2年生で計算してみると、何らかの奨学金を受けている学生は54.9%、博士後期課程および一貫制博士課程3年次以上では63.1%となり、年次が上がるにつれて、奨学金受給率は高まる。しかし、標準履修年次を超えて在籍している学生にとっては奨学金は得にくく、受給率は33.0%に低下する。

留学生についてみると、国費留学生と私費外国人留学生学習奨励費等の何らかの奨学金を受けている学生は、留学生全体の57.2%であった。留学生の奨学金受給者は増加している。

なお、「その他」への回答では、つくばスカラシップ、NIMS ジュニア研究員、JICA スポンサーシップがそれぞれ数件あり、やや目立っている。

表 2.3 奨学金の受給者（全体）

		全体	
		回答数	回答率
1	受けていない	996	43.0
2	日本学生支援機構の奨学金	975	42.1
3	私費外国人留学生学習奨励費	50	2.2
4	地方公共団体の奨学金	10	0.4
5	日本の民間団体・財団等の奨学金	62	2.7
6	日本学術振興会の特別研究員	67	2.9
7	文部科学省国費留学生	90	3.9
8	自国政府の奨学金（留学生の場合）	28	1.2
9	その他	41	1.8
	無効・無回答	11	0.5
	合計	2,330	

## 2.4 「つくばスカラシップ」制度について（問 16）

◎ 「つくばスカラシップ」の認知度は 25%。

平成 21 年度に創設された、本学独自の奨学金制度「つくばスカラシップ」に関する調査は、当然ながら、今回が初めてである。大学院生で「つくばスカラシップ」について「知っている」が 25.2%、「知らない」が 74.3%となっており、学群生の調査結果がそれぞれ 18.4%と 80.6%であるので、大学院生の方が学群生よりも若干認知度が高いという結果である。

研究科別では、「知っている」割合が高いのは、人文社会科学研究科 38.1%と教育研究科 34.2%である。一方、数理工学物質科学研究科は「知らない」割合が 83.5%で、認知度がもっとも低い。

留学生では「つくばスカラシップ」について「知っている」が 29.4%、「知らない」が 69.9%となっており、若干留学生の認知度が一般学生よりも高い傾向にある。

今後、ホームページ等を活用した積極的な周知や修学支援の拡充が必要と思われる。

図 2.4.1 つくばスカラシップ制度（全体）

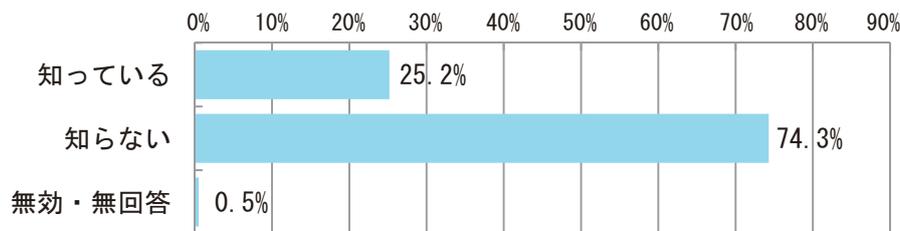
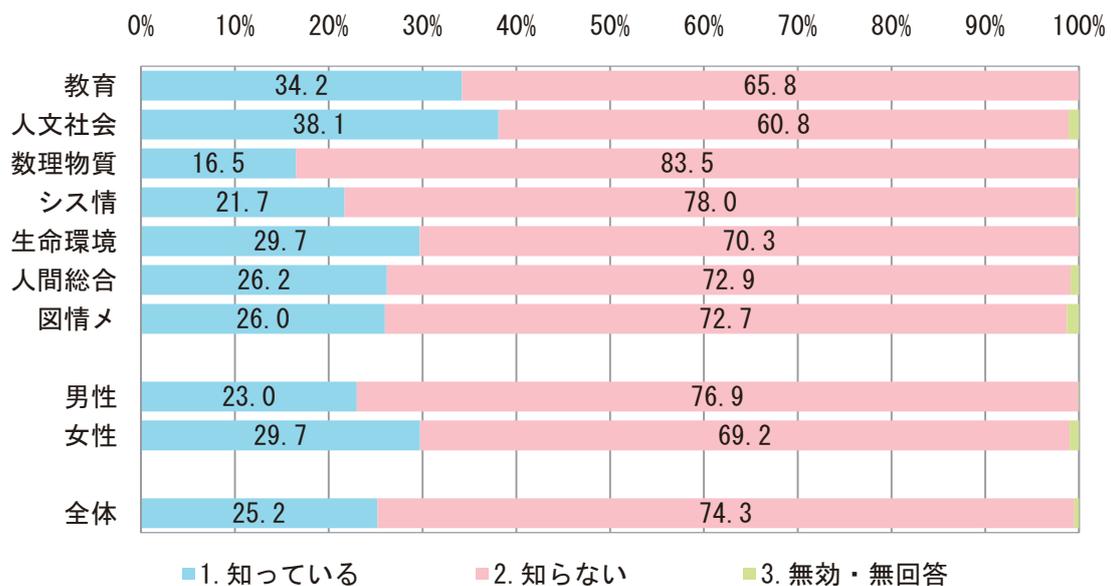


図 2.4.2 つくばスカラシップ制度（研究科別、男女別）



## 2.5 希望する経済支援について（問 17）

◎大学院生全体の8割以上の学生が何らかの経済支援を希望している。

希望する経済支援についての調査は今回が初めてである。大学院生全体の8割以上の学生が何らかの経済支援を希望しており、希望する経済支援として「給付型の奨学金」が57.5%、「授業料免除」が56.6%であった。授業料の支払いや生活費のために「一時貸付金」を希望する学生も6.3%あった。研究科別では、人文社会科学研究科と人間総合科学研究科で支援の要望が高い傾向がある。

留学生では9割弱の学生が何らかの経済支援を希望しており、希望する経済支援として「給付型の奨学金」が51.1%、「授業料免除」が57.4%であった。授業料の支払いや生活費のために「一時貸付金」を希望する学生も7.5%あった。

今後、給付型の奨学金や授業料免除の拡充が望まれる。また、授業料の支払や生活費が不足した場合の一時的な貸付金等の支援策が必要である。

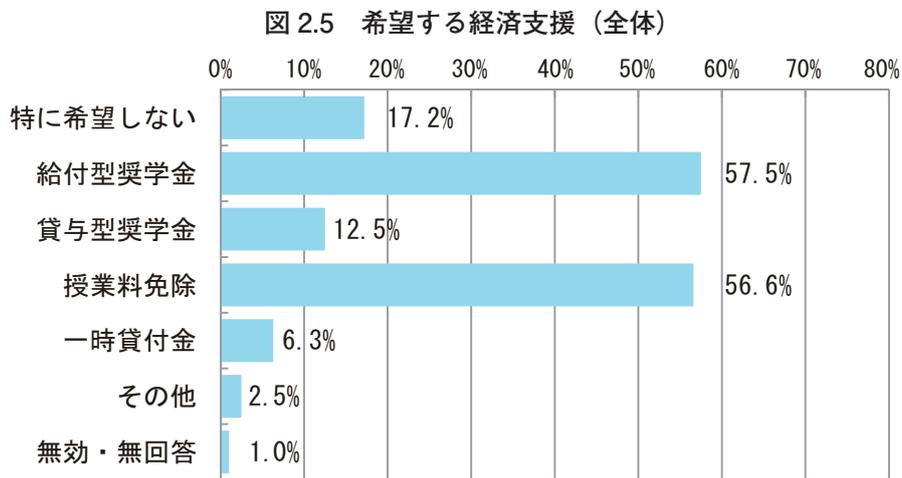


表 2.5 希望する経済支援（研究科別、男女別）

	希望しない	給付型奨学金	貸与型奨学金	授業料免除	一時貸付金	その他	無回答
教育	20.5	53.4	2.7	46.6	4.1	1.4	1.4
人文社会	10.2	63.6	9.1	63.6	7.4	1.7	2.8
数理物質	17.3	55.0	12.9	52.5	2.6	1.8	1.3
シス情	21.2	54.5	15.1	55.8	5.1	1.8	0.3
生命環境	19.6	56.2	11.5	55.1	7.4	2.5	0.7
人間総合	12.6	62.8	12.2	60.3	9.2	4.3	0.9
図情メ	18.2	51.9	15.6	57.1	7.8	1.3	0.0
男性	18.5	56.5	13.6	54.3	5.6	2.4	0.7
女性	14.4	59.7	10.4	61.3	7.9	2.7	1.3

## 2.6 1ヶ月の収入について（問18）

◎6万円未満が最も多く全体の40%。

図2.6.1に示すように、大学院生全体を見ると、40.0%が「6万円未満」、18.7%が「6万円以上9万円未満」であり、合わせて58.7%が9万円未満の収入となっている。

前回調査の結果と比較すると、「9万円以上12万円未満」の層が25.2%から14.6%に減少した分、より収入が低い方へシフトしたと見られる。その結果、「9万円未満」の合計割合が前回の43.0%から今回の58.7%へと大幅に上昇したことになり、（前回調査は東京・筑波地区の合算であったことを差し引いても）大学院生を取り巻く経済状況がより厳しくなったことが見て取れる。

図2.6.2には、研究科別・男女別の割合を示した。「9万円未満」の割合に着目すると、最多の教育研究科（64.4%）から、最少の生命環境科学研究科（52.8%）まで、ややバラつきが見られる一方で、男女の差はほとんどない。

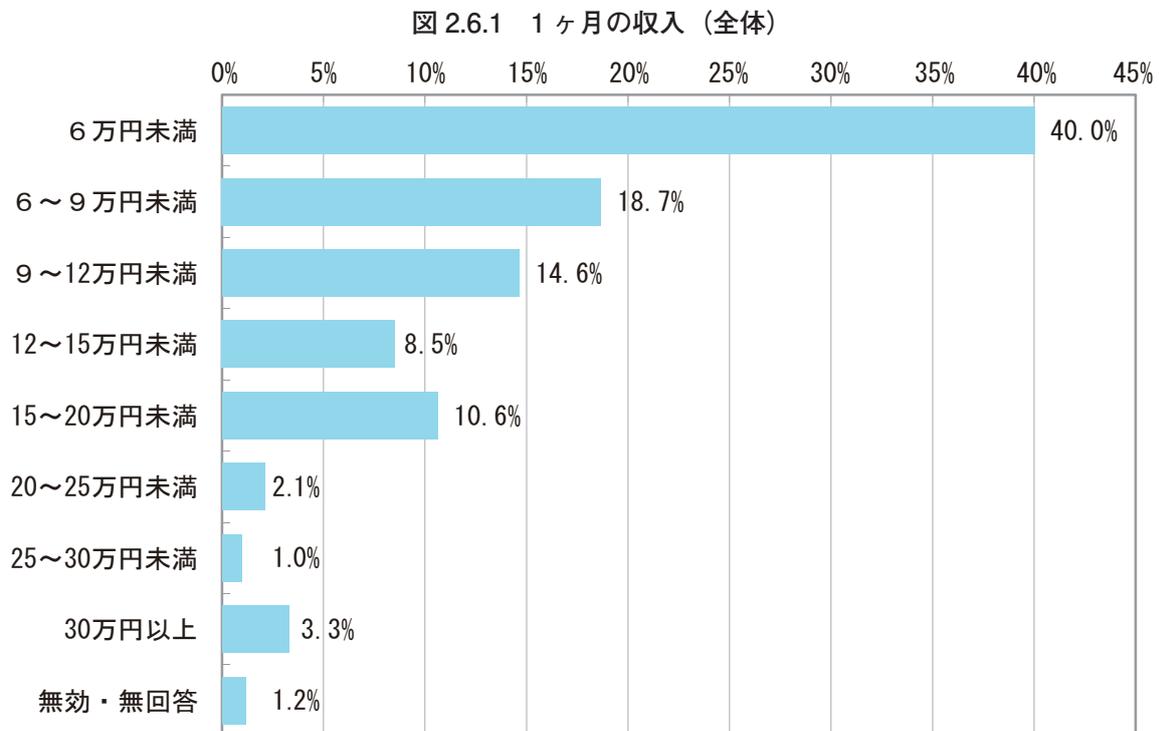
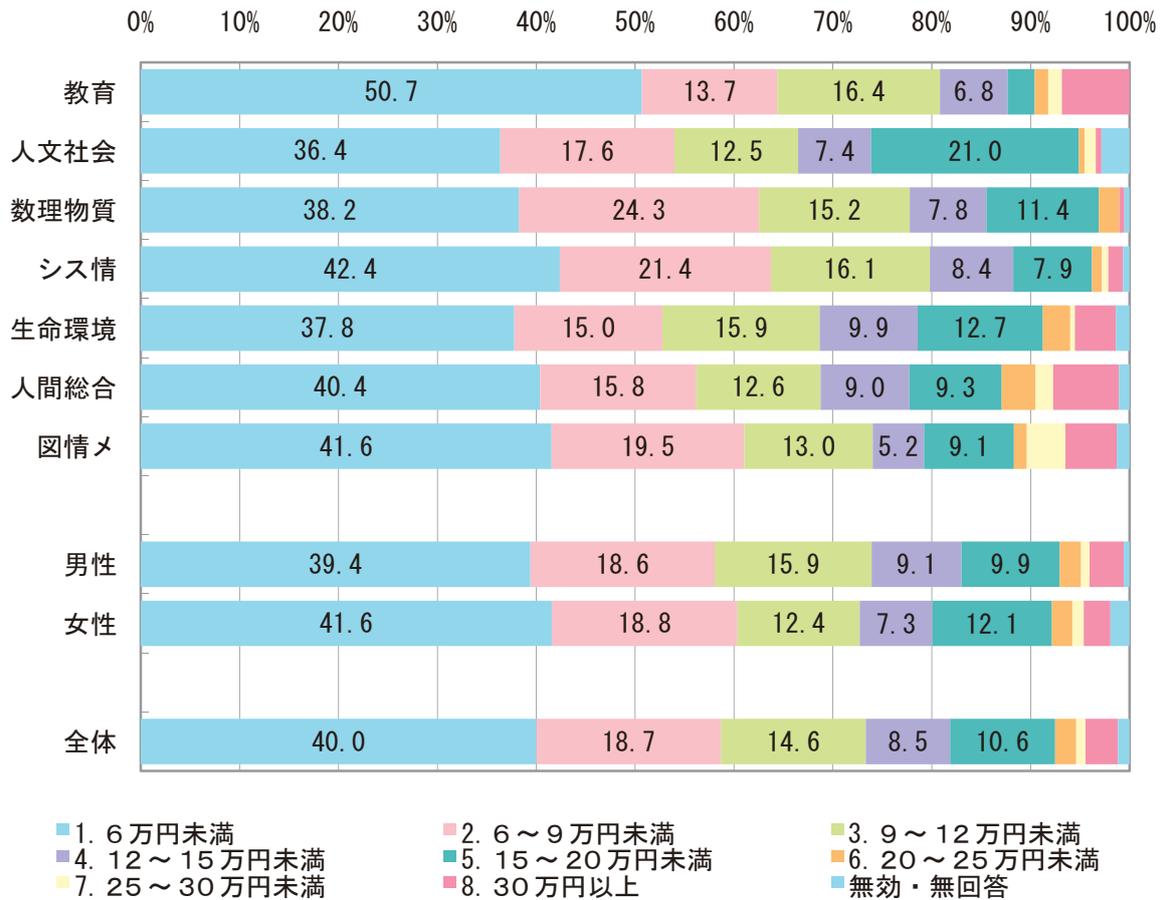


図 2.6.2 1ヶ月の収入（研究科別、男女別）



## 2.7 収入源について (問 19)

◎約半数が「奨学金」と回答。

収入源について尋ねた。図 2.7.1 に示すように、複数回答であるが、回答の多い順に、奨学金（49.0%）、仕送り（38.4%）、筑波大学での TA・TF（28.2%）、筑波大学以外での定期的アルバイト（26.0%）と続いている。有職者として給与を得ている者は 6.7%にとどまり、一方で、貯金を取り崩している者が 8.3%存在している。

図 2.7.2 には研究科別・男女別の割合を示した。「有職者としての給与」の割合が最多なのは図書館情報メディア研究科（14.3%）、最少は人文社会科学研究科（0.6%）である。また、「仕送り」の回答割合は、最多の教育研究科（46.6%）から最少の人文社会科学研究科（21.6%）まで、大きな差がある。人文社会科学研究科では、仕送りが少ない分、「筑波大学での TA・TF」の回答が最多（42.0%）となっており、全体としてみれば、「奨学金+ TA・TF」が重要な収入源になっていると見られる。

「その他」としては、日本学術振興会特別研究員としての研究奨励金を挙げた回答が一定数含まれている。

図 2.7.1 収入源（全体）

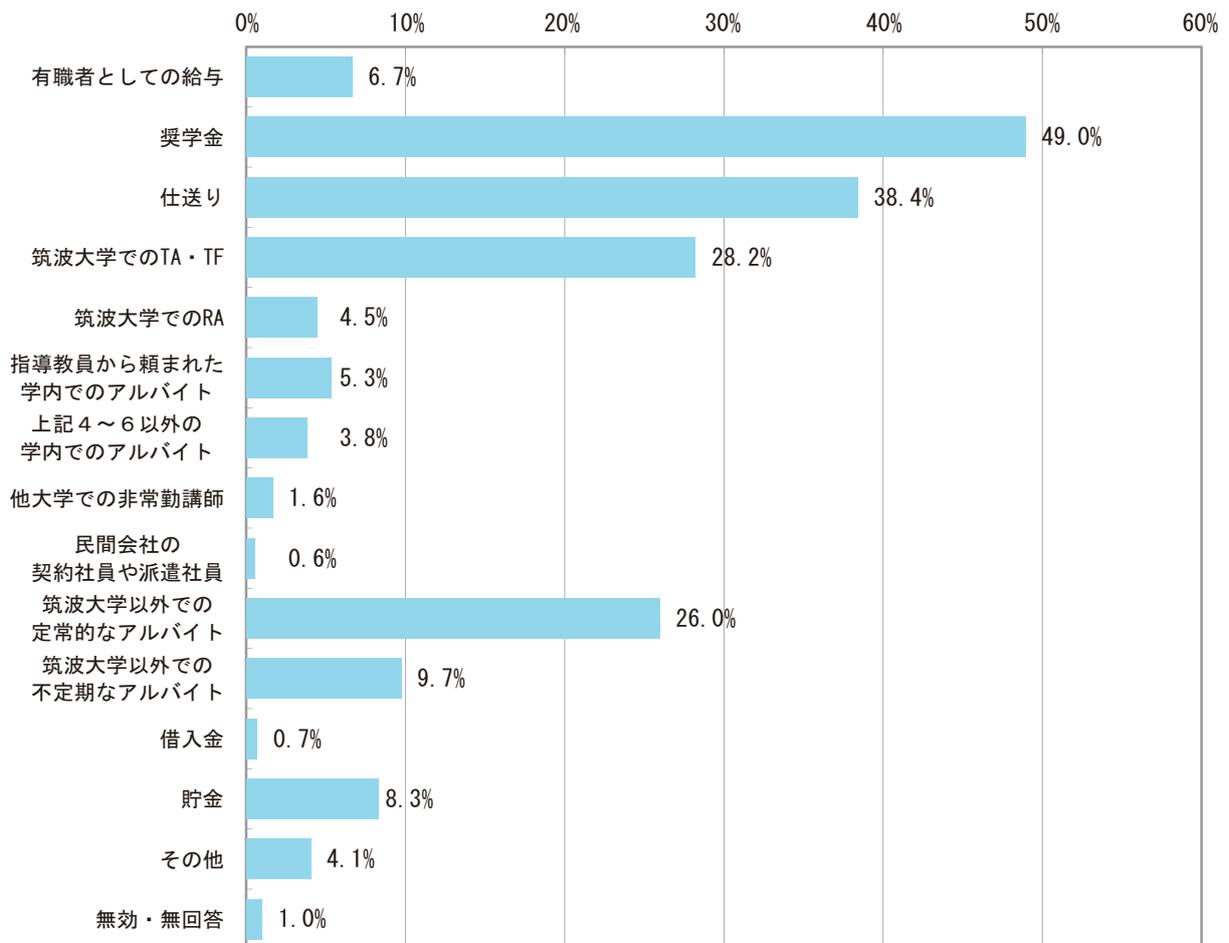
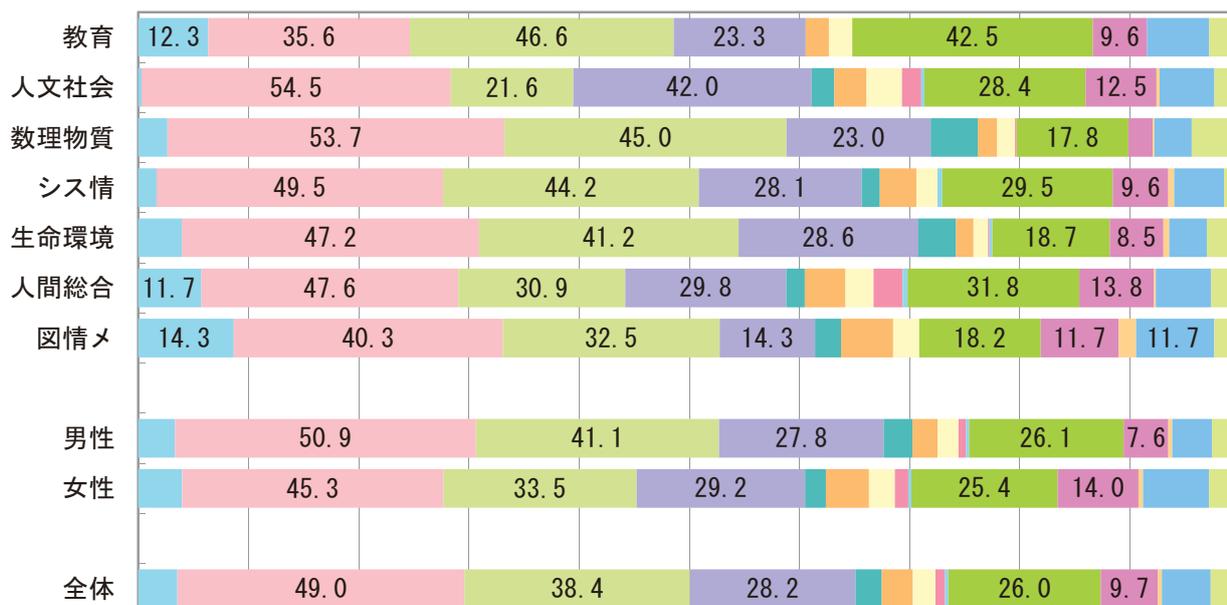


図 2.7.2 収入源（研究科別、男女別、全体）



- 1. 有職者としての給与
- 2. 奨学金
- 3. 仕送り
- 4. 筑波大学でのTA・TF (ティーチング・アシスタント, ティーチングフェロー)
- 5. 筑波大学でのRA (リサーチ・アシスタント)
- 6. 指導教員から頼まれた学内でのアルバイト
- 7. 上記4～6以外の学内でのアルバイト
- 8. 他大学での非常勤講師
- 9. 民間会社の契約社員や派遣社員
- 10. 筑波大学以外での定常的なアルバイト
- 11. 筑波大学以外での不定期なアルバイト
- 12. 借入金
- 13. 貯金
- 14. その他
- 無効・無回答

## 2.8 1ヶ月の生活費・研究活動費について（問20）

◎「足りている」のは約半数。

生活費・研究活動費について尋ねた。「充分である」と「まあまあ足りている」を合わせると50.2%となるが、一方で「ぎりぎりである」という回答が30.0%ある。さらに無回答を除くと、残り18.6%が「不足」と答えたことになる。この割合は、前回調査からはほとんど変化していない。

図2.8において、「授業料の納付ができない」以下の選択肢は複数回答である。最も多いのは「研究時間確保でアルバイトができない（12.0%）」であるが、「その他」の中には、逆に「アルバイトのため研究時間が取れない／睡眠時間が取れない」という回答もある。

表2.8に研究科別の分布を示した。「不足」という回答の割合が多い研究科は、図書館情報メディア研究科、人文社会科学研究科、人間総合科学研究科の順になっている。男女別では、「不足」と答えた割合が男性15.4%、女性25.1%と、やや顕著な差が見られた。

図 2.8 1ヶ月の生活費・研究活動費（全体）

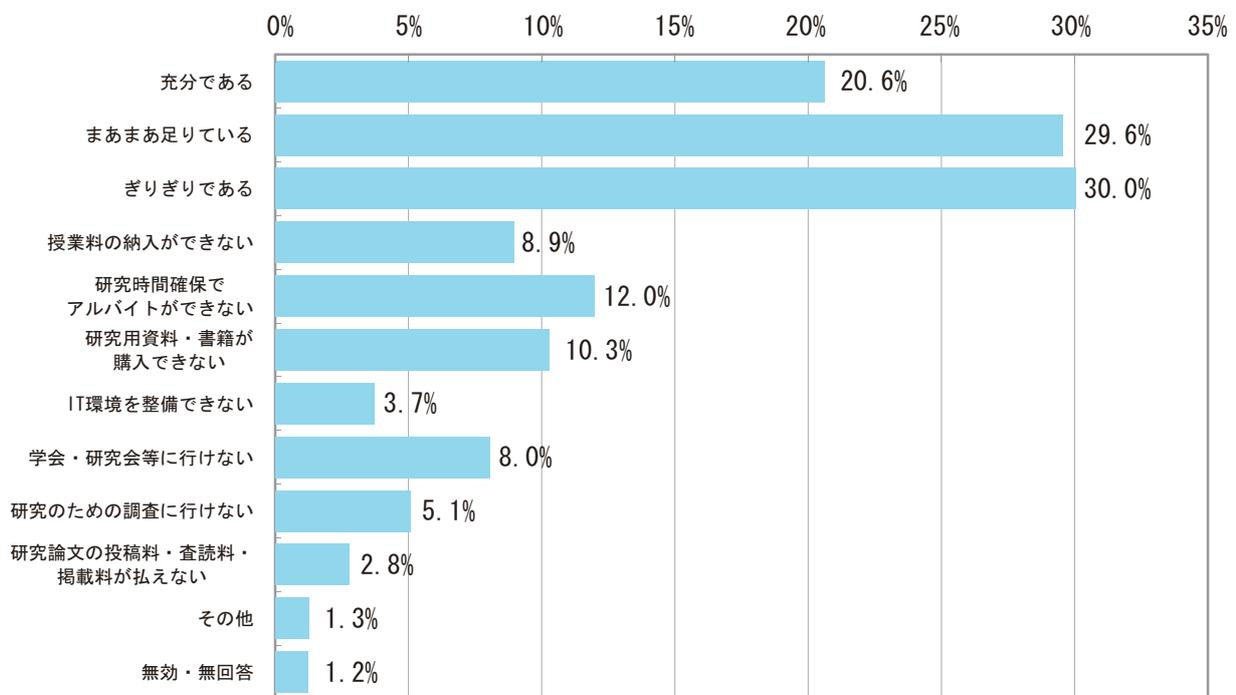


表 2.8 1ヶ月の生活費・研究活動費（研究科別）

研究科	回答数	充分	まあまあ	ぎりぎり	不足	無回答
教育	73	23.3	31.5	28.8	15.0	1.4
人文社会	176	16.5	25.0	33.5	23.3	1.7
数理物質	387	23.5	32.3	27.1	16.1	1.0
シス情	604	24.8	29.6	29.5	15.3	0.8
生命環境	434	23.7	30.2	26.7	18.7	0.7
人間総合	557	13.6	28.2	34.6	22.0	1.6
図情メ	77	13.0	31.2	28.6	25.9	1.3
計（含無回答）	2,314	20.6	29.6	30.0	18.6	1.2

## 2.9 アルバイトの種類について（問 21）

◎アルバイトをしているのは全体の 43%、飲食店での業務が第 1 位。

平成 22 年度中に筑波大学以外でアルバイトをした方に回答してもらった。全回答者のうち約 43% が本設問に回答しており、「アルバイトをしている者」と考えられる。この値は前回調査とほぼ同様である。表 2.9.1 には、その割合を研究科別にまとめたものを示す。最多 54.8%（教育研究科）から最少 30.0%（数理物質科学研究科）まで幅があり、かなりのバラつきが見られる。なお、男女別では、男性 40.8%、女性 47.9% となり、アルバイトをしている割合は、女性の方がやや高かった。

次に、「アルバイトをしている者」を母集合として、従事している業務内容で割合を計算した。「3 つ以内の複数回答」に対する結果は表 2.9.2 のようになり、多い方から、飲食店での業務（28.5%）、飲食店以外の軽労働（15.3%）、塾講師・添削指導（14.2%）、研究所における研究補助（12.3%）の順である。

「その他」としては、「非常勤講師（高校など）」を挙げたものが多く、「ソフトウェア開発」「スポーツ指導」「医師・看護師」など、専攻分野と関連する業務が目立つ。中には「コンビニ」など、「飲食店以外での軽労働」に含めるべきものも多少見られた。

表 2.9.1 アルバイトの有無（研究科別）

研究科	回答数	アルバイトをしている者	
		人数	割合
教育	73	40	54.8
人文社会	176	87	49.4
数理物質	387	116	30.0
シス情	604	283	46.9
生命環境	434	162	37.3
人間総合	557	283	50.8
図情メ	77	28	36.4
計	2,314	1,001	43.3

表 2.9.2 アルバイトの種類（全体）

業務内容	回答数	回答率
家庭教師	108	10.8
塾講師、添削指導	142	14.2
一般事務	44	4.4
研究所における研究補助	123	12.3
特殊技能（翻訳、通訳等）の活用	82	8.2
飲食店でのウェイトラー、ウェイトレス、調理係等	285	28.5
飲食店以外での軽労働（調査、販売、配達等）	153	15.3
建築・土木作業、工事現場、工場等での重労働	18	1.8
建物解体作業、劇薬取扱い作業等の危険作業	1	0.1
その他	210	21.0
無回答を除く回答数	1,001	

## 2.10 アルバイトに費やす時間について（問 22）

◎平均値は 10.5 時間／週。

アルバイトに費やす時間について尋ねた。全回答の平均を取ると、1 週間あたり 10.5 時間となり、前回調査の平均値（8.8 時間）より長くなっている。表 2.10 に研究科別の値を示すが、研究科ごとの平均値には大きなバラつきはないと言える。男女別に見ても、男性 10.4 時間、女性 10.7 時間でほとんど差が見られない。

表 2.10 アルバイトに費やす時間（研究科別、全体）

研究科	1 週間の平均時間
教育	9.9 時間
人文社会	11.4 時間
数理物質	9.5 時間
シス情	10.0 時間
生命環境	11.0 時間
人間総合	10.9 時間
図情メ	11.1 時間
所属無回答	12.0 時間
計	10.5 時間

## 2.11 アルバイトの研究・学修への影響について（問 23）

◎アルバイトをしている者のうち約 6 割が「妨げになっている」。

アルバイトの研究・学修への影響について尋ねた。問 21 でみたように、全回答者のうち約 43%が「アルバイトをしている者」と考えられるが、表 2.11 は、この「アルバイトをしている者」を母集団として計算したもので、全研究科を通算した場合、「かなり／多少妨げになっている」者の合計割合は 59.2%となる。前回調査の値が 53.8%なので、「妨げになっている」と感じる学生の割合が上昇していることになる。なお 59.2%という値を、アルバイトの有無を問わない全回答者に対する割合に換算すると約 25%となり、全学生の約 1/4 に相当する。

同表から研究科別の平均値を見てみると、バラつきが大きいことが分かる。「かなり／多少妨げになっている」の合計が最も多いのは人文社会科学研究科で 71.5%、最も少ないのは図書館情報メディア研究科の 46.4%である。問 22 で見たように、アルバイトの従事時間そのものには大差がないのに、受け止め方の感覚には大きな差が出るようである。「妨げになっていない」とは言っても、「研究そっちのけでアルバイトに精を出している」訳ではないことを期待したい。男女別では、ともに約 6 割となり、ほとんど差は見られない。

表 2.11 アルバイトの研究・学修への影響（研究科別、全体）

研究科	回答数	かなり妨げ		多少妨げ		妨げでない	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合
教育	40	4	10.0	24	60.0	12	30.0
人文社会	87	13	15.5	47	56.0	24	28.6
数理物質	116	10	8.6	54	46.6	52	44.8
シス情	283	20	7.2	136	48.7	123	44.1
生命環境	162	13	8.3	80	51.0	64	40.8
人間総合	283	31	11.0	140	49.5	112	39.6
図情メ	28	3	10.7	10	35.7	15	53.6
所属無回答	2	0	0.0	1	50.0	1	50.0
計	1,001	94	9.5	492	49.7	403	40.7

## 2.12 平均的な起床・就寝時刻について（問 24）

◎平均睡眠時間は7時間00分。

起床時刻と就寝時刻について回答してもらった。単純に平均を計算すると、「24時57分就寝・7時57分起床」という値になり、これらの差から求めた睡眠時間の平均値は7時間00分である。これは、東京地区の平均値の5時間39分より1時間20分程度長い。前回調査の値（平均6時間48分—ただし、このときは東京・筑波両地区の合算）や、今回の学群生の平均値（6時間20分）よりも長くなっており、時間的には余裕のある生活を送っているように見える。前問において、全学生の約25%が「アルバイトが研究・学修の妨げになっている」と回答しているが、平均的には、生活のリズムを崩すところまでは至っていないと思われる。

表 2.12 に研究科別の平均値を示した。おおよそ6.8～7.0時間に集中しているが、図書館情報メディア研究科の7.4時間（＝7時間24分）が最長値であり、やや突出している。

表 2.12 平均睡眠時間（研究科別、全体）

研究科	平均睡眠時間
教育	7.0 時間
人文社会	6.8 時間
数理物質	7.0 時間
シス情	7.2 時間
生命環境	6.9 時間
人間総合	6.8 時間
図情メ	7.4 時間
所属無回答	6.8 時間
計	7.0 時間

## 2.13 学生宿舎の満足度について（問 25、問 26）

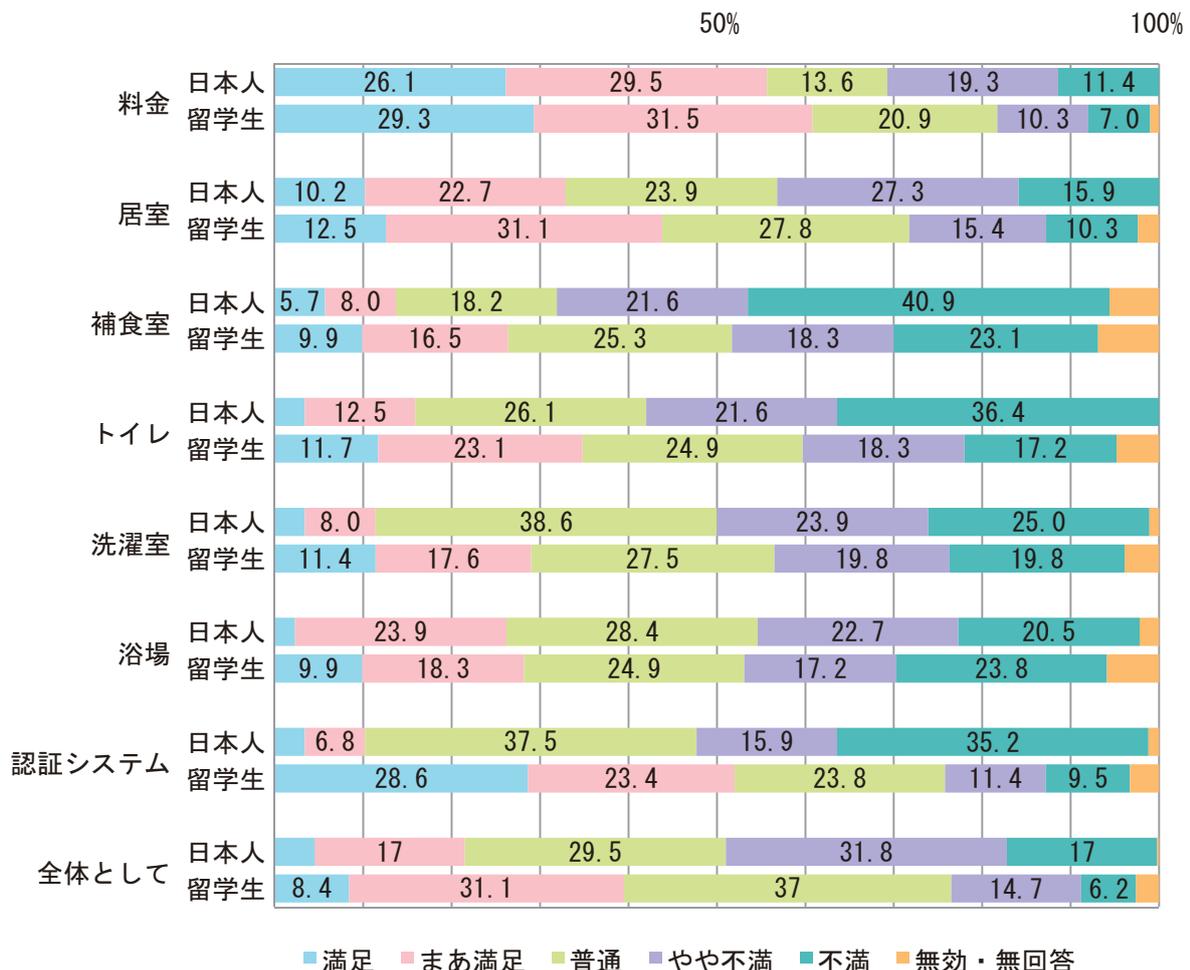
- ◎日本人学生の約半数が「(やや) 不満」。
- ◎留学生入居者の方が満足度が高く、約 4 割が「(まあ) 満足」。

学生宿舎の満足度について、「入居している」または「入居していた」学生にのみ回答を求めた。問 25 において入居棟を記入してもらい、問 26 で新たに「料金」の項目を追加して、全 11 項目により満足度を調査した。また、大学院生においては留学生が増加していることから、日本人学生と留学生の入居者の満足度を比較した。

その結果、料金については、日本人学生・留学生ともに約 6 割の入居者が（まあ）満足している。一方、「補食室」、「トイレ」、「認証システム」は、日本人学生の半数以上が不満をもっているという結果である。留学生は、日本人学生より総じて高い満足度を示しているが、「浴場」については日本人学生より不満をもつ割合が高く、「補食室」「洗濯室」についても 5 割近くの留学生が不満をもっている。全体的には、日本人学生の約半数が何らかの不満を持っているのに対して、留学生は約 4 割が（まあ）満足と答え、（やや）不満と回答したのは 25%にとどまった。

前回（平成 20 年度）の調査では約 4 割の入居者が不満感をもっているとの結果であったが、それに比べると今回は不満感が増している。ただし、留学生は相対的に満足度が高いとの結果が得られたので、今後、これらの満足度の違いについて、さらに詳細に調査していく必要がある。

図 2.13 学生宿舎満足度（全体）



## 2.14 学生宿舎内での生活について（問 27）

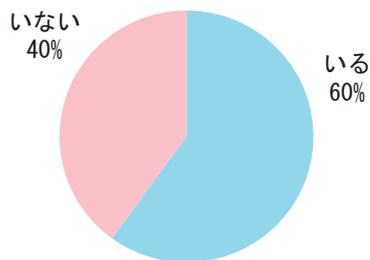
◎入居者の 8 割は、学生宿舎の生活に不安を感じていない。

今回、学生宿舎に入居しているまたは入居していた学生を対象に、学生宿舎での生活について質問した。その結果、宿舎内に友人がいると回答した入居者は 6 割であり、また、近隣入居者に「時々会話する」「あいさつを交わす程度」なのは 7 割近くにのぼるが、「まったく知らない」と回答した者も 3 分の 1 程度いる。生活面の不安については、「不安はない」と答えた者が 8 割を超えている。ただし、「不安がある」と答えた中に、その理由として「女子棟に不審な男が立ち入っている」などセキュリティに関することと、補食室・トイレの不衛生さをあげる回答が目立っている。

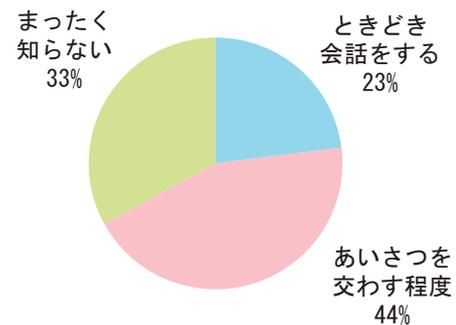
学生宿舎のコミュニティ組織の必要性については、「必要だと思う」の方が「必要だと思わない」よりも若干多いという結果である。「必要」の場合には、清掃の実施など、共用の場の使用ルールを作成して実施することが重要等の意見が見られた。一方、「不必要」と答えた人は、「時間がない」「役割を負うのは煩わしい」「友人は研究室やサークルで十分」などの意見が多かった。

図 2.14 宿舎生活について（全体）

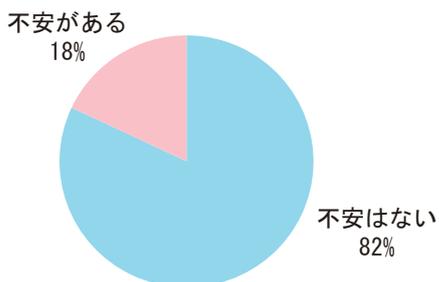
A. 入居している学生宿舎棟内の友人



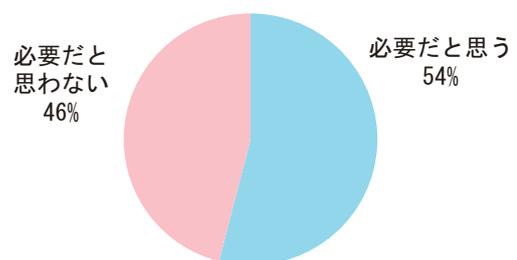
B. 学生宿舎内の近隣入居者との関係



C. 学生宿舎生活での不安の有無



D. 学生宿舎のコミュニティ組織



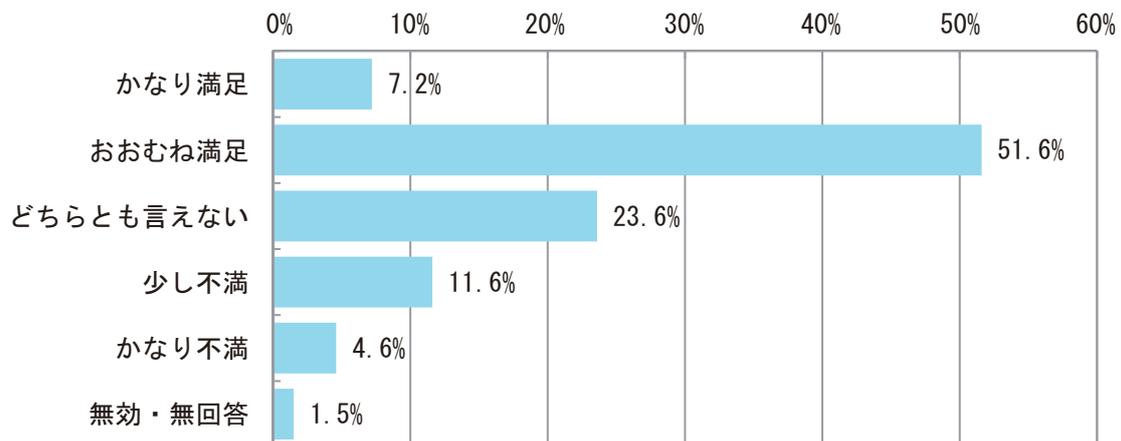
## 2.15 現在の日常生活の満足度について（問 28）

- ◎ 6割の人が日常生活に満足をしている。
- ◎ 日常生活の満足度は生活費と関連がある。

日常生活の満足度を調査した。「かなり満足」から「かなり不満」までの5段階の項目のうちからひとつの回答を求めた。大学院生全体としてみると「かなり満足」と「おおむね満足」を併せた回答の割合が58.8%だった。この値は前回のアンケート結果より5ポイントほど増加している。反対に「少し不満」「かなり不満」と回答した人の合計は16.2%と、前回と比べて4ポイントほど減少している。経済不況や就職難が言われる中であって、本学における生活の満足度は高まっているようである。理由ははっきりとは分からないが、TXが開通し、大学のまわりが住みやすくなってきているなどの環境面、授業料免除やTA・FA含めた経済支援の充実などに関連すると思われる。男女別にみると、前回と同様に、ほとんど違いはなかった。研究科別では、それほどばらつきがないが、教育研究科が「かなり満足」11.0%、「おおむね満足」58.9%で平均よりも高い数値が出ている。学群学生と比較すると、「かなり満足」「おおむね満足」と回答した人の割合が大学院生の方が1割ほど下回っているという結果である。

日常生活の満足度は、問20「1ヶ月の生活費・研究活動費」と高い関連があるようだ。本項目で日常生活が「少し不満」「かなり不満」と答えた人のうちの9割は、問20で生活費が充分ではないと回答している。一方、問15「奨学金の受給」の有無とはあまり関係しなかった。したがって、生活費・研究活動費が足りない、真に経済支援を必要としている学生に奨学金等を給付することが、大学院生の日常生活の満足度を上げるためには効果があると思われる。

図 2.15 現在の日常生活の満足度（全体）



## 第3章 通学・事故等について

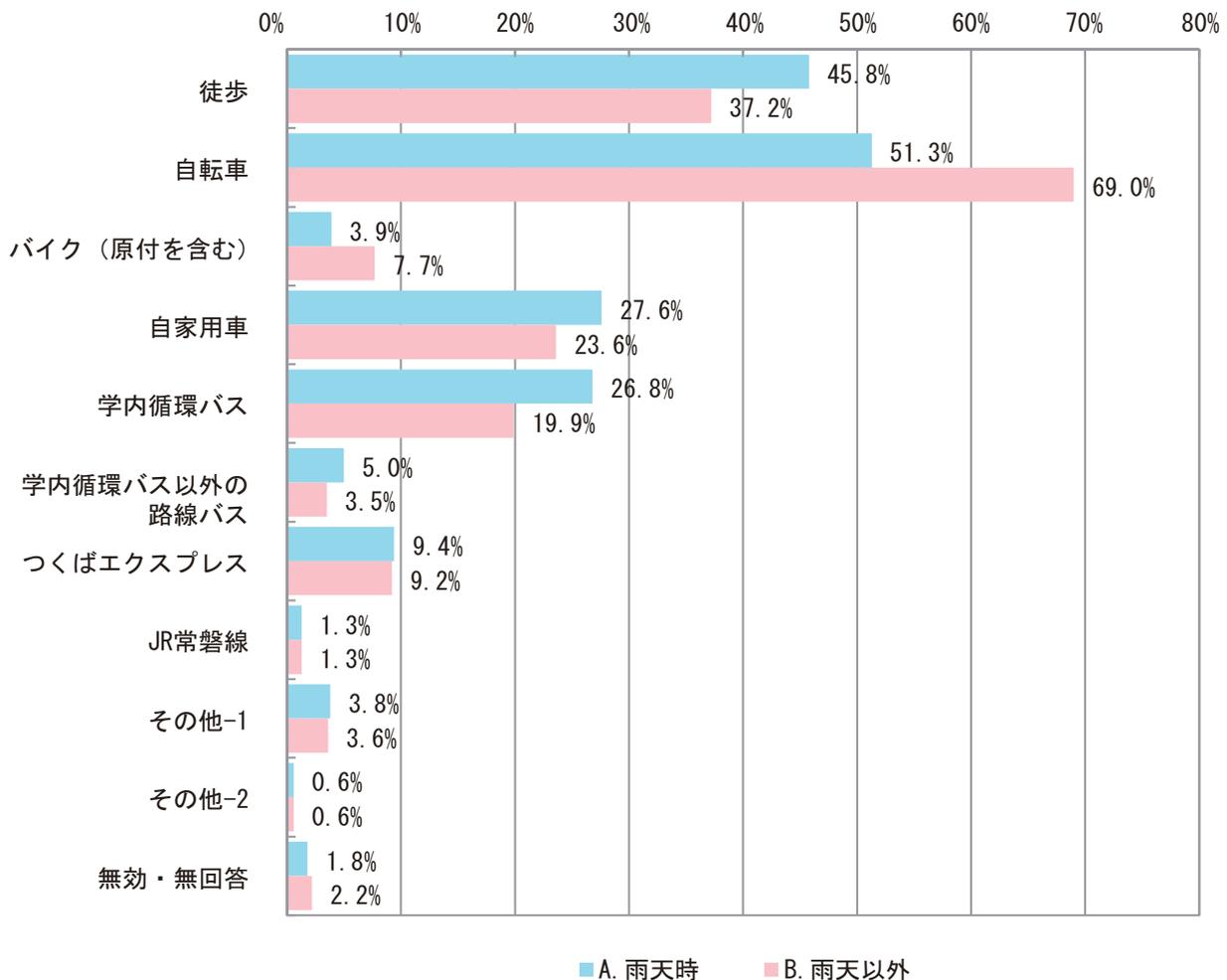
### 3.1 通学手段について (問 29)

- ◎ 通学手段は①自転車、②徒歩、③自家用車である。
- ◎ 雨天時以外の通学手段は、自転車が7割にもおよぶ。

大学院生が利用する交通手段について、雨天の場合と雨天以外に分けて、複数回答で質問した。雨天であるか雨天でないかによらず、交通手段は自転車と徒歩が圧倒的に多かった。なかでも雨天時以外に通学する手段として自転車が約7割にも及ぶ。前回(平成20年度)は、雨天以外の自転車が64.7%であったので、少し増えたことになる。これは、バイクと自家用車の利用が2～3%減っている分が自転車に移行した形である。一方、学内循環バスの利用は約2割で、これは前回から4%ほど増えている。学内循環バスについては、調査項目問31で述べる。

つくばエクスプレス(TX)の利用は、前回からは2%ほど伸びているが、全体としては1割弱にとどまった。自宅から通学するよりも、大学のまわりに居住している大学院生が多いのは、研究室等で遅くまで研究を続ける必要があるためであろう。JRおよびTXの利用率は、学類生の2年生以上とそれほど違いがなかった。

図 3.1 通学手段 (雨天時・雨天時以外別、全体)



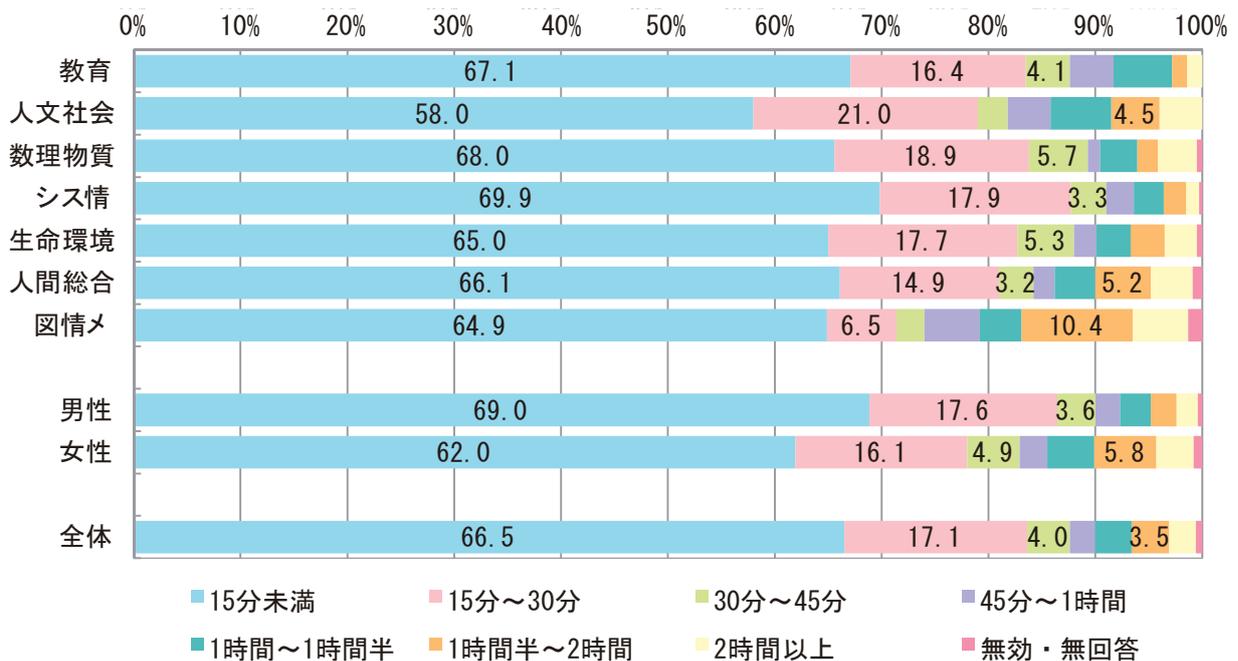
### 3.2 通学時間について (問 30)

- ◎ 6割以上の学生が15分以内、9割の学生が1時間未満で通学している。
- ◎ 男性より女性の方が通学時間が長い傾向。

「雨天の日以外の片道の通学時間」について尋ねた。結果を集計したところ、6割以上の学生が15分以内で通学していることが分かった。この値は前回の調査結果と同等であった。一方、通学に1時間以上かけている学生も約1割おり、その中では、女性の方が男性より6%ほど多かった。男性と比べて女性の方が自宅通学者が多いことと関連していると思われる。

研究科別では、それほど大きな差は見られないが、人文社会科学研究科は「15分未満」が58.0%と比較的低く、その分、1時間以上の割合が相対的に高い。文系の学生は、毎日必ず研究室に通うということではないため、比較的、遠方に居住しているものと思われる。また、図書館情報メディア研究科は、「15分未満」が64.9%と平均に近いが、一方で「1時間半～2時間」10.4%、「2時間以上」5.2%と他研究科より目立って多く、両極端な結果となっている。これは、図書館情報メディア研究科では、学生の一部が東京キャンパスで授業を受けていることによると思われる。

図 3.2 通学時間 (研究科別、男女別、全体)



### 3.3 学内循環バスの利用頻度について（問 31）

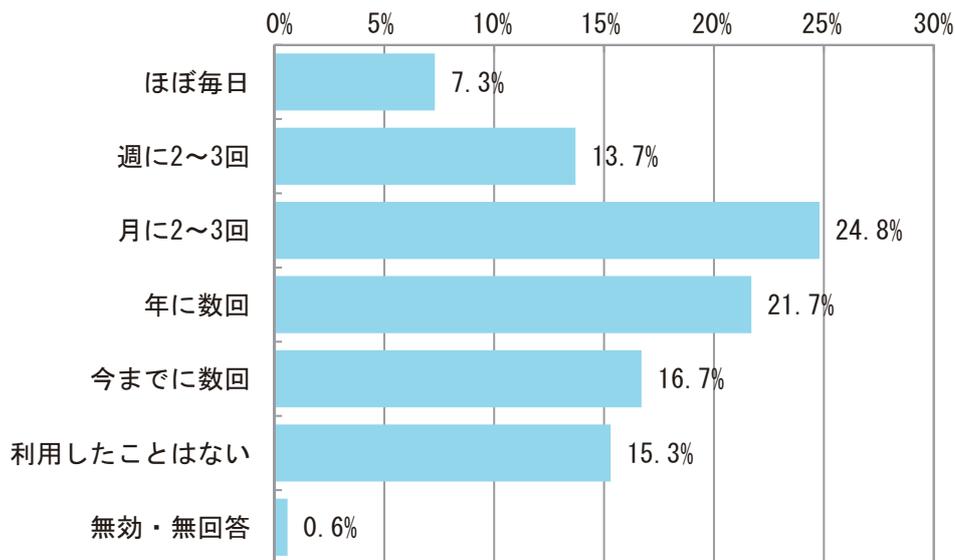
- ◎ 2割の学生が日常的に学内循環バスを利用している。
- ◎ 男性より女性の方が学内循環バスを多く利用している。

大学院生の学内循環バスの利用頻度について尋ねた。ほぼ毎日利用している人が7.3%、週に2回～3回利用している人が13.7%、併せて21.0%いることがわかった。つまり日常の通学手段として学内循環バスが欠かせない人が約5人に1人いることを意味する。逆に、全く利用したことがない大学院生が15%しかいないことを考えると、学内循環バスは大学院生の足として利用されている様子うかがえる。

ただし、5人のうち約4人は主な通学手段として学内循環バスを利用していない。これは調査項目の問29「通学手段」や問30「通勤時間」で明らかになったとおり、徒歩や自転車で十分に通学できる圏内に住んでいる学生が多いためである。

問29「通学手段」にあるように、雨天時には自転車や徒歩の利用率が減り、学内循環バスの利用が増えること、および、自家用車や一般の路線バス、電車の利用率がそれほど変化しないことから考えると、雨天時の学内循環バスの利用者は、学生宿舎および近隣地域からの通学者が多いと考えられる。なお学内循環バスの利用率は、女性の方が男性よりも利用率が若干高かった。

図 3.3 学内循環バスの利用頻度（全体）



### 3.4 交通事故経験の有無について（問 32）

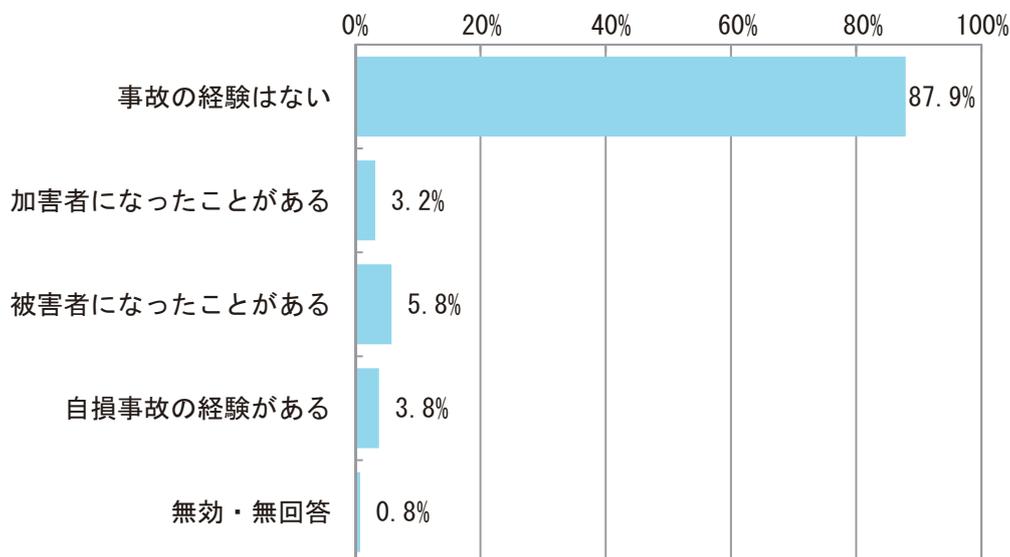
◎約 8 人に 1 人の大学院生が、大学院入学後に交通事故の経験がある。

大学院生の交通事故経験の有無を尋ねた。大学院入学後の交通事故の経験を、「加害者」「被害者」「自損事故」にわけて設問にし、該当するもの全てを選択してもらった。

図 3.4 に示すとおり、全体をみると、大学院に入学後に事故の経験のない学生が 87.9% である。つまり、約 8 人のうち 7 人は事故の経験がないことになるが、逆にいうと約 8 人に 1 人は事故の経験があることを意味する。この値は、大学院に入学後の数値であることに留意して結果を読むべきである。大学院修了時までを想定すると、事故にあう可能性はさらに高くなると考えてよい（ちなみに、博士後期課程 3 年生と一貫制博士課程 5 年生に限って集計してみると、「事故の経験はない」は 84.5% に低下する）。

交通事故に遇う可能性の高い交通手段は自動車であるが、それ以外の交通手段でも事故にあう可能性はある。問 29 の回答にあるように雨天でも半数の人が自転車を交通手段として利用しており、傘をさした自転車と歩行者や自動車との事故が多発していることが、別の調査によっても示されている。本学はキャンパスが広く、学内循環バスや自家用車が乗り入れている。学外者が通過するためにキャンパス内に車で入り込むことも多い。キャンパス内のループ道路は時速 30 キロ制限のはずだが、かなりのスピードで走っている車も多く、とくに朝の始業前や午後の授業がはじまる時間には車と自転車と徒歩者で、信号のない道が混雑している。キャンパス内および学外で交通事故にあう可能性は誰にでもあることを改めて認識し、今後も注意してゆきたい。なお、「事故の経験はない」に対する回答率は、前回の 85.7% と比べて、今回 2.2% 上昇していることを付言する。

図 3.4 交通事故経験の有無（全体）



### 3.5 盗難被害について (問 33)

- ◎大学院生の2割に盗難の被害。
- ◎調査項目全ての場所で被害者の割合が増加。
- ◎自転車の盗難被害が圧倒的に多い。

盗難被害について尋ねた。「被害に遭ったことはない」は全体で79.3%であり、残りの20%程度の学生は何らかの盗難被害を受けたことになる。前回調査時（平成20年度）に比べると、4%ほど被害率が上昇したことになる。調査項目の場所ごとに前回と比較すると、「学内」で4.3%、「学生宿舎内」で1.2%、「学外」で8.5%、いずれも被害の割合が増加している。学群生向けの今年度の調査では、盗難被害はむしろ前回より減っており（ただし、被害率自体は学群生26.4%の方が上回っている）、大学院生の方でなぜこのように盗難被害が増えたかは不明である。今回から被害場所を具体的に記入してもらうことにしたが、学内では「研究室」がある程度目立っており、これが大学院生の被害数を押し上げる要因になっているかもしれない。留学生に限ってみてみると、被害者率は26.6%となり、全体よりも6%ほど高い。とりわけ注意を呼び掛けたい。

盗難物としては、「自転車」が圧倒的に多く、これは、学内、学生宿舎内、学外のいずれにおいても変わらない。盗難場所としては、研究室以外で、図書館や各種の体育施設も多数あげられおり、財布などが盗まれている。学生宿舎や学外アパートでは衣類や日用品も盗まれている。

男女別および研究科別では、大きな差は認められない。今後、防犯意識を高めるためのキャンペーンなど、大学院生にも十分とどくような形で実施していくことが求められる。

表 3.5 盗難被害（研究科別、男女別、全体）

研究科名等	回答数	被害に遭ったことはない		学内で被害に遭った		学生宿舎内で被害に遭った		学外で被害に遭った		無効・無回答	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
教育	73	62	84.9	6	8.2	3	4.1	2	2.7	0	0.0
人文社会	176	139	79.0	11	6.3	15	8.5	9	5.1	5	2.8
数理物質	387	317	81.9	34	8.8	14	3.6	29	7.5	3	0.8
シス情	604	469	77.6	64	10.6	31	5.1	57	9.4	5	0.8
生命環境	434	339	78.1	44	10.1	19	4.4	42	9.7	4	0.9
人間総合	557	440	79.0	52	9.3	14	2.5	61	11.0	8	1.4
図情メ	77	65	84.4	4	5.2	1	1.3	5	6.5	3	3.9
男性	1,530	1,211	79.2	151	9.9	62	4.1	131	8.6	17	1.1
女性	777	620	79.8	63	8.1	35	4.5	74	9.5	11	1.4
全体	2,314	1,836	79.3	215	9.3	97	4.2	205	8.9	29	1.3

### 3.6 傷害等の被害について（問 34）

- ◎全体の 2%弱が傷害等の被害者。
- ◎研究学園都市内の被害が最も多い。
- ◎女性の被害の割合が多い。

大学院入学後の傷害等の被害に関して、今回の設問では、被害の詳細については尋ねず、被害の有無を場所別に、「学内」「学生宿舎内」「研究学園都市内」「それ以外」のいずれであったかについて複数回答を求めた。その結果は、表 3.6 に示すとおりである。

「被害にあったことはない」と「無効・無回答」を除いて、発生率を求めると、全体では 1.9%となる。研究科別では、人文社会科学研究科が 2.8%と最も多かった。発生場所は、研究学園都市内がもっとも多く、次いで研究学園都市外、学内、学生宿舎内の順であった。学生宿舎は、盗難被害は少なくないが、傷害等に関してはある程度安全と言えそうである。男女別では、女性の方が男性より被害率が高かった。

今後とも、防犯意識、安全意識の喚起が重要となる。

表 3.6 傷害等の被害（研究科別、男女別、全体）

	被害なし	学内で被害	学生宿舎内で被害	研究学園都市内で被害	上記以外の場所で被害	無回答
教育	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
人文社会	96.0	0.6	0.0	1.1	1.1	1.1
数理物質	96.4	0.8	0.0	1.8	0.3	0.8
シス情	97.7	0.2	0.3	1.0	0.2	0.7
生命環境	97.2	0.0	0.0	0.2	1.2	1.4
人間総合	97.1	0.4	0.2	0.4	0.9	1.3
図情メ	96.1	1.3	0.0	0.0	0.0	2.6
男性	97.5	0.3	0.1	0.8	0.5	0.8
女性	96.4	0.4	0.3	0.6	0.9	1.5
全体	97.1	0.4	0.1	0.8	0.6	1.1

### 3.7 カルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘について（問 35）

- ◎全体の15.4%が参加勧誘を受けている。
- ◎全体の19.1%が人の勧誘を見たり、聞いたりしている。
- ◎人文社会科学研究科で顕著である。

今回からの新たな設問であり、大学院入学後のカルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘に関して、「いやな思いをした」「勧誘を受けて困っているのを見たり、聞いたりした」ことの実験について尋ねた。結果として、全体の15.4%が参加勧誘を受けていた。また、人文社会科学研究科では24.4%が参加勧誘を受けており、他研究科の13.4%～17.1%に比べ顕著に高い割合である。勧誘を受けて困っているのを見た割合も、人文社会科学研究科では27.3%と、他研究科の13.7%～20.8%よりも、かなり高くなっている。男女別では特段の差は見られなかった。

図 3.7.1 カルト宗教団体や啓発セミナーへの参加勧誘（研究科別）

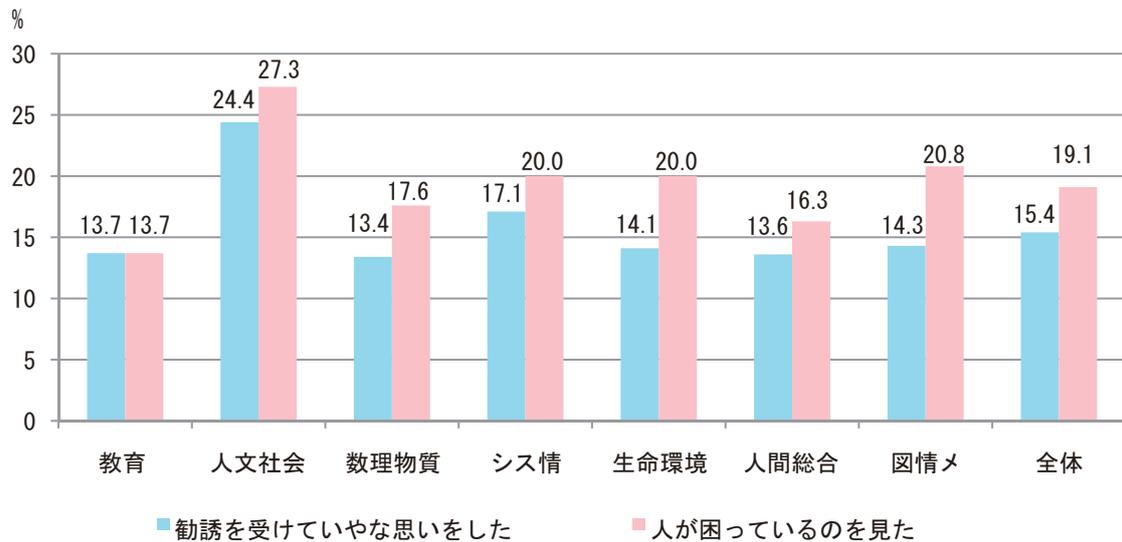
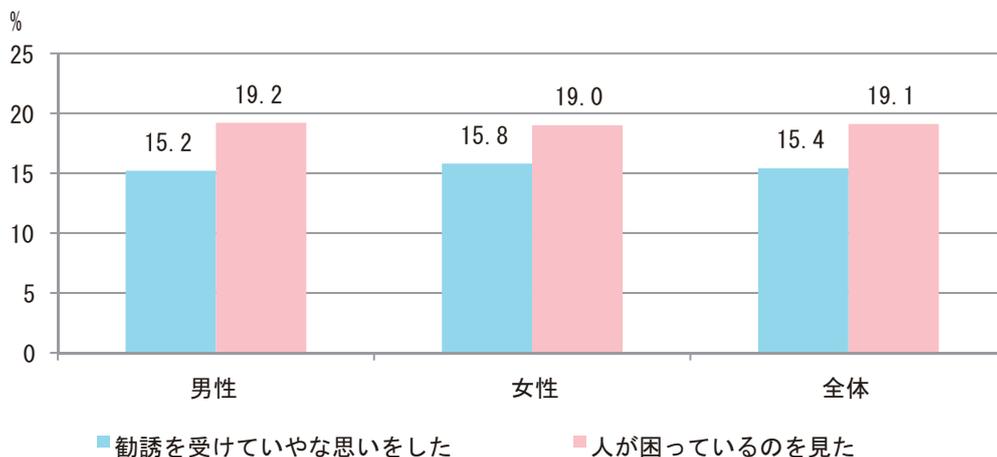


図 3.7.2 カルト宗教団体や啓発セミナーへの参加勧誘（男女別、全体）



### 3.8 教員によるセクハラ、アカハラについて（問 36）

- ◎セクハラを感じたことがある女子学生は、6%ほど。
- ◎アカハラを感じたことがあるのは、全体の12%程度の学生。

大学院入学後の教員によるセクシャルハラスメントおよびアカデミックハラスメントについて、「感じたことがあるか」「感じたことがある場合、どのような人に相談したか」を尋ねた。表 3.8 の上段にセクハラを、下段にアカハラをまとめた。

「感じたことはない」と「無効・無回答」を除くと、セクハラを感じているのは、全体で3.0%、女性では6.3%となる。これは、前回（平成20年度）とほぼ変わらない結果である。しかし、今回は「無効・無回答」がかなり多かった（7.8%、180名）。セクハラを感じていながら、特定されること等を懸念して記入を控えた大学院生が多数いる可能性がある。「感じたことがある」学生は、「誰にも話さない」か「親しい友人に話す」場合が多い。教員やハラスメント相談員に話す学生はかなり少ない。それほど深刻でないために教員等に相談しないのか、教員等との相談はやはり敷居が高いのか、判断は難しい。

アカハラを感じたことがあるのは、全体の12.2%で、これも前回とほぼ変わっていない。ただし、今回、「無効・無回答」が多いこと、教員・ハラスメント相談員への相談は相対的に少ないことなど、セクハラの場合と同様である。

相談員制度のあり方、教員の意識の問題も含めて、予防の取り組みが必要である。

表 3.8 教員によるセクハラ [上段]、アカハラ [下段]（研究科別、男女別、全体）

	回答数	感じたことはない	感じたことがあるが誰にも話していない	感じたことがあり親しい友人に話した	感じたことがあり知合いの教員に話した	研究科・専攻のハラスメント担当教員に話した	全学に設置されているハラスメント相談員に話した	その他	無効・無回答
教育	73	84.9	4.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.0
		79.5	8.2	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	12.3
人文社会	176	81.3	1.7	1.7	0.6	0.6	0.0	0.6	15.3
		71.0	4.5	9.1	2.8	0.0	0.0	0.6	14.2
数理物質	387	89.9	1.3	1.0	0.5	0.0	0.0	0.0	7.5
		82.2	4.7	5.7	0.8	0.5	0.3	0.8	7.0
シス情	604	92.2	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.5	6.1
		84.9	3.6	5.1	0.7	0.5	0.3	0.5	5.6
生命環境	434	90.1	0.7	2.3	0.2	0.2	0.5	0.2	6.7
		80.9	3.9	8.3	1.8	0.2	0.2	0.9	6.2
人間総合	557	88.2	1.6	2.2	0.5	0.0	0.2	0.4	7.5
		77.2	6.1	8.8	2.5	0.4	0.4	1.6	6.8
図情メ	77	88.3	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	1.3	9.1
		84.4	1.3	2.6	0.0	1.3	0.0	2.6	9.1
男性	1,530	91.3	0.6	0.4	0.2	0.0	0.0	0.3	7.4
		82.2	4.8	5.8	1.1	0.3	0.1	0.8	6.7
女性	777	85.2	2.3	3.6	0.5	0.3	0.4	0.5	8.5
		77.7	4.2	8.8	2.2	0.5	0.5	1.3	8.1
全体	2,314	89.2	1.2	1.5	0.3	0.1	0.1	0.3	7.8
		80.6	4.6	6.9	1.5	0.4	0.3	1.0	7.2

## 第4章 健康状態について

### 4.1 健康状態について（問37）

- ◎全体の58%が「健康である」と回答。
- ◎修士課程相当3年目以上の人の健康状態は低下し、精神的・心理的問題で医療・相談機関に受診・相談する割合が大きく増加。

過去1年間の健康状態について、「健康である」と回答した割合は、全体で58.0%であった。前回（平成20年度）の調査結果と比較すると、2年前の同項目の回答率は70.5%であり、12.5%も回答率が下がっている。14年前の調査結果でも64%の値を示し、それと比べても低い。過去1年の間には新型インフルエンザの流行もあり、その影響によって回答率が低下した可能性も考えられる。また、今回の調査では身体的問題と心理的問題の選択肢を別に設け、選択数を制限しなかった点で前回までの調査と異なるが、このような回答形式の変更が数値に影響したかどうかは不明である。

男女別による違いについては、女性の方が男性よりも「身体の病気で受診・入院」した割合が高くなっている。「健康不良」「精神的問題で受診」「心理的問題で相談」「けがで受診」についても女性の方が高い。一般に男性よりも女性の方が受診や相談に行く傾向が高いと言われており、本調査の結果もそうした傾向を反映していると考えられる。

また、大学院生を便宜的にM1（修士課程1年相当。博士前期課程1年や一貫制博士1年等を含む）、D1（博士課程1年相当。博士後期課程1年、3年制博士課程1年等を含む）というように学年分類した。その結果、M3（修士課程3年目以上、つまり、2年で修了しなかった人）の「健康」が下がり、「精神的問題で受診」「心理的問題で相談」の回答率が急激に上がることが確認された。同様に、D3、D4では「精神的問題で受診」が他と比べて高くなっている。何らかの理由で修了が遅れている大学院生の健康状態は悪化することが、あらためて確認されたと言えよう。

表 4.1 学生相談室で相談したい事柄（年次別、男女別、全体、「その他」を除く）

		全体	男性	女性	M1	M2	M3	D1	D2	D3	D4
1	健康である	58.0%	61.2%	51.7%	60.9%	58.6%	39.5%	59.3%	54.6%	51.9%	47.6%
2	健康不良で数日寝込んだ (受診・入院を除く)	27.5%	25.8%	31.0%	26.9%	28.0%	35.5%	23.3%	28.2%	31.3%	33.3%
3	身体の病気で受診・入院した	15.7%	12.6%	22.0%	13.6%	14.5%	21.1%	19.0%	19.5%	21.9%	21.4%
4	精神的な問題で受診・入院した	3.3%	2.8%	4.4%	2.3%	3.1%	13.2%	2.6%	1.1%	7.5%	7.1%
5	心理的な問題で相談機関を利用した	3.2%	3.0%	3.7%	2.5%	4.3%	18.4%	1.1%	0.0%	2.5%	0.0%
6	けがで受診・入院した	3.6%	3.2%	4.5%	4.1%	3.0%	1.3%	4.2%	4.6%	3.8%	4.8%
7	その他	1.6%	1.4%	1.8%	1.6%	1.7%	1.3%	2.1%	0.0%	0.0%	4.8%
対象者の母数		2,314	1,530	777	880	765	76	189	174	160	42

## 4.2 悩みごとについて (問 38)

- ◎半数以上の人が「学業や研究の不振」で悩んでいる。
- ◎女性の半数弱が「進路」に関して悩んでいる。
- ◎3割弱の人が「経済状態」に関して悩み、その傾向は学年が上がるとともに増加。

過去1年間に悩んだことの中で、最も多かったのは「学業や研究の不振」についてであった。その後は、「進路」「就職」「経済状態」「自分の精神的・心理的状态」という順に続き、その順序について男女差はなかった。しかし、「進路」に関しては男性と女性とで回答率に10%の開きがあり、女性の方が進路問題で悩んでいる様子がうかがえる。

また、問37と同様に大学院生を便宜的にM1（修士課程1年相当。博士前期課程1年や一貫制博士1年等を含む）、D1（博士課程1年相当。博士後期課程1年、3年制博士課程1年等を含む）というように学年分類した。その結果、M3（修士課程3年目以上、つまり、2年で修了しなかった人）はM1、M2と比べ「学業や研究の不振」の悩みが上昇し、同時に「自分の精神的・心理的状态」や「教員との関係」についての悩みも増え、「休学・退学」についても考え始めるようになるという姿が浮かび上がった。D4も「学業や研究の不振」で悩むが、D4に特徴的な他の悩みは「経済状態」と「ハラスメント」である。学年が上がるとつれて、「自分の性格」といった個人的な悩みは減っていき、「教員との関係」や「研究室内の問題」に関する大学院での人間関係に関する悩みが増えていく様子が示された。

表 4.2 悩みごとについて (全体、男女別、学年別)

	全体	男性	女性	M1	M2	M3	D1	D2	D3	D4
1 学業や研究の不振	51.6%	50.4%	53.9%	47.8%	51.5%	63.2%	49.7%	57.5%	58.8%	69.0%
2 単位取得の問題	7.6%	8.9%	5.1%	10.9%	6.0%	11.8%	4.2%	5.7%	2.5%	2.4%
3 休学・退学	4.2%	3.8%	5.1%	3.0%	2.9%	23.7%	2.1%	4.0%	8.8%	9.5%
4 転研究科・転専攻	2.3%	2.4%	2.2%	3.0%	1.8%	3.9%	2.6%	1.7%	0.6%	2.4%
5 進路	41.8%	38.6%	48.3%	49.9%	36.9%	42.1%	39.2%	29.3%	41.3%	40.5%
6 就職	36.3%	37.6%	33.7%	30.7%	51.4%	43.4%	18.5%	21.8%	33.1%	28.6%
7 友人との関係	8.6%	7.8%	10.3%	10.2%	8.5%	13.2%	8.5%	5.2%	4.4%	4.8%
8 教員との関係	14.2%	12.5%	17.5%	11.7%	13.3%	25.0%	13.2%	17.2%	23.1%	19.0%
9 研究室内の問題	15.1%	13.4%	18.4%	14.5%	14.8%	18.4%	12.2%	17.2%	18.8%	19.0%
10 サークル内の問題	2.1%	2.0%	2.3%	3.9%	1.4%	1.3%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
11 恋愛関係	13.1%	12.9%	13.5%	15.2%	12.2%	18.4%	13.2%	13.8%	5.0%	9.5%
12 家族関係	6.8%	5.7%	9.0%	7.4%	6.1%	9.2%	7.4%	8.6%	3.8%	7.1%
13 自分の性格	14.8%	13.7%	17.1%	16.1%	15.3%	21.1%	12.7%	11.5%	11.3%	14.3%
14 自分の精神的・心理的状态	23.0%	20.7%	27.7%	24.5%	22.4%	40.8%	16.9%	23.6%	18.8%	16.7%
15 経済状態	28.7%	26.8%	32.6%	29.9%	22.7%	36.8%	31.7%	32.8%	36.3%	45.2%
16 ハラスメント	2.4%	1.9%	3.3%	1.7%	2.5%	2.6%	1.6%	0.6%	5.6%	11.9%
17 その他	3.4%	2.9%	4.4%	2.7%	2.5%	3.9%	6.9%	4.0%	4.4%	4.8%
18 特にない	11.5%	12.7%	8.9%	11.9%	9.9%	7.9%	18.5%	10.3%	10.6%	11.9%
対象者の母数	2314	1530	777	880	765	76	189	174	160	42

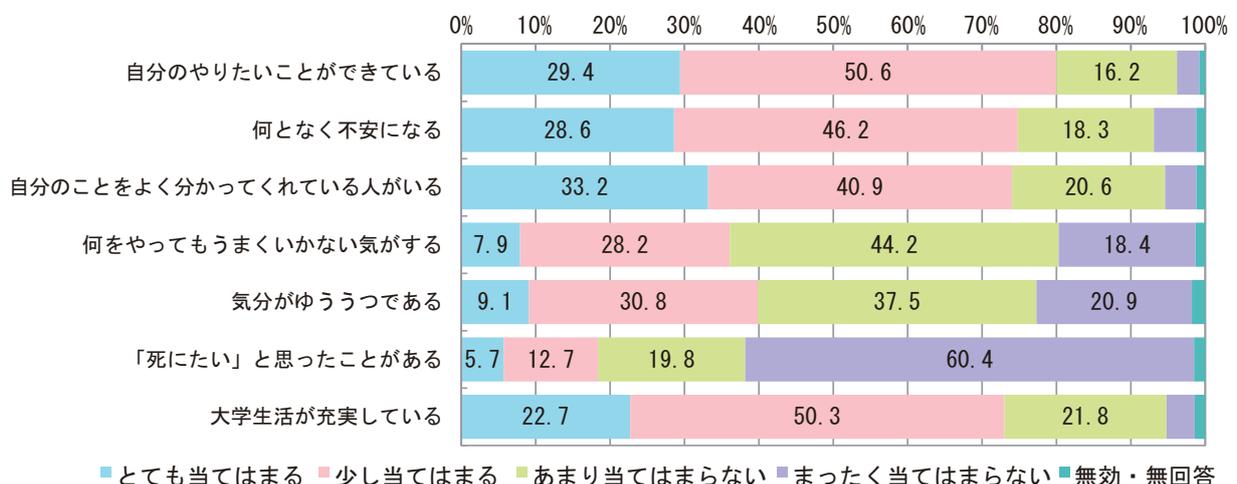
### 4.3 精神的な健康状態について (問 39)

- ◎ 「やりたいことができて」「わかってくれる人がいる」「充実している」に該当する学生は、7～8割。
- ◎ 「何となく不安」は75%、自信のなさや気分の落ち込みは4割弱。
- ◎ 「死にたい」と思ったことがある学生は2割弱。

精神的な健康状態を把握する5つの項目に対する回答を図4.3にまとめた。「自分のやりたいことができて」「自分のことをよくわかってくれている人がいる」など肯定的な項目に「とても当てはまる、少し当てはまる」と回答したのは全体で7～8割を占めた。その一方で、「何となく不安になることがある」に「とても当てはまる、少し当てはまる」と回答したのは全体で75.5%にのぼり、全国の大学院平均(『学生の健康白書』2005による)で「はい」と回答したのが約40%程度であったことと比べても高いといえる。先に述べたような大学院学生として感じる将来に対する先行き不安や漠然とした不安感に悩まされていることが、特に本学の大学院学生においてはその傾向が高いことが窺われる。また、「何をやってもうまくいかない気がする」に該当する割合が33.9%、「気分が沈んでいる」が38.2%であり、全国平均では約20%程度(それらの項目と関連する「何をするのも自信がない」、「いつも憂うつである」の割合)であることに比べれば、本学の大学院学生はそうした否定的な感情を抱きながら生活している可能性が高いことを示唆するものであり、見逃すことのできない結果である。鬱積した否定的な感情を吐露できる関係や、蓄積されたストレスを発散させることのできる場の確保が必要である。

さらに、これらの項目に対して「とても当てはまる」を1点、「少し当てはまる」を2点、「あまり当てはまらない」を3点、そして「まったく当てはまらない」を4点と数値化し、「自分のやりたいことができて」と「自分のことをよくわかってくれている人がいる」の2項目を足し上げたものをポジティブ得点(得点範囲1～8で低いほどポジティブ)、「何となく不安になることが多い」「何をやってもうまくいかない気がする」「気分が沈んでいる」の3項目を足し上げたものをネガティブ得点(得点範囲1～12で低いほどネガティブ)として算出した。その結果、全体の平均はポジティブで38点、ネガティブ得点は7.6点であり、研究科・学年別でも大きな差はなかった。全体的に、やりたいことができており、自分を分かってくれる人の存在を認識しており、またネガティブ得点で得点範囲の半分以上の得点が示されたことから、おおよそ精神的にはポジティブな結果が得られた。しかし、漠然とした不安感の強さは注目すべきであり、大学院生の感情面のサポートが必要であることがこの結果によって示された。学群生に比べて交友関係が限られやすく、日夜の研究活動で心身ともに疲弊しやすい状況下にある大学院学生が援助要請をしやすい環境作りが求められるだろう。

図 4.3 精神的な健康状態について (全体)



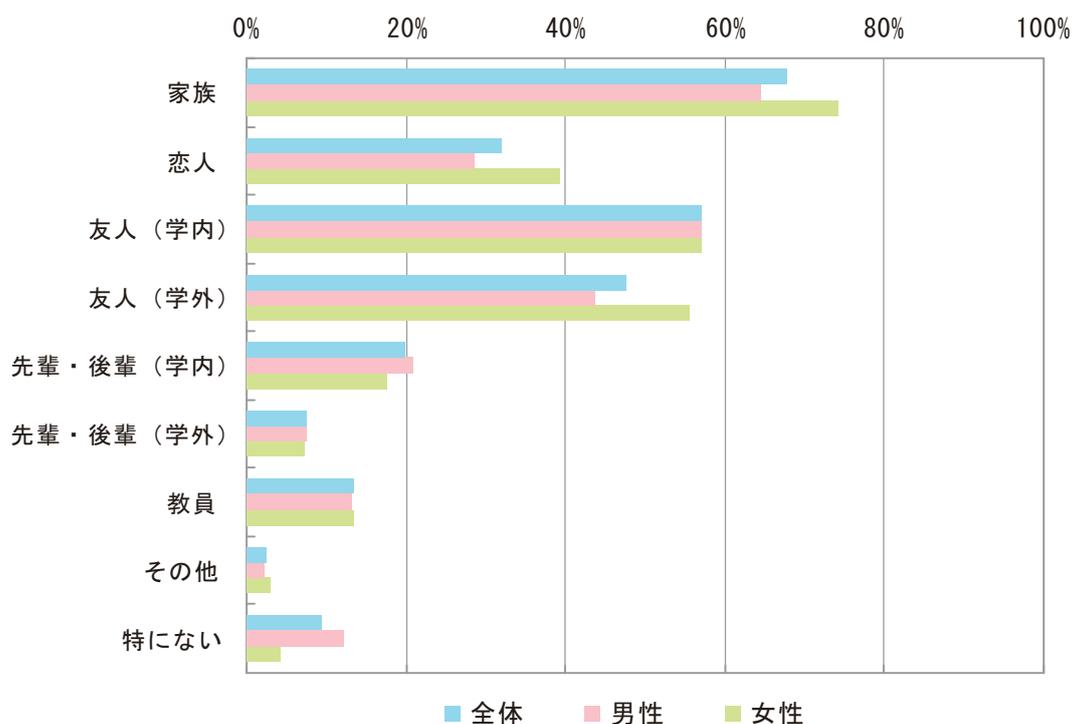
## 第5章 相談相手について

### 5.1 悩みの相談相手について（問40）

- ◎重要なことを相談する相手は、家族と友人。
- ◎教員を相談相手としたのは、13.3%。
- ◎約1割の人は、相談する相手がいない。

重要なことを話したり、悩みを相談する相手として、3つまでの複数選択で回答してもらった。選ばれた選択肢を集計したのが図5.1である。最も多かったのは家族であり、最も多く1番目に選ばれたのも家族であった（32.6%）。その傾向は、特に女性で顕著である。2番目に多かったのは学内の友人で、3番目に多かったのは学外の友人であった。大学院生においては、他大学出身者も少なくないことから、学内の友人と学外の友人とで差が見られることも予想されたが、男性においてはその傾向は見られたものの、女性ではほぼ同率であった。また、4番目に多かったのは恋人であるが、これについても女性の方が多かった。さらに、相談相手が特にいないと回答したのは、男性は12.2%、女性が4.2%である。これらの結果は、女性の方が他者から援助を受けることに対して前向きであり、多くの資源からサポートを受ける傾向にあるという一般的知見を反映していると考えられる。また、学年別の集計からは、学年が上がるにつれて学内友人への相談率が低下していき、教員への相談率が上昇していくという傾向もみられている。大学院博士後期課程ともなると学内の対人関係は限定されてくることから、教員は相談相手としての重要性を増すものと考えられる。特に男性は、女性よりも積極的に相談する傾向が低いこともあるので、学生が孤立しないために、サポートを求めやすい環境を教員が作ってやることが重要となろう。

図5.1 悩みの相談相手について（全体、男女別）

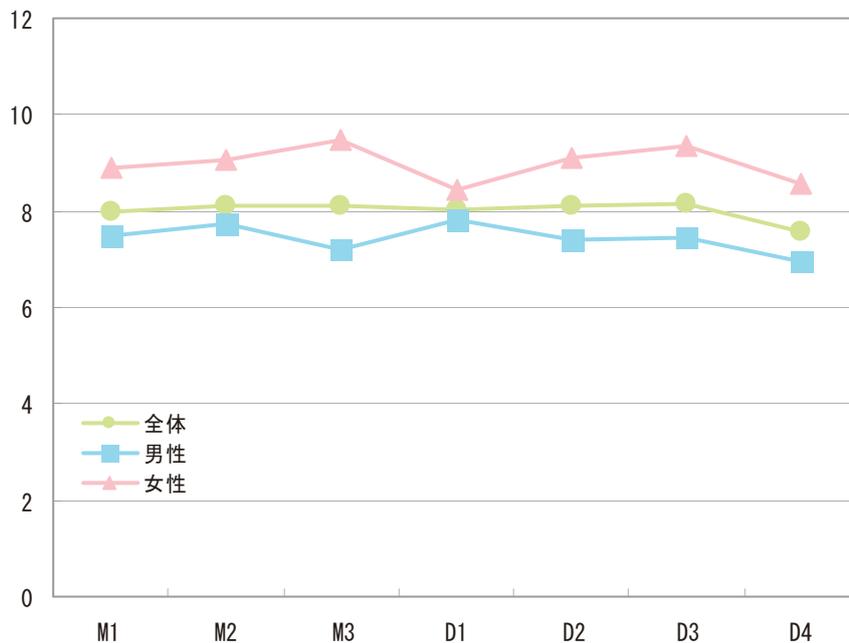


## 5.2 相談しやすい人との接触頻度について（問 41）

- ◎男性よりも女性の方が、相談しやすい人と話す機会が多い。
- ◎男女差は、学年によって異なる傾向がある。

問 40 で重要なことを相談しやすい相手として選んだ人と、どのくらい話す機会があるかを尋ね、その度合いを頻度が多いほど高得点になるように集計した合計が下図である。縦軸が話す頻度の得点、横軸が学年を示している。学年については問 37 と同様に、大学院生を便宜的に M1（修士課程 1 年相当。博士前期課程 1 年や一貫制博士 1 年等を含む）、D1（博士課程 1 年相当。博士後期課程 1 年、3 年生博士 1 年等を含む）のように分類した。その結果、全ての学年において男性よりも女性の方が、相談しやすい人として挙げた人と話す機会が多いことが明らかにされた。これは、統計的にも意味のある差であった。さらに、グラフを見ると M3（修士課程相当 3 年目以上の学生）においては、女性は相談しやすい人との接触頻度が増すのに対し、男性はその頻度が減るといった傾向が見てとれる。統計的には意味のある差ではないものの、相談傾向に関する一般的知見からは解釈が可能である。すなわち、女性の場合は問題が生じた際には他者に対して積極的に支援を求める傾向があるのに対し、男性においては支援を受けることに対して消極的になってしまうと言われており、修士論文の提出が遅れているという問題状況における対処の性差を、この結果は示していると思われる。こうした傾向を考えると、男性が相談しないことは問題が発生していないのではなく、発生しているのに支援を求められない可能性もあることを念頭においておくのも重要となろう。

図 5.2 相談しやすい人との接触頻度と学年の関連（全体、男女別）



## 第6章 サークル活動について

### 6.1 サークル活動について（問 42）

- ◎大学院生の8割が、サークル活動を行っていない。
- ◎サークル活動を行っている大学院生の多くは、正式メンバーとして活動。

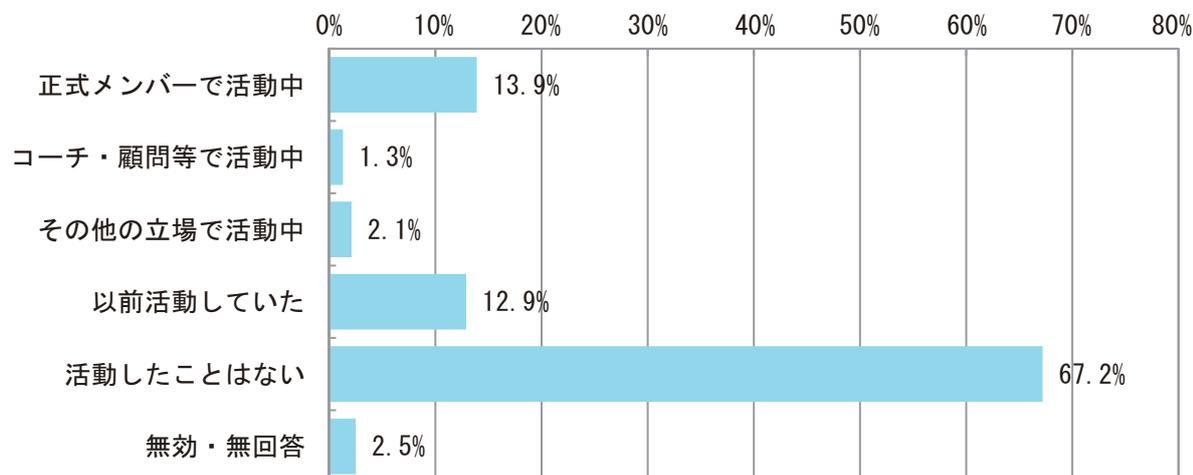
サークル活動への参加について、前回（平成20年度）に引き続き調査した。

全体では、サークル活動について、「活動中（正式メンバー、コーチ・顧問等、その他の立場として）」と回答した大学院生は17.3%であり、80%以上の大学院生は現在サークル活動を行っていない。この結果は、前回の調査結果とほぼ同様であり（前回の「活動中」は14.7%）、大学院生のサークル活動への参加率は低い傾向が続いている。また、サークル活動を行っている場合は、正式メンバーとして活動している大学院生が多い（図6.1）。

研究科別にみると、数理工学系研究科とシステム情報工学研究科はサークル活動を行っている大学院生が他研究科に比べて多く（数理工学系 22.0%、シス情 20.6%）、その大部分は正式メンバーとして活動している。逆に、人文社会科学系研究科はサークル活動を行っている大学院生が他研究科に比べて少ない（8.0%）。また、人間総合科学研究科では、コーチ・顧問等としてサークル活動を行っている大学院生が、他研究科に比べて多い（3.2%）。

男女別では、男性でサークル活動を行っている大学院生が女性に比べて多い（男性 20.3%、女性 11.0%）。

図 6.1 サークル活動（全体）



## 6.2 サークル活動の動機について（問 43）

◎サークル活動の動機は趣味と友人関係が上位 2 項目。

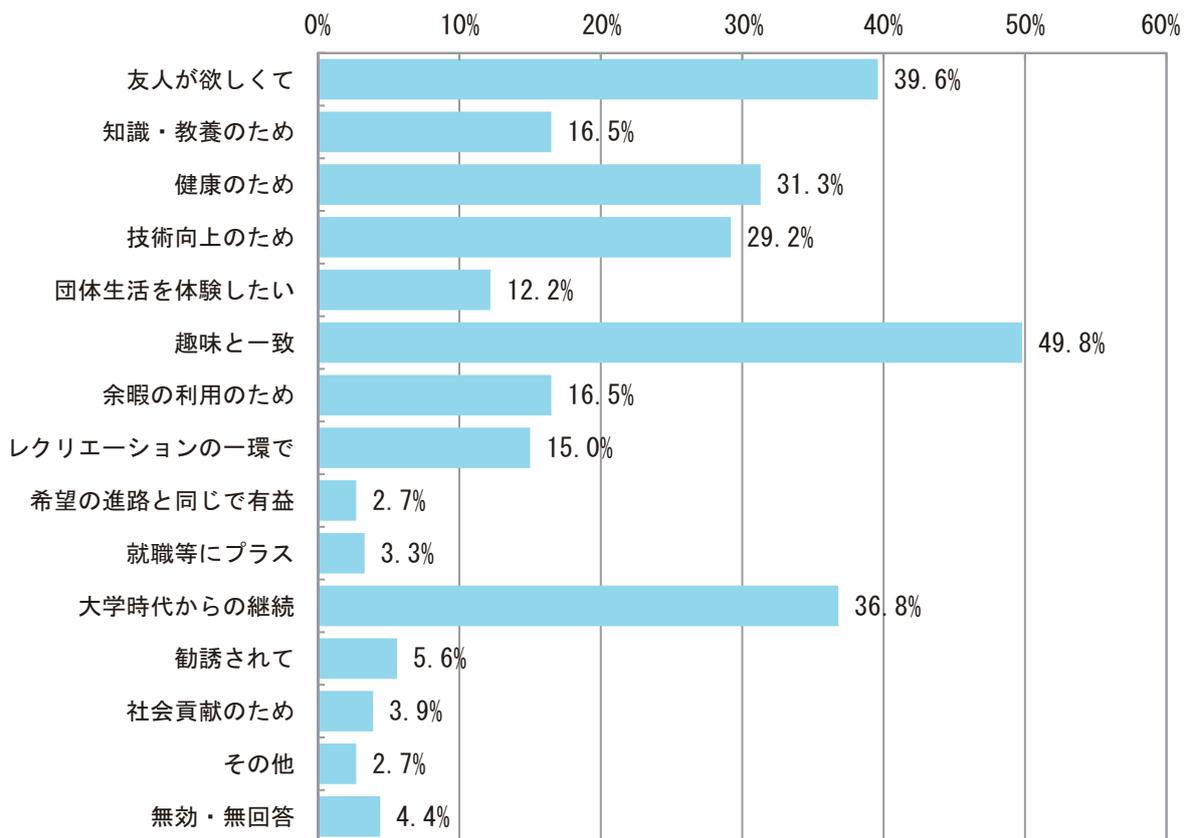
現在、サークル活動をしている、または、以前していた大学院生を対象に、サークル活動の動機について、前回（平成 20 年度）に引き続き複数回答で調査した。

全体では、図 6.2 に示すように、第 1 位が「趣味と一致」、第 2 位が「友人が欲しくて」であった。これは、前回の調査結果と同様である。また、学群においてもサークル活動の動機は、「友人が欲しくて」と「趣味と一致」が上位 2 項目を占めている（学群では第 1 位が「友人が欲しくて」）。

研究科別に見ると、人間総合科学研究科以外の研究科ではいずれも「趣味と一致」が第 1 位を占めるが、人間総合科学研究科は「大学時代からの継続」（43.9%）、「技術向上のため」（41.5%）、「趣味と一致」（32.5%）の順で続く。

男女別に見ると、男性において、「友人が欲しくて」と「技術向上のため」が女性のそれらを大きく上回っている（「友人が欲しくて」男性 42.9%、女性 30.4%；「技術向上のため」男性 31.9%、女性 20.2%）。

図 6.2 サークル活動の動機（全体）



## 第7章 筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について

### 7.1 教員に期待することについて（問44）

- ◎研究科により大きく異なる期待の内容。
- ◎過半数は「優れた研究者」を期待している。
- ◎授業の場以外での指導やサポートの充実を期待する声がかかなり多い。

教員に期待することを3つ以内で答えてもらった。選択肢は前回調査（平成20年度）とほぼ同じだが、ハラスメントやメンタルサポートに関わる選択肢を入れ、生活面での要望がより明確に把握できるようになっている。

全体では、前回の調査と同じく半数以上の回答者が教員に対して「優れた研究者であって欲しい」と望んでいる（56.6%）。この他に回答率が比較的高いのは、「研究指導の時間を確保して欲しい」（32.8%）と「授業内容を充実させて欲しい」（31.8%）で、それぞれ3割を超える回答者がある。また、4分の1前後の回答者が「もっと解りやすく教える」（26.4%）、「学生との対話の場を持つ」（23.9%）、「社会的実践との結びつきを示す」（23.2%）ことを期待している。

男女別に見た場合、若干の違いが見られる。女性回答者の38.4%が「研究指導の時間確保」を選択しており、この項目について男性（30.0%）よりかなり期待が大きいことがわかる。この他、「優れた研究者であること」（男性59.4%、女性51.2%）、「社会的実践との結びつきを示すこと」（男性21.6%、女性26.6%）への期待についても若干の男女差がある。

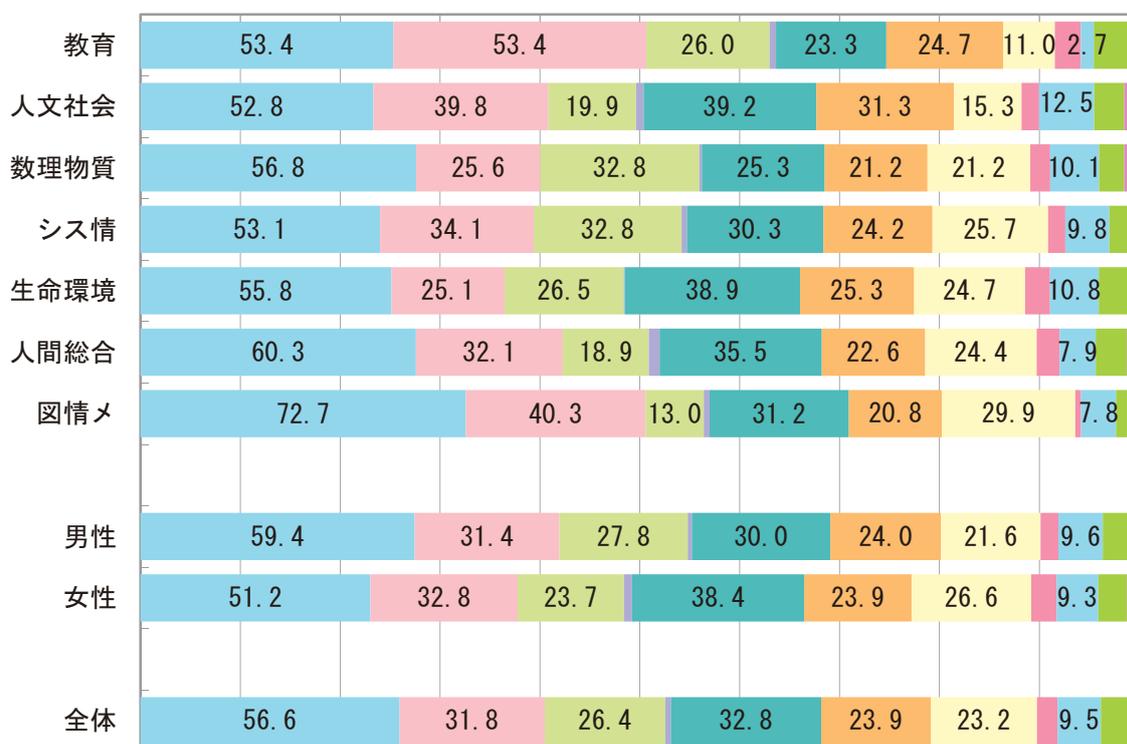
しかし、回答のばらつきが最もはっきりするのは研究科別に見た場合である。「優れた研究者であること」を期待する回答者は人文社会（52.8%）、シス情（53.1%）、教育（53.4%）で半数を少し上回る程度であるのに対し、図情メでは72.7%にも達している。また、「授業内容の充実」を求める回答者は生命環境では4分の1程度（25.1%）であるのに対し、教育では53.4%と過半数であり、生命環境の倍の割合を占めている。また、「解りやすい授業」を求める声は図情メでは13.0%とかなり少ないが、数理物質（32.8%）、シス情（32.8%）では3分の1近くまでになっている。「研究指導の時間確保」を求める回答は、人文社会（39.2%）、生命環境（38.9%）で4割近くと目立つが、教育では回答者の23.3%しか求めていなかった。なお、「メンタル面のサポート」を期待するという回答は全体では9.5%と1割を下回っており、実際に教育では2.7%しかなかったが、人文社会では5倍近い12.5%に上ることは重要だと思われる。

前回の調査にならって、いくつかクロス分析も行った。まず、留学生であるかどうかとの関連だが、多くの選択肢では大きな差はなかった。しかし、「優れた研究者であること」を期待する留学生がかかなり少ない（非留学生61.3%、留学生35.3%）のに対し、「もっと解りやすく教える」ことを期待する声が留学生から比較的多くあがっている（非留学生24.4%、留学生36.7%）。また、「メンタル面のサポート」を期待する声は全体では少ないが、留学生からの方が多く（非留学生8.7%、留学生12.7%）。一方、社会人経験の有無による違いはどの項目に関しても5ポイント以内に収まっており、わずかであると考えられる。その中でもやや目立つのは「研究指導の時間確保」を求める声が社会人経験者に若干多いことである（社会人未経験者31.7%、社会人経験者36.6%）。ただし、社会人経験のあり方について個々のデータを検討すると、在職中の学生が「優れた研究者であること」を期待する比率がかかなり高いこと（69.9%）がわかる（社会人経験者全体では54.8%）。

出身大学・大学院別にクロス分析をすると、どの選択肢についても筑波大学 > 国内他大学 > 国外大学

の順で選択率が下がる。筑波大学出身者と国内他大学出身者の間の違いは数ポイントに留まるが、その両者と国外大学出身者の間には常に10ポイント程度の開きがあり、国外大学出身者は教員への期待が全体的に高くないと言える。違いが特に大きいのは「優れた研究者であること」への期待で、筑波大学出身者の61.4%、国内他大学出身者の60.1%が期待している一方、国外大学出身者は36.0%しかこの選択肢を選んでいない。

図 7.1 教員に期待すること（研究科別、男女別、全体）



- 1. 優れた研究者であって欲しい
- 2. 授業内容を充実させて欲しい
- 3. もっと解りやすく教えて欲しい
- 4. 休講を無くして欲しい
- 5. 研究指導の時間を確保して欲しい
- 6. 学生との対話の場を持って欲しい
- 7. 社会的実践との結び付きを示して欲しい
- 8. ハラスメントの問題に敏感になって欲しい
- 9. メンタル面に関するサポートをして欲しい
- 10. その他
- 無効・無回答

## 7.2 教育面や制度面で不十分な点について（問 45）

- ◎経済的支援が不十分だと感じている声が多い。
- ◎就職活動支援に対する不満が大きい。

不十分と感じている項目を3つ以内で答えてもらった。全体で目立つのは、「経済的支援」(37.6%)と「就職活動支援」(29.2%)に対する不満で、前回調査と同様である。その他、「支援室・事務室の対応」(26.6%)、「カリキュラム」(21.2%)の回答率も2割を超えている。全体に男女差はわずかだが、「就職活動支援」(男性 26.9%、女性 34.1%)については女性の回答率が7ポイントあまり高い。

研究科ごとの差も大きく、「カリキュラム」については教育で(31.5%)、「経済的支援」については人文社会(50.6%)、人間総合(42.4%)、教育(39.7%)で、「就職活動支援」については図情メ(41.6%)で回答率が高い。「留学制度」に対する不満は全体では1割に満たない(9.8%)が、人文社会(13.1%)、人間総合(12.4%)では、教育(4.1%)の3倍以上の回答者が不十分としている。また、教育では「支援室・事務室の対応」についても回答率が高い(39.7%)。

筑波大学出身者の不満は「就職活動支援」について比較的多い。筑波大学と国内他大学出身者は、「カリキュラム」「支援室・事務室の対応」を不十分とする声が高いが、「課外教育」と「経済的支援」については国外大学出身者の不満が特に高い。また、社会人未経験者は「就職活動支援」「カリキュラム」「支援室・事務室の対応」への不満が若干高いが、社会人経験者は「経済的支援」に対する不満が特に高くなっている。

図 7.2 教育面や制度面で不十分な点（研究科別、男女別、全体）



### 7.3 整備・充実してほしい施設について（問 46）

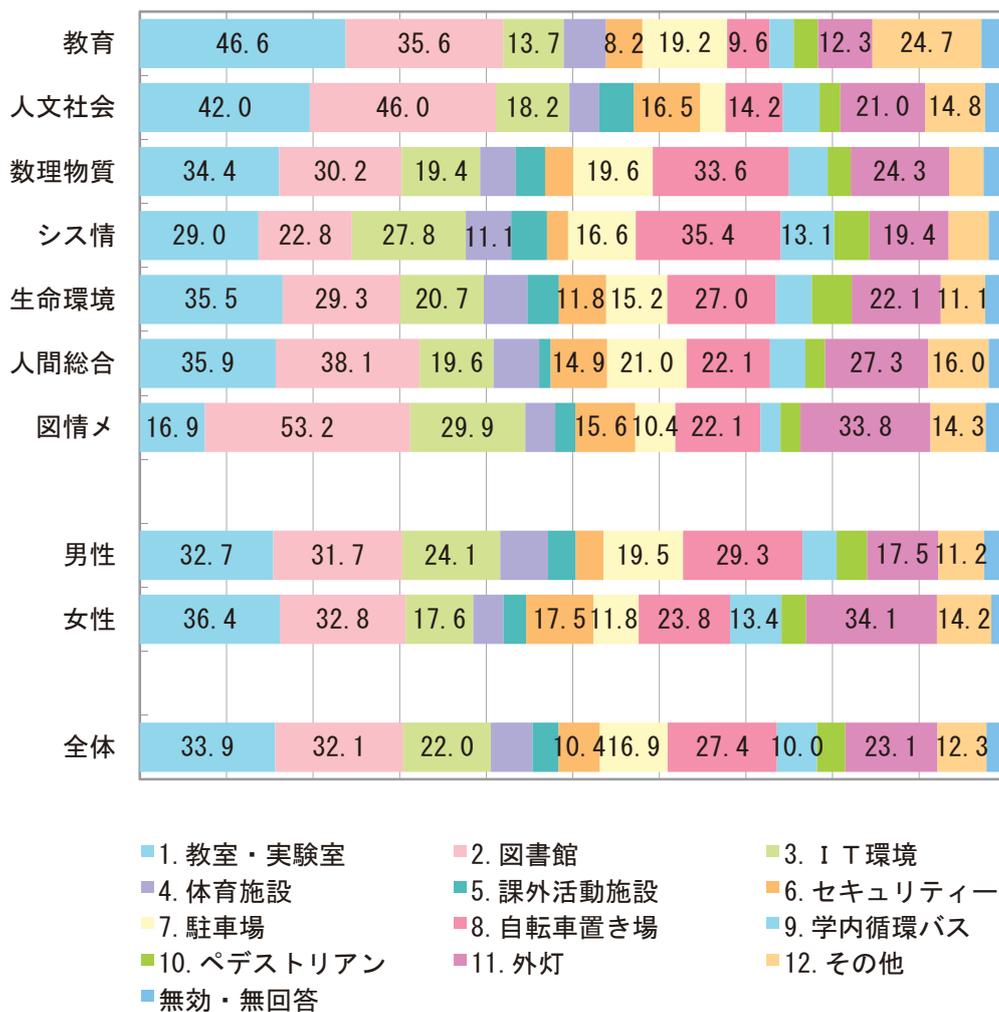
◎文系研究科では研究設備、理系研究科では交通環境の整備・充実を求める声が多い。

整備・充実を要望する設備を3つ以内で答えてもらった。研究科ごとにより異なるが、全体に「セキュリティー」「学内循環バス」「外灯」について女性回答者の要望が高い。

研究環境については文系研究科で不満が大きい。「教室・実験室」は教育（46.6%）、人文社会（42.0%）で、「図書館」は図情メ（53.2%）、人文社会（46.0%）で特に回答率が高い。「IT環境」の回答率は図情メ（29.9%）とシス情（27.8%）で高い。「セキュリティー」の要望は人文社会（16.5%）、図情メ（15.6%）、人間総合（14.9%）で比較的高いが、これは女性の比率が高い（人文社会 57.7%、人間総合 56.8%、図情メ 51.9%）ためだろう。理系研究科の回答者は交通手段に関する不満が高く、「自転車置き場」の回答率がシス情（35.4%）、数理物質（33.6%）、生命環境（27.0%）で高い。シス情は「学内循環バス」の回答率も高い（35.4%）。「外灯」は図情メが33.8%と突出して回答率が高い。

「自転車置き場」については社会人未経験者の回答率が高い。「図書館」と「セキュリティー」については国内他大学出身者からの、「体育施設」と「課外活動施設」については国外大学出身者からの、「駐車場」、「自転車置き場」、「ペDESTリアン」については筑波大学出身者からの充実を求める声が多い。

図 7.3 整備・充実してほしい施設（研究科別、男女別、全体）



## 7.4 学内の福利厚生施設に関する満足度について（問 47）

- ◎パン販売、書店など、全体的にはほぼ満足。
- ◎食堂においては、メニューや価格のばらつきにやや不満がみられる。

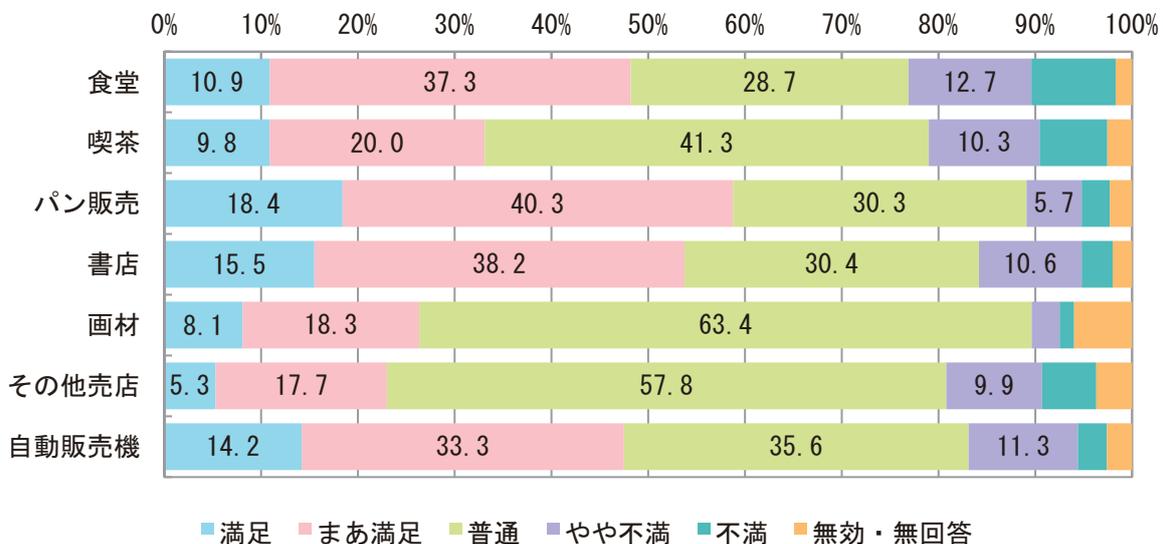
今回は、新たに学内の福利厚生施設の満足度について、「食堂」「喫茶」「パン販売」「書店」「画材」「その他売店」「自動販売機」の7項目で調査した。

この結果、「パン販売」、「書店」の満足度は非常に高く、これは学群生と同じ結果となった。大学院生においても、「パン販売」の場所が身近にあること、書籍の売店が学内の各エリアにあり一般の書店より廉価（1割引）で購入できること等から満足度が高いものと思われる。

一方、食堂や喫茶については、満足している学生は5割を下回っているが、不満の学生も2割前後とそれほど高くない結果となった。不満の理由や要望として多く挙げられたのは、「学食としては値段が高い」「営業時間を延ばしてほしい」「遅くまで開いているコンビニがほしい」などである。大学院生の場合、夜遅くまで研究を続ける学生が多いため、学群生よりも、夜の営業に対する要望が強いと言える。画材、その他売店、自動販売機については、「普通」と答える学生が多数派であった。

全体的には、大半の学生が福利厚生施設に大きな不満は感じていないと思われるが、広大なキャンパスの各エリアに福利厚生施設が点在していることから、2割程度の学生は、特定のエリアの福利厚生施設に不満感をもっているものと思われる。

図 7.4 福利厚生施設満足度（全体）



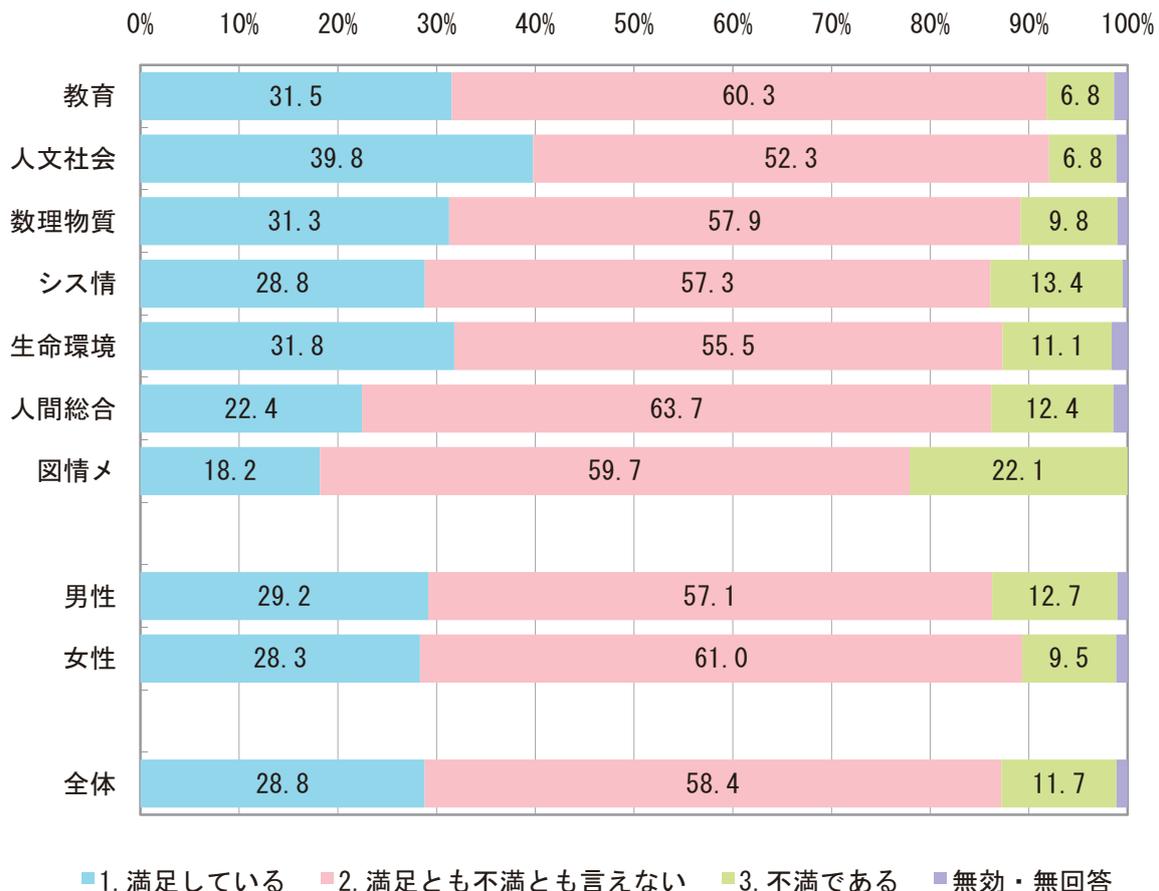
## 7.5 TWINS の満足度について (問 48)

◎前回調査 (平成 20 年度) とほぼ変わらぬ結果。

大学院生に対する TWINS の満足度の調査は、今回が 2 回目である。調査は選択肢を一つだけ選択させる形で行ったが、全体の回答率は「満足とも不満とも言えない」が最も高く 58.4% (前回 56.8%)、次に高いのが「満足している」で 28.8% (前回 33.3%)、最も低いのが「不満である」の 11.7% (前回 8.3%) である。「満足」の回答率が減り、「不満」の回答率が増えているが、変化の幅が小さい上、最も回答率が高い「満足とも不満とも言えない」がほぼ同じ回答率なので、全体としての変化は少ないと考えられる。

男女別にデータを比較しても、大きな差は見られない。ただし研究科別に見ると満足度にかかなりの違いが見られ、人文社会での「満足」の回答率が 4 割近く (39.8%) と突出して高いのに対し、「満足」の回答率は人間総合 (22.4%) や図情メ (18.2%) では 2 割前後にしか届かず、人文社会の半分程度にしかっていない。特に図情メでは「不満」の回答率が 22.1% と「満足」の回答率を上回っており、全体でも最高になっている。ちなみに、教育と人文社会では「不満」の回答率が 6.8% と図情メの 3 分の 1 以下である。全体では理系研究科の方が文系研究科より不満度が高い傾向が見て取れる。

図 7.5 TWINS の満足度 (研究科別、男女別、全体)



## 7.6 キャンパス内でのマナーについて（問 49）

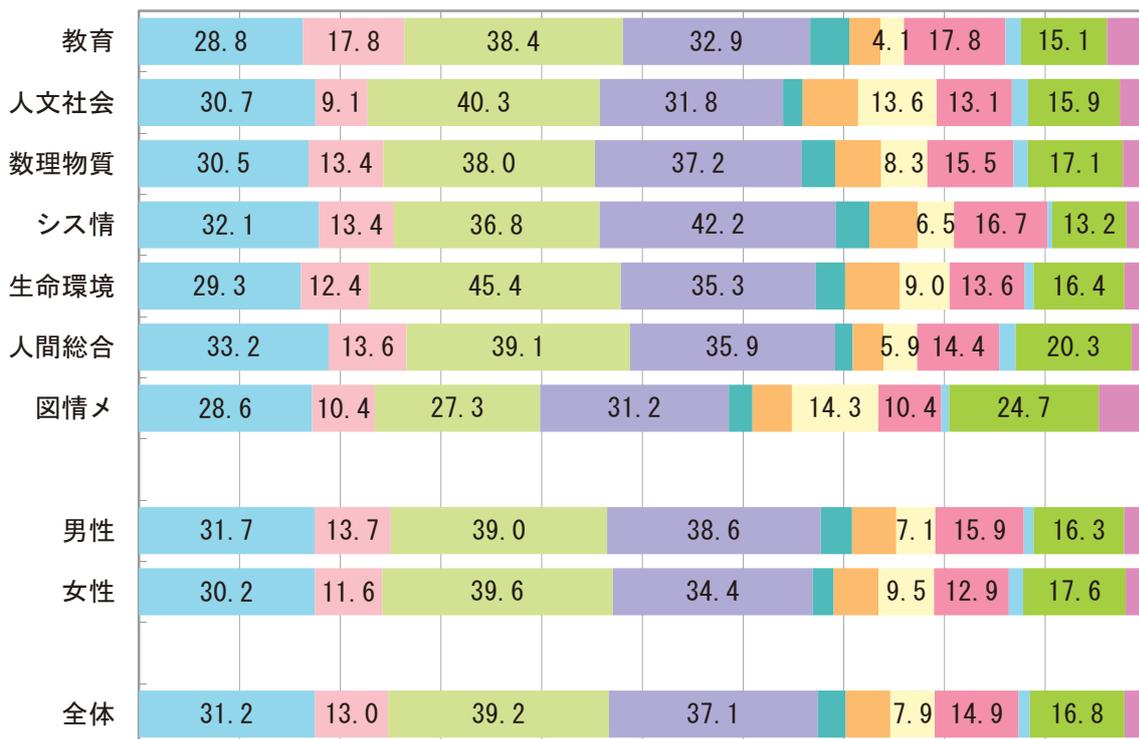
- ◎前回調査同様、自転車の運転マナー向上を望む声が多い。
- ◎研究科によっては、共有スペースの利用マナーを問題視する声も多い。

この項目では、あてはまる選択肢全てに回答してもらう形でキャンパスでのマナーについて向上を望んでいることを尋ねた。

全体としてマナー面で特に問題があると回答者が感じているのは、「自転車の運転マナー」（39.2%）、「自転車・バイクの駐輪マナー」（37.1%）、「自動車・バイクの運転マナー」（31.2%）で、前回調査時（平成20年度）にも回答率が高かった項目ばかりである（前回調査の回答率は「自転車の運転マナー」41.0%、「自転車・バイクの駐輪マナー」37.2%、「自動車・バイクの運転マナー」28.8%であった）。

どの選択肢についても、男女差はほとんど見られない。研究科別に見ると、「自転車の運転マナー」については図情メでは回答率が全体平均よりも10ポイント低いことがわかる。これは自転車利用の実態が春日エリアではつくば地区の他エリアとはかなり異なっているためかもしれない。なお、全体としての回答率は10%以下であるが、「談話室等共有スペースの利用マナー」については人文社会（13.6%）と図情メ（14.3%）では若干回答率が高くなっている。

図 7.6 向上を望むマナー（研究科別、男女別、全体）



- 1. 自動車・バイクの運転マナー
- 2. 自動車の駐車マナー
- 3. 自転車の運転マナー
- 4. 自転車・バイクの駐輪マナー
- 5. アルコールハラスメント
- 6. 各種の勧誘活動
- 7. 談話室等共有スペースの利用マナー
- 8. 喫煙マナー
- 9. その他
- 10. 特にない
- 無効・無回答

## 第8章 進路や就職活動について

### 8.1 修了後の進路について（問50）

- ◎全体では、進学が9.7%、研究員が2.3%、就職が56.0%、復職が3.4%。
- ◎無回答を含め、まだ決まっていない者は28.6%。
- ◎就職の内訳は、企業が38.3%、教員12.5%、公務員3.6%、その他1.6%。

進路は進学と就職に大きく分けることができるが、進学では、筑波大学への進学が進学者の8割を超えており、より専門的な研究を継続（ないし、継続を希望）している。就職では、企業への就職が就職者の約7割と非常に高い。研究科別では、シス情が64.9%、数理物質が56.6%と、企業への就職率が高い。教育は67.1%と半数以上が小中高の教員である。人文社会と人間総合は、大学教員への就職、図情メと生命環境は、公務員への就職が比較的多い。また、研究員（ポストク）は全体では2.3%であるが、人文社会が5.7%と高い。

表 8.1 修了後の進路について（研究科別、男女別、全体）

	教育	人文社会	数理物質	シス情	生命環境	人間総合	図情メ	男性	女性	全体
(進学等) 筑波大学大学院	4.1	9.7	8.3	4.5	7.1	11.7	9.1	7.9	7.9	7.9
(進学等) 国内の他大学大学院	2.7	1.1	1.8	0.2	0.2	0.9	0.0	1.0	0.4	0.8
(進学等) 海外の大学院	0.0	2.8	0.5	0.5	0.5	1.3	0.0	0.5	1.5	0.8
(進学等) その他	0.0	0.6	0.0	0.0	0.2	0.4	0.0	0.1	0.3	0.2
(進学等) 研究員、研究生等	1.4	5.7	1.8	1.5	2.5	2.7	0.0	2.5	1.9	2.3
(就職) 企業	0.0	9.7	56.6	64.9	32.0	14.9	27.3	43.7	25.9	37.7
(就職) 大学教員	2.7	21.0	2.3	3.0	3.9	14.2	3.9	5.8	9.9	7.1
(就職) 小・中・高校の教員	67.1	7.4	1.6	0.8	2.1	7.4	1.3	5.2	5.8	5.4
(就職) 公務員	2.7	3.4	1.0	2.6	6.7	3.4	9.1	3.1	4.5	3.6
(就職) 自営・起業	0.0	1.1	0.3	0.3	0.2	1.3	1.3	0.5	0.8	0.6
(就職) その他	0.0	1.1	2.1	0.7	1.4	3.1	1.3	1.2	2.6	1.6
(復職) 企業	0.0	0.6	0.3	0.2	1.4	0.9	0.0	0.5	0.9	0.6
(復職) 大学教員	0.0	0.0	0.3	0.0	1.8	0.0	2.6	0.7	0.1	0.5
(復職) 小・中・高校の教員	8.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	1.3	0.4	0.5	0.4
(復職) 公務員	0.0	4.0	0.3	1.2	2.1	0.5	2.6	1.2	1.3	1.3
(復職) 自営	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.1	0.0
(復職) その他	0.0	1.1	0.3	0.0	0.5	1.6	0.0	0.5	0.8	0.6
その他	0.0	1.7	0.3	0.5	2.3	3.2	1.3	1.4	1.8	1.6
決まっていない	8.2	18.2	17.8	15.7	24.4	25.1	29.9	18.4	24.5	20.4
まだ考えていない	1.4	4.5	0.8	0.8	4.6	2.7	9.1	1.7	4.1	2.5
無効・無回答	1.4	6.3	3.9	2.6	6.0	4.1	0.0	3.8	4.5	4.1

## 8.2 進路決定の理由について（問 51）

- ◎進路の決定は、「やりがい」「自分の能力や適性」「安定した生活」を考えて。  
 ◎進路に「大学院での学修の活用」「大学院での研究の活用」はあまり関与していない。

本設問では、進路を決める理由について、選択肢の中から2つ以内で選んでもらった。結果は表 8.2 の通りであるが、「やりがい」43.9%、「自分の能力や適性」32.4%、「安定した生活」26.6%を考えて進路を決定する割合が大きい。「やりがい」と答えているのは、大学院における学修経験を活かせる就業環境を望んでいることを反映していると思われる。他に、「社会的貢献」「年収」「専門知識を深める」「将来性」が10%を超えている。「大学院での学修の活用」7.2%、「大学院での研究の活用」9.8%の割合が低いのは、実際の就職活動において、大学院での学修や研究が必ずしも活かさないことを認識するためであろうか。

研究科別では、それほど大きな偏りはないが、「やりがい」を教育と人間総合では半数以上があげており、図情メは他ではそれほど高くない「社会的貢献」と「社会的評価」がある程度高率になっており、目立っている。男女別では、ほとんど違いが見られない。

これらの結果は、前回調査（平成 20 年度）の結果とほぼ同様である。

表 8.2 進路決定の理由について（研究科別、男女別、全体）

	教育	人文 社会	数理 物質	シス情	生命 環境	人間 総合	図情メ	男性	女性	全体
やりがい	65.8	36.4	45.0	38.9	44.2	50.1	32.5	45.8	40.4	43.9
社会的貢献	16.4	11.9	16.3	19.2	21.0	16.9	24.7	18.8	16.7	18.0
年収	6.8	10.8	20.2	19.2	15.7	8.1	10.4	16.5	10.9	14.6
安定した生活	17.8	22.2	29.2	31.6	29.3	20.1	24.7	26.8	26.4	26.6
自分の能力や適性	39.7	37.5	31.5	32.8	27.2	33.9	35.1	30.7	36.0	32.4
専門知識を深める	11.0	21.0	10.9	8.1	12.7	18.5	11.7	12.7	14.0	13.1
大学院での学修の活用	17.8	9.1	5.9	4.0	5.5	10.4	10.4	5.9	9.7	7.2
大学院での研究の活用	2.7	17.0	5.9	5.0	10.6	15.4	11.7	7.8	13.6	9.8
社会的評価	1.4	2.3	4.1	3.5	4.4	2.5	9.1	4.1	2.6	3.5
将来性	5.5	11.9	13.4	18.7	13.6	10.6	14.3	14.0	13.8	13.9
地理的利便性	2.7	1.7	5.2	3.8	4.6	1.1	6.5	3.1	4.2	3.5
その他	1.4	3.4	2.3	1.3	1.8	1.8	2.6	1.8	2.2	1.9
無効・無回答	0.0	2.8	2.3	3.0	2.5	2.7	3.9	2.8	2.3	2.7

### 8.3 将来の進路についての感じ方について（問 52）

- ◎将来の進路について関心をもっている者は 89.1%。
- ◎職業生活を充実させるには自分自身の責任が大きいと感じている者は 87.3%。
- ◎希望する進路に進むための具体的な計画を立てている者は 48.4%。

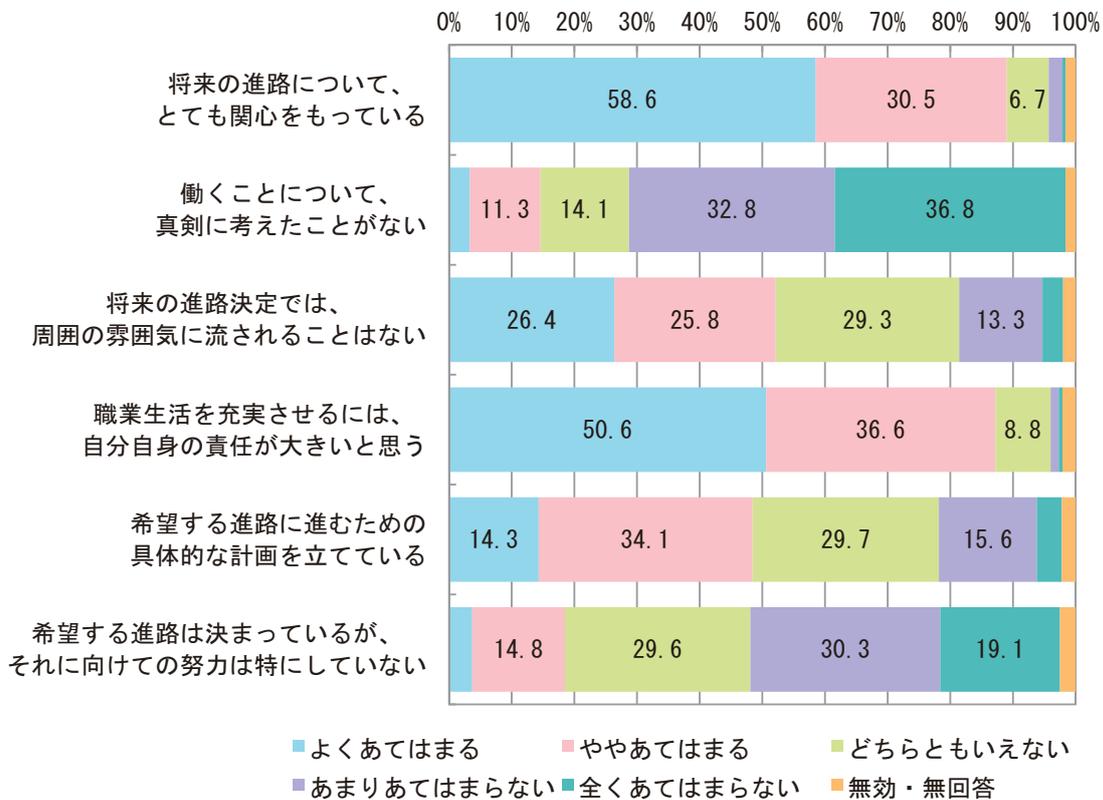
自分の将来に対する関心の程度をたずねたところ、進路への関心の程度については、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計が 89.1%であった。一方、働くことについて真剣に考えた経験についての肯定的な回答（反転項目のため「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の合計）は 69.6%であり、将来への関心の高さと比較すると、働くことへの関心は相対的に低めとなっている。

進路決定や職業生活に対する自律の程度をたずねたところ、進路決定場面における自律度については、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計が 52.2%であった。職業生活全体における自律度においては、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計が 87.3%であった。当面の進路決定においては、周囲の雰囲気気を気にする者が約半数を占めるが、職業生活の充実のためには自律が重要であると認識されていた。

進路を実現するための計画や実行の程度をたずねたところ、計画の具体性については、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計が 48.4%であった。進路の実現のための努力についての肯定的な回答（反転項目のため「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の合計）は 49.4%であった。

将来への関心の強さと比較すると、進路を実現するための計画の立案やその実行ができていると思っている者の割合が低い。希望する進路の実現に向けて、具体的な道筋を描くことができるような支援が必要であると考えられる。

図 8.3 将来の進路について感じ方（全体）



## 8.4 就職活動の情報源について (問 53)

- ◎就職活動をする学生では、「インターネット」による情報収集が突出している。次いで「ゼミの同輩・先輩」である。
- ◎学内情報の活用は、就職活動をする学生の約2割。

本問と次問については、「就職活動をした方と、就職活動中の方」に限定して回答してもらった。本問は、就職活動に役だった主な情報源を、3つまでの複数回答可で尋ねた。「無回答」を除き、回答のあった1,127名について、その内訳を表8.4にまとめた。

「インターネット」による企業情報が突出しているが、就職活動がインターネットを介して実施される環境であることを反映している。また、「ゼミの同輩・先輩」と答えた学生も多く、これは就職活動の方法を模索する中で、経験者の話に頼っていることが考えられる。「指導教員」に相談する割合はそれほど高くないが、これは、過去において指導教員からの情報で就職していた時期と比べ、最近は大学院生が自分で就職活動をしなければならない環境になってきた影響であると思われる。前回調査（平成20年度）と比べると、「インターネット」はやや減り、「ゼミの同輩・先輩」と「指導教員」がやや増えている。

男女別にみると、「ゼミの同輩・先輩」や「OB・OG」を頼るのは、男性に多く、「就職課・キャリア支援室」「就職資料コーナー」などは、女性の方が利用率が高い傾向となっている。

表 8.4 就職活動の情報源（研究科別、男女別、全体）

	教育	人文 社会	数理 物質	シス情	生命 環境	人間 総合	図情メ	男性	女性	全体
指導教員	20.0	17.0	11.1	16.1	19.5	26.7	22.5	17.7	19.0	18.1
専攻等の就職委員	0.0	3.8	2.3	6.3	1.0	1.9	2.5	3.9	2.1	3.4
ゼミの同輩・先輩	25.0	30.2	40.1	41.3	34.8	22.8	22.5	38.0	28.2	35.0
就職課・キャリア支援室	35.0	15.1	13.8	16.1	19.0	8.3	25.0	14.3	17.8	15.4
スチューデントプラザの 就職資料コーナー	30.0	11.3	4.1	4.2	6.7	4.9	7.5	4.7	8.3	5.8
大学の情報提供システム	15.0	7.5	6.9	11.8	4.8	6.3	5.0	7.9	8.9	8.2
大学の就職ガイダンス	5.0	15.1	20.3	18.9	18.1	5.3	7.5	16.7	13.4	15.7
生命環境の キャリア・デザイン・ルーム	0.0	0.0	0.5	0.3	2.9	0.0	0.0	0.9	0.3	0.7
就職情報誌	0.0	7.6	18.4	10.8	16.7	11.7	22.5	13.7	13.4	13.6
企業からのDM	0.0	3.8	8.3	8.4	7.6	5.8	2.5	7.5	6.5	7.2
インターネット	35.0	64.2	64.1	54.5	68.6	52.4	70.0	59.3	59.1	59.3
インターンシップ	5.0	9.4	10.6	12.9	7.1	7.3	5.0	10.3	8.6	9.8
OB・OG	5.0	13.2	15.7	21.1	13.8	14.6	12.5	18.1	12.8	16.5
その他	10.0	5.7	5.1	5.5	5.7	10.2	2.5	6.1	6.8	6.3
回答数	20	53	217	380	210	206	40	789	337	1,127

## 8.5 指導教員への相談について (問 54)

- ◎指導教員に「相談した」は、「時々相談した」を含め 36.8%。
- ◎若干ではあるが、「相談しようとしたが断られた」学生も。

前問と同様、「就職活動をした方と、就職活動中の方」に限定した上で、進路について指導教員にどの程度相談しているかを尋ねた。「無回答」を除き、回答のあった 1,143 名について、その内訳を表 8.5 にまとめた。

全体では、指導教員に「相談した」は、「時々相談した」を含め 36.8%である。指導教員に相談している大学院生は 3分の1ということになる。研究科別では大きな差がないが、教育と人文社会、人間総合、図情メでは、「相談した」と「時々相談した」が 40%を超えている。男女別では、女性の方が少し相談する率が高いという結果である。また、一部の研究科では、少数ではあるが「相談しようとしたが断られた」と答えた学生がいた。

表 8.5 指導教員への相談 (研究科別、男女別、全体)

	教育	人文社会	数理物質	シス情	生命環境	人間総合	図情メ	男性	女性	全体
たびたび相談した	15.8	8.9	5.9	4.5	6.1	10.8	19.5	6.7	8.4	7.2
時々相談した	31.6	33.9	27.3	26.8	32.9	33.5	22.0	28.1	32.9	29.6
ほとんど相談していない	36.8	32.1	37.3	38.1	32.4	32.5	36.6	36.9	31.8	35.4
相談はしていない	15.8	25.0	28.2	30.2	27.7	21.7	19.5	27.5	25.4	26.9
相談しようとしたが断られた	0.0	0.0	1.4	0.3	0.5	0.5	2.4	0.5	0.9	0.6
その他	0.0	0.0	0.0	0.3	0.5	0.9	0.0	0.3	0.6	0.3
回答数	19	56	220	381	213	212	41	796	346	1,143

## 第9章 その他

### 9.1 学修・研究や生活に関わる情報源について（問 55）

- ◎情報源は、指導教員と友人が最も多い。
- ◎ TWINS 掲示板はほとんど利用されていない。

学修・研究や生活に関わる一般的な情報源としてもっとも多くあげられたのが「友人等」(50.5%)、次いで「指導教員」(48.9%)であった。学群学生では指導教員を情報源として挙げた比率は10.8%であり、大学院生になると指導教員の重要性が増すことが分かる。一方、デジタル媒体でよく使われているのは「研究科・専攻の掲示板」(31.9%)やホームページである。TWINSの利用率は4.6%と低い。

各情報源の利用率は、研究科によって違いがある。メーリングリストは人文社会や生命環境である程度使われているのに対して、図書館情報メディアや数理物質ではほとんど使われていない。ただし、図書館情報メディアでは、メーリングリストの代わりに研究科・専攻の掲示板が比較的良好に使われているようである。

また、事務職員や指導教員の比率も研究科によってかなりの違いがみられた。たとえば、図書館情報メディアでは指導教員をあげる比率が63.6%であるのに対して、システム情報工学研究科では42.9%しかなかった。一方、留学生と日本人学生の違いに情報源では大きな差はないようである。

表 9.1 留学生 / 日本人、研究科別学修・研究や生活に関わる一般的な情報源 (%)

	全体	留学生	日本人学生	教育	人文社会	数理物質	シス情	生命環境	人間総合	図情メ
1 指導教員	48.9	51.5	48.5	53.4	44.9	43.9	42.9	50.9	56.4	63.6
2 研究者・専攻の事務職員	17.2	22.6	16.0	17.8	27.8	19.9	10.1	18.9	18.7	15.6
3 研究科・専攻の掲示板	31.9	41.9	30.0	39.7	33.0	33.3	31.1	28.3	32.5	39.0
4 TWINS 掲示板	4.6	6.4	4.3	4.1	1.1	5.4	7.5	3.5	2.7	6.5
5 大学の HP	25.5	20.9	26.7	23.3	25.6	28.2	26.2	27.0	23.0	23.4
6 研究科・専攻等の HP	25.9	16.2	28.6	8.2	17.0	25.3	45.5	19.4	13.5	41.6
7 専攻等のメーリングリスト	8.9	10.1	8.5	9.6	14.2	4.7	6.6	13.1	10.2	1.3
8 友人等	50.5	53.9	50.1	43.8	53.4	46.5	52.6	50.9	52.8	39.0
9 その他	4.4	3.8	4.4	6.8	5.1	5.2	2.0	4.4	5.9	3.9
人数計	2,321	425	1,782	73	176	387	604	434	557	77

## 9.2 相談機関について (問 56)

- ◎ 4つの相談機関の利用率は、0.3%から13.7%と低い。
- ◎ 学生相談室については、留学生と図情メディアの利用率が特に低い。

4つの相談機関の利用率は、順に13.7%（保健管理センター学生相談室）、3.2%（保健管理センター精神科）、4.6%（総合相談窓口）、0.3%（ワーク・ライフ・バランス相談室）であった。学生相談室の利用率は、日本人学生では15.0%であるが留学生では8.9%にとどまった。また、春日地区にある図書館情報メディア研究科の利用率は7.8%と全研究科の中で最低となった。こうした層に対して利用を容易にするための施策が今後は必要になるかもしれない。

図 9.2 各機関の利用率・認知率 (%)

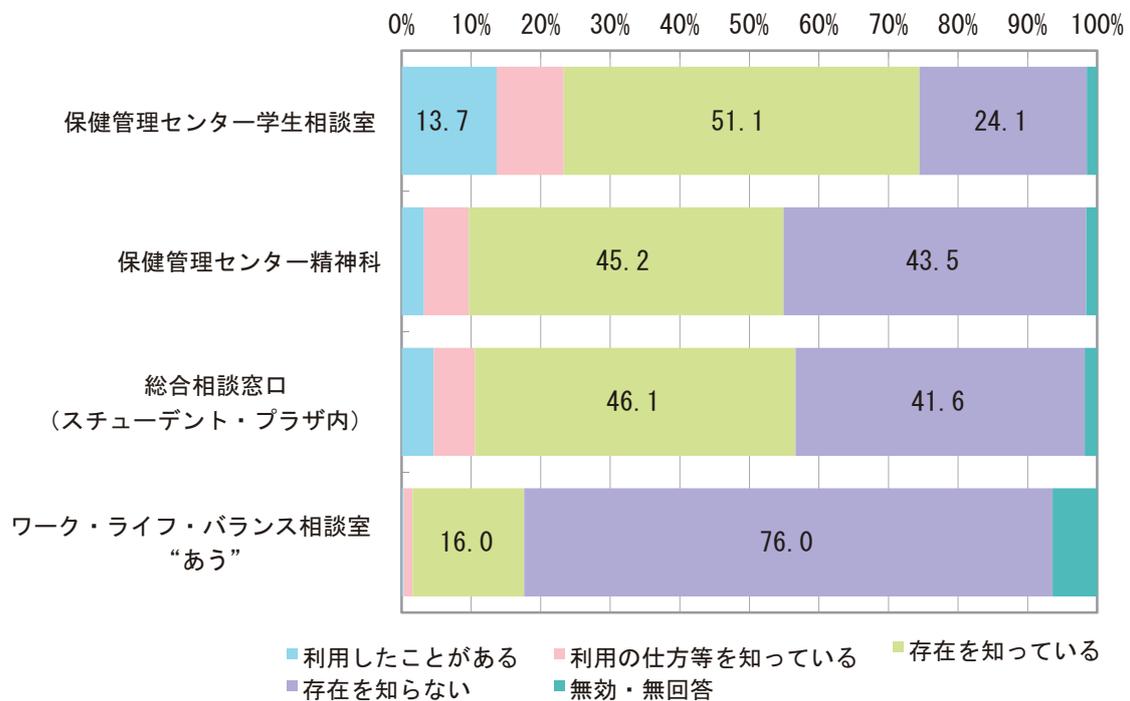


表 9.2 留学生 / 日本人、研究科別利用率 (%)

	全体	留学生	日本人学生	教育	人文社会	数理物質	シス情	生命環境	人間総合	図情メ
A 保健管理センター学生相談室	13.7	9.5	15.0	12.3	15.3	14.5	12.3	14.1	14.7	7.8
B 保健管理センター精神科	3.2	1.9	3.5	4.1	5.1	3.4	3.0	2.5	2.5	6.5
C 総合相談窓口	4.6	5.6	4.6	8.2	5.1	6.5	4.8	3.5	3.8	1.3
D ワーク・ライフ・バランス相談室	0.3	0.0	0.3	0.0	0.0	0.8	0.3	0.2	0.0	0.0
人数計	2,321	425	1,782	73	176	387	604	434	557	77

### 9.3 学内広報誌について (問 57)

- ◎学内広報誌はあまり読まれていない。
- ◎最も読まれている「筑波大学生新聞」でも、定期的読者は13.8%。

「筑波大学新聞」を定期的に読む大学院生が13.8%で一番多く、その他は10%以下であった。この比率は、学群学生の結果とほぼ同じである。

留学生と日本人学生を比較してみると、「その他」を除く全てについて留学生の方が読む率が低いことが分かった(表9.3)。今後は、留学生に読みやすいように工夫する必要があるかもしれない。また、研究科別に比較してみると、図書館情報メディア、人文社会、教育、人間総合といった文科系(を含む)研究科で比較的読まれる率が高いのに対して、数理物理やシステム情報工学、生命環境といった理系の研究科では低いという傾向がみられた。広報誌の内容が文科系向けに偏っていないかどうかの検討が必要かもしれない。

図 9.3 広報誌の定期的読者 (全体)

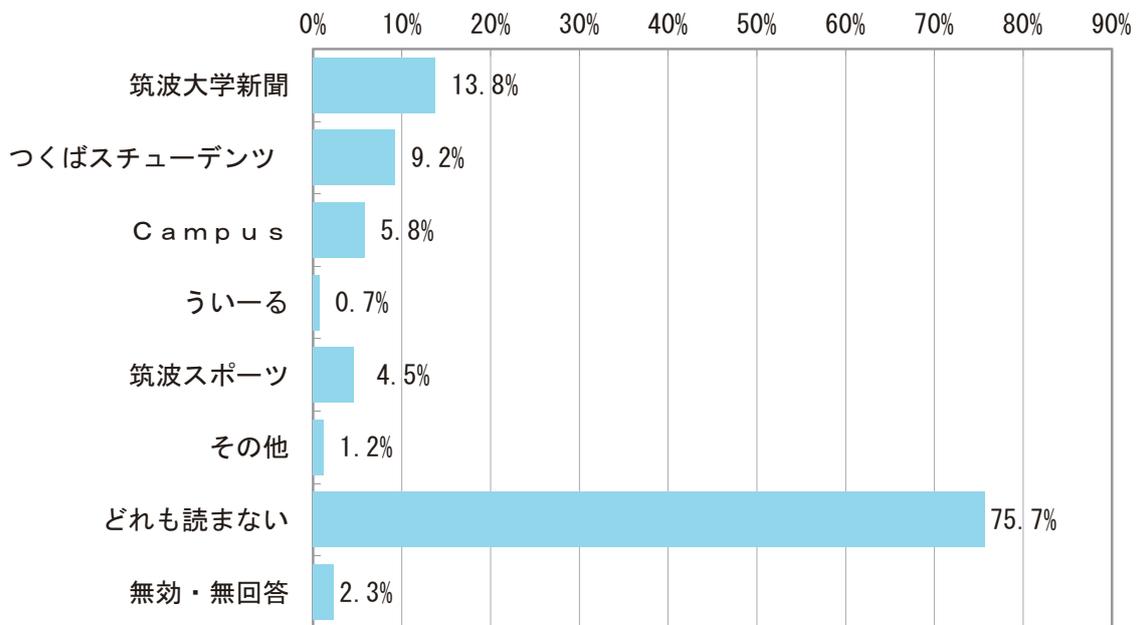


表 9.3 広報紙の定期的読者 (留学生 / 日本人、研究科別)

	全体	留学生	日本人学生	教育	人文社会	数理物質	シス情	生命環境	人間総合	図情メ
1 筑波大学新聞	13.8	8.9	15.0	17.8	15.3	11.4	10.6	12.9	17.4	22.1
2 つくばスチューデント	9.2	3.5	10.6	9.6	7.4	6.5	8.1	8.8	12.0	19.5
3 Campus	5.8	4.5	6.1	6.8	5.1	3.1	5.5	7.1	5.7	15.6
4 ういーる	0.7	0.2	0.8	0.0	0.0	0.3	0.7	0.9	0.7	3.9
5 筑波スポーツ	4.5	1.4	5.3	6.8	0.6	2.3	2.5	2.3	11.1	3.9
6 その他	1.2	2.8	0.7	0.0	1.1	1.3	0.8	2.5	0.4	2.6
7 どれも読まない	75.7	79.1	75.0	75.3	77.3	80.1	80.1	76.3	68.8	62.3
人数計	2,321	425	1,782	73	176	387	604	434	557	77

#### 9.4 学外研修施設の利用について（問 58）

- ◎利用率は 13.8%だが、実態はさらに低そうである。
- ◎留学生と図書館情報メディア研究科の利用率が低い。

大学院生の学外研修施設の利用率は、13.8%であった。この値は、学群学生の 7.9%よりは高いが、この利用率が大学院生としての利用を反映した回答かどうかは疑わしい。利用率を筑波大学出身者とそれ以外の学生にわけて計算したところ、筑波大学出身者では 20.7%が「利用経験あり」であったが、その他の大学出身者ではこの比率は 7.1%にとどまった。このことは、回答者が利用経験「あり」の中に、大学院生の利用ではなく、学群学生時の利用を含めて回答していることを示唆しているといえる。大学院に進学してからの利用に限定する設問にしていれば、利用率はさらに低かったであろう。

また、図情メと留学生の間で利用率が相対的に低い傾向がみられた（表 9.4）。

図 9.4 学外研修施設の利用率（全体）

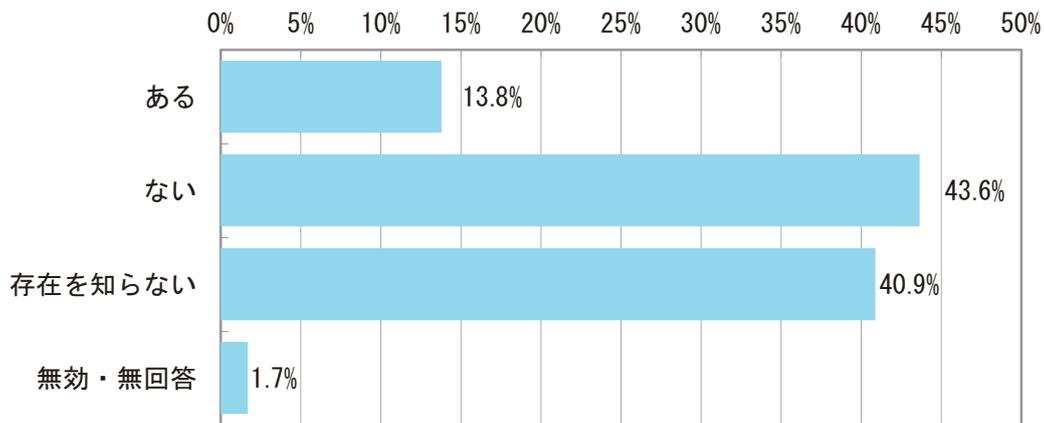


表 9.4 学外研修施設の利用率（留学生 / 日本人、研究科別）

	全体	留学生	日本人学生	教育	人文社会	数理物質	シス情	生命環境	人間総合	図情メ
学外施設の利用率	13.8	10.4	14.6	9.6	11.4	16.5	15.4	17.3	9.9	6.5
人数計	2,321	425	1,782	73	176	387	604	434	557	77

## 第10章 自由記述

### 1. はじめに

本実態調査の有効回答 2,321 件のうち、自由記述欄への記入があったのは 454 件であった。回答者の約 20 パーセントが、「本学大学院の教育・研究環境や学生生活全般に対する要望や提言等」を記述している。前回のアンケート（平成 20 年度大学院学生生活等に関するアンケート調査）では、回答者の約 25 パーセントが自由記述欄に記入しており、筑波地区における今回の回答結果は自由記述欄への回答に限っては回答率がやや低下したことがわかる。

自由記述に関する分析の方法並びに分析結果の記述方法については、前回に倣い、まず 454 件の多様な意見を以下の A、B、C の観点で分類し、分析した。

- A. 制度（経済支援、学生生活支援など）に対する要望・不満
- B. 教職員に対する要望・不満
- C. 施設に対する要望・不満（院生特有のもの）

さらに、次の D、E の観点による分析を加えて、「個々の記述内容の概観」を構成した。

- D. 施設に関する要望・不満（学群生と共通する問題）
- E. 留学生関連の要望・不満

### 2. 個々の記述内容の概観

#### A. 制度等に対する要望・不満

##### (A1) 経済的支援

前回のアンケート結果と同様に、授業料の免除や奨学金制度の充実など学費に対する経済的支援を求める要望が多かった。特に博士後期課程の学生に対する経済支援を求める声が多く、中には「博士後期課程の授業料の無料化などの支援が優れた人材の確保につながる」との指摘もあった。また、社会人学生を対象とした経済支援、私費留学生のための奨学金制度の充実を求める記述もみられた。一方、授業料免除や奨学金給付の選考結果に納得できず、選考の基準・方法について疑問があるとの意見や見直し案の提案が複数あった。

##### (A2) 学生生活支援

所属する研究室の閉鎖性を訴える記述が複数みられた。指導教員との関係など、研究室内の限られた人間との固定的な人間関係にストレスを感じているとの回答もあった。そうした状況の打開策として、研究室の公開や研究室外の人々と交流する機会を切望する意見が複数あった。また、他大学からの進学者が研究室内で孤立しがちであるといった事例の記述があり、他大学からの進学者を対象とした学生生活支援を望む声もあった。

学生相談窓口については、より気軽に相談に行けるような雰囲気を目指す声が多かった。また、対人関係に関わる精神障害を持つ学生に対する支援を行ってほしいとの意見があった。

また、大学院生の意見をまとめ、大学側に伝えて意見交換を行うための学生組織を形成する必要性を指摘する意見があった。

##### (A3) カリキュラムなど

「学生数が多く、教員の指導が学生一人一人に行き届いていないので、適切な定員数を見直してほしい」との意見が複数あった。

授業については、履修科目が多く、自身の研究のための時間が限られてしまうといった声や、授業内容

についてはより専門性の高い内容を求める声があった。その他、他大学との連携や民間の人材との交流による教育内容の充実や学生同士の学術交流（学内外）を望む記述があった。

研究指導については、指導教員以外の教員からも指導を受けられるような柔軟な体制を望む声があった。また、教員の力関係による研究環境の優劣に対する不満や、「退職教員の補充がないので困る」といった意見もあった。

#### (A4) その他の主な要望

- ・大学院生を対象とした就職支援
- ・学会参加費など研究活動全般を対象とした研究費支援
- ・学習情報や就職情報などに関する情報網の整備（インターネットの活用）
- ・ Semester 制の採用

### B. 教職員に対する要望・不満

#### (B1) 教員に対して：専門的な授業の不足、教育者としての資質に疑問、多忙すぎる

専門的な（ただし、教員の研究分野に極端に偏りすぎない）内容の授業をしてほしいという意見が多かった。また就職活動を行えるようゼミの日程などを教員が配慮してほしいとの要望もあった。

教育者としての資質に疑問を持っているという意見も多かった。例えば研究室学生に対する指導力不足、休講や遅刻が多い、精神的に病んでいる学生をほっておくといった内容である。

教員が大学運営業務や事務仕事、雑務に追われ、教員自身の研究や学生指導に使える時間が不十分であり、支障をきたしているとの指摘も多かった。また学生の自主性も必要だが、ある程度は教員が目配りしてほしいとの意見もあった。

#### (B2) ハラスメント（アカハラ、パワハラ、セクハラ）

全体にアカハラ・パワハラに関する様々な意見や訴えが多かったが、特に切実な意見を下記に記載する。

- ・ 学生の金銭負担による国内外学会への強制参加や、学会参加のための研究室における不公平な旅費補助が行われている。
- ・ 学生の研究室での研究時間を早朝から深夜までや土曜日も義務づけられ、ほとんど個人の自由がないが、教員に対して何も言えない状況である。
- ・ 教育の一環として教員から仕事を押しつけられ、自分の研究ができない。
- ・ 指導の実態がなかったにもかかわらず、論文審査の段階になって「この論文は認められない」とするのは、ハラスメントである。

また大学として下記のような対応を望む声もあった。

- ・ 指導教員のハラスメントを学生が大学側へ訴えるのは学生自身の研究環境に影響を与えるため難しいので、頻繁に休学、自主退学、不登校者を出している研究室に対して指導してほしい。
- ・ 意識の低い教員が多いので、アカハラ・パワハラ教育をしてほしい。

他に、指導教員が学生の将来を批判する、声をかけても不機嫌、学生を馬鹿にした発言や見下した態度をとる、学生の失敗を笑いながら他の学生に話すなど、教員の人間性を疑問視する声もあった。またアカハラする先輩をもっと教員がコントロールしてほしいという訴えや、院生同士の研究上のトラブルを教員に相談しても対応しないとの意見、研究室に過度な荷物を持ち込む学生を教員が指導してほしいとの声もあった。

セクハラに関する自由記述は3件のみとアカハラ・パワハラに比べて少なかったが、公的な注意を受けているにも関わらず、女子学生に対する性的発言や中傷を改めない教員がいるとの声があった。

### **(B3) 事務職員の院生対応への不満**

学生の立場にたって考えていない、不親切、行くたびに嫌みのようなことを言われる、横暴、たらいまわしにされるといった、多くは事務職員の対応の悪さを改善してほしいとの意見だった。少数だがいつも丁寧に対応してもらって助かっているとの意見もあった。

## **C. 施設に対する要望・不満（院生特有のもの）**

### **(C1) 研究環境について（冷暖房、スペース、設備、不平等への不満と要望）**

夏の記録的な猛暑を反映してか、研究室・学習室・教室の冷房設備に関する声が多かった。大学院生の多くは、夜間や休日でも大学で研究活動を行っているため、18時以降や休日は止まってしまう集中冷暖房は厳しく、個別冷暖房を望んでいる。また研究棟によっては個別冷暖房が備えられているので、不平等を訴える声も多かった。また研究設備の充実、作品制作スペースの確保（芸術専攻）、研究棟内にシャワー設備やリフレッシュルームが欲しいとの要望もあった。

### **(C2) 図書館への要望**

特に休日や長期休業中（夏期・春期等）の開館時間の延長を求める声が多かった。また蔵書の充実を求める声もあった。

### **(C3) 食堂への不満・要望、コンビニエンスストア等の設置要望**

研究・実験が深夜まで及ぶことが多いので、食堂の営業時間の延長や、24時間飲食できる環境、特にコンビニエンスストアを学内に設置してほしいという意見、自動販売機を充実してほしいとの要望が複数あった。

### **(C4) その他**

駐車場の無料化への要望、音楽関連のサークルによる騒音に対する不満、無料駐車場の設置、既婚女性学生への就学資金援助を要望する声もあった。

## **D. 施設に対する要望・不満（学群生と共通するもの）**

### **(D1) 駐輪マナー**

通路が自転車で妨げられている、駐輪禁止区域への駐輪、点字ブロック上の駐輪など、自転車の駐輪マナーが悪いという意見がとても多かった。

### **(D2) 駐輪場等への不満・要望**

駐輪スペースの増設や整備を要望する意見が多くあった。

### **(D3) 自転車・バイクの運転マナー**

自転車の運転マナーを向上させてほしいという要望が多くあった。また、禁止されているにもかかわらず、ペDESTリアンや学内の歩行者用道路を走る、原付バイクの運転マナーについても指摘があった。

### **(D4) 学生宿舎**

清掃をもっと頻繁に行ってほしいという要望が多かった。また、浴場やシャワー室の利用時間延長を望む声も多かった。居住者が不在時の火災報知器点検に関する不信感を訴える声もあった。

### **(D5) 禁煙・喫煙**

学内全面禁煙制を求める意見が複数あった。一方、喫煙所を増やしてほしいとの声もあった。

### **(D6) トイレ**

学内のトイレをきれいにしてほしいとの意見が多数あった。

### (D7) キャンパス交通システム

学内循環バスの周行頻度をもっと高めてほしいとの意見が多かった。また最終時間をもう少し遅くしてほしいとの要望や、バスが時刻通り来ないことへの不満もあった。

### (D8) 外灯、パトロール

外灯が少なく夜怖いという意見が多かった。また夜間パトロールをもっと増やしてほしいとの要望もあった。

### (D9) IT 環境

学内無線 LAN 環境を強化してほしいとの意見が複数あった。

### (D10) その他

学内の建物や路面の老朽化を改善すべきという意見が複数あった。

## E. 留学生

### (E1) 英語環境の充実

英語が話せる大学スタッフの充実を求める声や意見が複数見られた。また、留学生のための授業は英語で行ってほしい、日本語による講義では英語の資料も提供してほしい、TWINS・掲示板・入学手続き・奨学金関連の書類に英訳を付けたり英語で準備してほしいとの要望もあった。また図書館に英語で書かれている日本関連の資料を充実させてほしいとの意見もあった。

### (E2) トラブル、差別

様々なトラブルや差別に関する下記のような意見があった。

- ・ 教員や学生の語学力不足によって円滑なコミュニケーションがとれないため、実験上トラブルが絶えず精神的にも疎外感を感じている。
- ・ 指導教員の対応が日本人学生と留学生である自分とで異なる（設備の使用、学会参加のための旅費補助など）。
- ・ 言語問題を理由に、留学生が参加できないサークルがある。
- ・ アジア系の留学生に態度が悪い職員がいる。
- ・ 日本人のグループには留学生が入れない雰囲気がある。

### (E3) その他

イスラム教の食事を食堂で出してほしいという意見があった。指導教員の適切な指導を求める声、経済支援を要望する声、冷暖房設備の充実、自転車マナー改善や禁煙を求める声は、日本人学生とほぼ共通していた。

環境にとっても満足しているという声、大学のサポートやこの調査に対する感謝の気持ちを伝える言葉もあった。

## F. その他

### 本アンケートについて

アンケートが長すぎるという意見、どんな要望をどのように実現したかを HP 等で公開してほしいなどの意見があった。

## 3. まとめ

寄せられた多様な意見や要望を整然と分類しまとめることは難しいが、大学院生に固有の要望・不満と

いった観点で個々の記述内容を振り返るとき、研究のための支援、研究環境の充実と改善を望む記述が多くみられたように思う。

「制度に対する要望・不満」では、授業料の免除や奨学金制度の充実といった学費面の経済支援についての要望や、現行の授業料免除や奨学金給付における選考の基準や方法に対する不満が多く寄せられた。前回のアンケート結果（平成20年度実施）と同様に、博士後期課程の学生のための経済支援を望む声が多く、経済面での不安が学業・研究に専念する上での深刻な問題となっていることがわかる。また、研究室の閉鎖性を訴える記述が複数あり、固定的な人間関係の中で学生生活を送っている大学院生のメンタルヘルスを見据えた組織的な取り組みが求められている。

「教職員に対する要望・不満」では、教員が多忙であるために学生が十分な指導を受けられないことや、指導教員によるハラスメントともとれる態度についての不満と改善要望が多かった。教員の多忙による指導不足に対する不満は、前回のアンケート結果でも指摘されている。また、指導教員によるハラスメントともとれる態度に対する不満は研究室の閉鎖性に起因する問題でもあろうが、教員には、研究室がそうした閉鎖的な場であることを自覚し、学生がおかれた立場や心情に配慮する姿勢が求められているといえる。

「施設に関する不満・要望」では、前回のアンケート同様、図書館や研究室などの施設・設備、学生宿舎や食堂といった厚生施設に関する改善要望が多く寄せられていた。また、耐震補強工事に伴う改修が施された施設と改修前の施設を比較し、学習環境の格差を訴える声も複数みられた。一方、自転車の運転マナーや駐輪マナーの悪さを指摘する声も多く、交通安全とマナーについて指導し学生の自覚を促す取り組みを今後も継続的に行う必要がある。

最後に、留学生のための学生生活支援についての要望が多かったことを記しておきたい。本学の今後の取り組みを見据えるとき、留学生に対する経済的支援や人的支援、居住環境や学習環境の整備、情報伝達に関する配慮などについて適切な対応が求められている。

# 東京地区

# 平成 22 年度筑波大学大学院学生実態調査(東京地区)

\*\*\* お願い \*\*\*

この調査は、筑波大学大学院学生の生活・教育・研究環境の実態を把握し、本学大学院学生の生活の一層の向上および教育・研究環境の改善に資することを目的として実施するものです。

今回の調査対象者は、筑波大学大学院に在籍する学生全員です。

この調査は無記名で、他の目的に用いることはありませんので、ありのままを記入してください。

調査結果は、調査報告書として公表し、必要な方策を講じる予定です。

この調査の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

平成 22 年 9 月

筑波大学 副学長(学生担当) 西川 潔

\*\*\*\*\*

## 1. 記入の方法などについて

- ① 回答は、すべてこの調査用紙(次枚から全5ページ)に記入してください。
- ② 回答は、番号を選ぶ選択方式と、具体的に記入または記述するものがあります。  
番号選択方式の場合はあてはまる番号に○をつけてください。  
記入または記述の場合は指定された欄に書き込んでください。
- ③ 氏名・学籍番号などあなた自身を特定し得る情報を書く必要はありません。回収した調査用紙は無記名のまま統計的に処理されます。
- ④ 平成 22 年 9 月 1 日現在で記入してください。

## 2. 提出期間

平成 22 年 9 月 8 日(水)～平成 22 年 9 月 30 日(木)

## 3. 回収方法

記入が済んだ調査用紙は、専攻事務室等の「回収箱」に投函してください。

## 4. 問い合わせ

この調査に関する質問・ご意見等は、

学生生活支援室：電話 029-853-2465

にご連絡ください。



問(11) あなたの現在の居住地について、あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 東京都 23 区内    2. 東京都 23 区以外    3. 千葉県    4. 埼玉県    5. 神奈川県  
6. 上記以外の地域 ( \_\_\_\_\_ )

II. 生活全般について

問(12) あなた、もしくは、あなたの家族の主たる家計支持者はどなたですか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. あなた自身    2. 配偶者    3. 父親・母親    4. 両親以外の親族    5. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(13) あなたの世帯の年間収入についてお答えください。あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 200 万円未満 (約 \_\_\_\_\_ 万円)    2. 200 万円以上～300 万円未満    3. 300 万円以上～400 万円未満  
4. 400 万円以上～500 万円未満    5. 500 万円以上～600 万円未満    6. 600 万円以上～700 万円未満  
7. 700 万円以上～800 万円未満    8. 800 万円以上～900 万円未満    9. 900 万円以上～1,000 万円未満  
10. 1,000 万円以上 (約 \_\_\_\_\_ 万円)    11. 分からない

問(14) あなたは奨学金などを受給していますか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 受けていない    2. 日本学生支援機構の奨学金    3. 私費外国人留学生学習奨励費  
4. 地方公共団体の奨学金    5. 日本の民間団体・財団などの奨学金    6. 日本学術振興会の特別研究員  
7. 文部科学省国費留学生    8. 自国政府の奨学金 (留学生の場合)  
9. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(15) 本学独自の奨学金「つくばスカラシップ」制度をご存じですか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 知っている  
2. 知らない (ホームページに掲載していますのでご覧ください。  
「つくばスカラシップ」についての意見等がありましたら記入してください。  
( \_\_\_\_\_ )

問(16) 大学に希望する経済支援は何ですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 特に希望しない    2. 給付型(返還義務なし)奨学金    3. 貸与型(返還義務あり)奨学金    4. 授業料免除の拡充  
5. 入学料免除の拡充    6. 一時貸付金 (必要理由に○をつけてください。①授業料のため ②生活費のため ③ その他)  
7. その他 (具体例: \_\_\_\_\_ )

問(17) あなたの 1 か月の税込の収入はどれくらいですか？今年 4 月以降で臨時的な収入を除いた 1 か月の平均であてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 10 万円未満    2. 10～20 万円未満    3. 20～30 万円未満    4. 30～40 万円未満    5. 40 万以上

問(18) あなたの 1 ヶ月の平均的な収入の収入源はどのようなものですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 正社員としての給与    2. 民間会社の契約社員や派遣社員    3. 不定期なアルバイト  
4. 他大学での非常勤講師    5. 奨学金    6. 仕送り  
7. 借入金    8. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(19) 平均的な 1 ヶ月の生活費や研究活動費などは充分ですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 充分である    2. まあまあ足りている    3. ぎりぎりである  
**不足している** → { 4. 授業料の納入ができない    5. 研究時間確保でアルバイトができない  
6. 研究用資料・書籍が購入できない    7. IT 環境を整備できない  
8. 学会・研究会などに行けない    9. 研究のための調査に行けない  
10. 研究論文の投稿料・査読料・掲載料が払えない  
11. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(20) 平均的な起床時刻と就寝時刻は何時頃ですか？それぞれについて、およその時刻を 24 時間制で記入して下さい。

起床時刻：だいたい \_\_\_\_\_ 時頃    就寝時刻：だいたい \_\_\_\_\_ 時頃

問(21) 現在の日常生活に、全体として、満足していますか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. かなり満足      2. おおむね満足      3. どちらとも言えない      4. 少し不満      5. かなり不満

Ⅲ. 通学・ハラスメント等について

問(22) あなたの職場からの通学時間は片道どのくらいですか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 15分未満      2. 15分～30分      3. 30分～45分      4. 45分～1時間  
5. 1時間～1時間半      6. 1時間半～2時間      7. 2時間以上

問(23) 大学院入学後、教員によるセクシャルハラスメント（セクハラ）、アカデミックハラスメント（アカハラ）、会社においてパワーハラスメント（パワハラ）を感じたことはありますか？それぞれについて、下の○数字のあてはまる番号すべてを記入して下さい。

セクハラ：(      )、(      )、(      )、(      )

アカハラ：(      )、(      )、(      )、(      )

パワハラ：(      )、(      )、(      )、(      )

- ① 感じたことはない      ② 感じたことがあるが誰にも話をしていない  
③ 感じたことがあり親しい友人に話した      ④ 感じたことがあり知り合いの教員に話した  
⑤ 研究科・専攻のハラスメント担当教員に話した      ⑥ 全学に設置されているハラスメント相談員等に話した  
⑦ その他 (      )

Ⅳ. 健康状態について

問(24) あなたの過去1年間の健康状態はどのようなですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 健康である      2. 健康不良で数日寝込んだ（受診・入院を除く）      3. 身体の病気で受診・入院した  
4. 精神的な問題で受診・入院した      5. 心理的な問題で相談機関を利用した      6. けがで受診・入院した  
7. その他 (      )

問(25) あなたは過去1年間にどのようなことで困ったり悩んだりしましたか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 学業と仕事の両立      2. 学業や研究の不振      3. 単位修得の問題      4. 休学・退学  
5. 転研究科・転専攻      6. 友人との関係      7. 教員との関係      8. 研究室内の問題  
9. 恋愛関係      10. 家族関係      11. 自分の性格      12. 自分の精神的・心理的状态  
13. 経済状態      14. ハラスメント      15. その他 (      )  
16. 特にない

問(26) 次の事柄について、過去1年間のあなたの感じ方に最も近いのはどれですか？A～Gのそれぞれについて、あてはまる番号一つに○を付けてください。

	とても 当てはまる	少し 当てはまる	あまり 当てはまらない	まったく 当てはまらない
A 自分のやりたいことができている	1	2	3	4
B 何となく不安になることがある	1	2	3	4
C 自分のことをよく分かってくれている人がいる	1	2	3	4
D 何をやってもうまくいかない気がする	1	2	3	4
E 気分がゆううつである	1	2	3	4
F 「死にたい」と思ったことがある	1	2	3	4
G 大学生活が充実している	1	2	3	4

Ⅴ. 相談相手について

問(27) あなたが重要なことを話したり、悩みを相談する人はどなたですか？あてはまる番号を三つ以内で選び、話したり相談しやすい順に左から記入してください。

- ① 家族      ② 職場の同僚      ③ 職場の上司      ④ 恋人      ⑤ 友人（学内）      ⑥ 友人（学外）      ⑦ 教員  
⑧ その他 (      )      ⑨ 特にない  
1番 (      )      2番 (      )      3番 (      )

以下の問(28)は、上の問(27)において話したり相談しやすい人を選んだ方がのみが回答してください。

問(28) 問(27)で話したり相談しやすいとして選んだ人たちとあなたが話をすることは普段どのくらいありますか(電話やメールも含みます)?それぞれの人について、あてはまる番号一つに○を付けてください。

	頻繁にある	すこしある	あまりない	ほとんどない
1番の人とは	1	2	3	4
2番の人とは	1	2	3	4
3番の人とは	1	2	3	4

Ⅵ. 筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について

問(29) 筑波大学の教員に期待することはどのようなことですか?あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- 1. 優れた研究者であって欲しい
- 2. 授業内容を充実させて欲しい
- 3. もっと解りやすく教えて欲しい
- 4. 休講を無くして欲しい
- 5. 研究指導の時間を確保して欲しい
- 6. 学生との対話の場を持って欲しい
- 7. 社会的実践との結び付きを示して欲しい
- 8. ハラスメントの問題に敏感になって欲しい
- 9. メンタル面に関するサポートをして欲しい
- 10. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(30) 教育面や制度面で不十分であると感じるのはどのようなことですか?あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- 1. 教育研究スタッフ
- 2. カリキュラム
- 3. 留学制度
- 4. 授業料免除等の経済的支援
- 5. 教員との懇談会
- 6. 支援室や事務室の対応
- 7. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(31) キャンパス内の施設等で、特に整備・充実して欲しいのはどれですか?あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- 1. 教室・実験室
- 2. 図書館
- 3. IT環境
- 4. セキュリティー
- 5. 駐車場
- 6. 外灯
- 7. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(32) 学務システム:TWINSの使いやすさの満足はどの程度ですか?あてはまる番号一つに○を付けてください。

- 1. 満足している
- 2. 満足とも不満とも言えない
- 3. 不満である(理由: \_\_\_\_\_ )

Ⅶ. その他

問(33) 学修・研究や生活に関わる一般的な情報を得ようとするとき、主に誰にあるいは何にアクセスしますか?あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- 1. 指導教員
- 2. 研究科・専攻の事務職員
- 3. 研究科・専攻の掲示版
- 4. TWINS掲示版
- 5. 大学のHP
- 6. 研究科・専攻等のHP
- 7. 専攻等のメーリングリスト
- 8. 友人等
- 9. その他 ( \_\_\_\_\_ )

問(34) 学生生活を送る上で様々な問題が生ずることがあります。そのためにどのような相談機関が必要だと思いますか?あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- 1. 健康に関する相談
- 2. 精神・保健に関する相談
- 3. ワーク・ライフ・バランス相談
- 4. その他何でも相談

問(35) 筑波大学の学外研修施設(山中、館山、石打)を利用したことはありますか?あてはまる番号一つに○を付けてください。

- 1. ある ( 回数/年 )
- 2. ない
- 3. 存在を知らない



# 第1章 あなた自身について

## 1.1 性別・年齢・所属・在籍年次（問1～問4）

- ◎大学院学生（東京地区）の在籍数は676名。
- ◎年齢別構成は、30歳代が4割、40歳代が約3割。

まず基本的事項として、性別（問1）・年齢（問2）・所属研究科（問3）・年次（問4）について尋ねた。結果は、表1.1.1および表1.1.2にまとめた通りである。

東京地区大学院学生の在籍数（平成22年9月1日現在）は676名（ビジネス科学研究科495名（うち女性106名）、人間総合科学研究科181名（うち女性103名））である。

回答率については、ビジネス科学研究科19.8%、人間総合科学研究科45.3%であった。専攻レベルでは、経営システム科学1.5%、企業法学13.8%、企業科学3.0%、法曹47.3%、国際経営プロフェッショナル23.4%、スポーツ健康システム・マネジメント42.4%、生涯発達50.0%、生涯発達科学31.8%となっており、専攻間の違いがかなり見られる。

年齢別にみると、30歳から50歳が中心で、30歳代が4割、40歳代が約3割の構成となっている。

表 1.1.1 回答者数（研究科別、男女別、年齢別）

研究科名	在籍数	回答者数	回収率	男性	女性	無回答	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	無回答
ビジネス	495	98	19.8	73	23	2	13	39	33	7	3	3
人間総合	181	82	45.3	36	45	1	5	32	25	18	2	0
白紙・無回答		8		3	3	1	1	3	1	0	0	2
合計	676	188	27.8	112 (59.9%)	71 (38.0%)	4 (2.1%)	19 (10.2%)	74 (40.0%)	59 (31.6%)	25 (13.4%)	5 (2.7%)	5 (2.7%)

表 1.1.2 回答者数（年次別）

		全体				全体	
		回答数	回答率			回答数	回答率
修士課程	1年目	47	25.1	専門職学位課程	1年目	27	14.4
	2年目	15	8.0		2年目	16	8.6
	3年目以上	2	1.1		3年目	19	10.2
博士前期課程	1年目	25	13.4		4年目以上	7	3.7
	2年目	8	4.3	無効・無回答		4	2.1
	3年目以上	0	0.0				
博士後期課程	1年目	8	4.3				
	2年目	5	2.7				
	3年目	2	1.1				
	4年目以上	2	1.1				

## 1.2 外国人留学生について（問5）

◎外国人留学生はほんのわずか。

「あなたは外国人留学生ですか」の問いに対して、ビジネス科学研究科の3名が「私費留学生」、1名が「その他」に回答している。

表 1.2 外国人留学生（全体）

		回答数	回答率
1	いいえ	164	87.7
2	私費留学生	3	1.6
3	文部科学省国費留学生	0	0.0
4	文部科学省以外の日本の団体等の奨学生	0	0.0
5	自国の奨学生	0	0.0
6	その他	1	0.5
	無効・無回答	19	10.2
	合計	187	100.0

## 1.3 社会人の経験について（問6）

◎在職中が90.9%、現在定職がないが4.3%。

「社会人の経験がありますか」の問いに対して、社会人の経験が「ない」と答えたのは、わずかに2名である。「現在も在職中」は90.9%、「現在は休職中」は1.1%、「退・辞職し、現在、定職はない」が4.3%である。

図 1.3 社会人の経験（研究科別、男女別、全体）

	回答数	ない		在職中		現在は休職中		現在、定職はない		その他		無効・無回答	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
ビジネス	98	0	0.0	87	88.8	1	1.0	6	6.1	2	2.0	2	2.0
人間総合	82	2	2.4	78	95.1	0	0.0	2	2.4	0	0.0	0	0.0
男性	112	0	0.0	104	92.9	0	0.0	5	4.5	2	1.8	1	0.9
女性	71	2	2.8	63	88.7	2	2.8	3	4.2	0	0.0	1	1.4
全体	187	2	1.1	170	90.9	2	1.1	8	4.3	2	1.1	3	1.6

## 1.4 職場の理解について（問7）

- ◎全体の80.8%は職場の理解を得られている。
- ◎職場の制度を利用した割合は2.4%と筑波地区に比べ少ない。

問6で「在職中」または「現在は休職中」と答えた者（全体の91.5%）に対して、「筑波大学大学院に入学するにあたって職場の理解は得られていますか」と尋ねた。全体で「学費の負担を含め、全面的に得られている」が5.2%「就学に支障がない程度に得られている」が75.6%で、合わせて全体の80.8%である。

なお、「職場には秘密にしている」割合は全体で8.7%である。ビジネス科学研究科については前回調査の22.4%から13.6%と減少しており、職場の理解を得やすくなっていることが推測される。

職場の制度を利用しているケースは、「休職制度」（1.2%）「その他の制度」（1.2%）で合わせて2.4%と、筑波地区（19.9%）に比べると少ない。

図 1.4 職場の理解（研究科別、男女別、全体）



- 1. 学費の負担を含め、全面的に得られている
- 2. 就学に支障のない程度に得られている
- 3. 職場の休職制度利用
- 4. 職場の派遣制度利用
- 5. 職場のその他の制度利用
- 6. 職場には秘密にしている
- 7. その他
- 無効・無回答

## 1.5 筑波大学大学院を志望した主な理由について（問8）

- ◎志望動機として多いのは「希望分野」「自宅から通える」「指導教員の資質・能力」。
- ◎筑波地区に比べ「自宅から通える」が41.2%と多く地理的環境が顕著となっている。

筑波大学大学院を志望した理由について14項目の中から3つ以内の選択で回答してもらった。志望動機の中で最も多かったのは「希望する分野がある」(50.3%)であり、次いで「自宅から通える」(41.2%)、「指導教員の資質・能力」(28.9%)となっている。

筑波地区と比べ「自宅から通える」が41.2%と地理的環境が顕著となっている。

上位3項目に次いで、「研究領域」(25.1%)「教育内容」(18.7%)が志望理由となっており、大学の教育・研究施設や学費等よりも、立地的条件及び研究環境に重きを置いて進学先を決めていることがうかがえる。

図 1.5 志望理由（研究科別、男女別、全体）



- 1. 研究領域に魅力がある
- 2. 教育内容が優れている
- 3. 希望する分野がある
- 4. 指導教員の資質・能力、指導体制が優れている
- 5. 研究室の雰囲気の魅力がある
- 6. 教育・研究施設が優れている
- 7. 幅広い専門が学べる
- 8. 学費や生活費等の経済的な支援体制が充実している
- 9. 修了後の進路等就職に有利である
- 10. 修了年限の弾力的な運用がある
- 11. 親や指導教員等から勧められた
- 12. 自宅から通える
- 13. 資格等が取りやすい
- 14. その他
- 無効・無回答

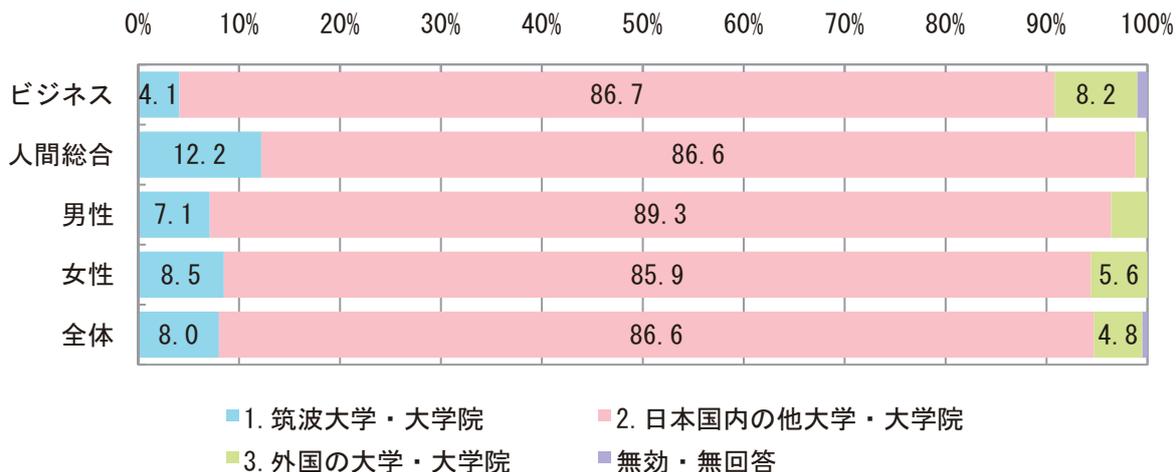
## 1.6 入学前の大学・大学院について（問 9）

- ◎全体の約 9 割が他大学出身。
- ◎ビジネス科学研究科で「外国の大学・大学院」出身者が増加。

筑波大学大学院に入学する前の大学または大学院について尋ねた。全体の内、91.4%は他大学出身者であり、多くの社会人学生を受け入れている東京地区の特性がうかがえる。

ビジネス科学研究科では「外国の大学・大学院」出身者が前回調査 2.0%から 8.2%に増加している。

図 1.6 入学前の大学または大学院（研究科別、男女別、全体）



## 1.7 現在の住まいについて（問 10）

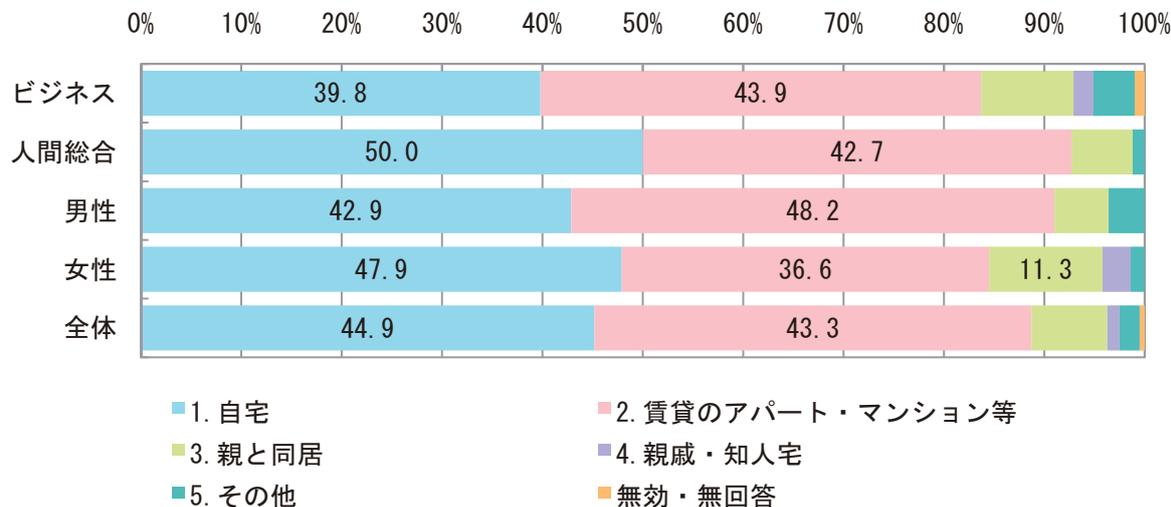
- ◎自宅（44.9%）、賃貸のアパート・マンション（43.3%）。

現在の住まいについて尋ねた。筑波地区では大半(68.5%)を占める賃貸のアパート・マンション(43.3%)より、自宅(44.9%)が上位となっている。

志望理由にも挙げられているように自宅から通えることが進学先選択の条件であることがうかがえる。

男女別での大きな差異は見られないが、比較的女性の方が親と同居している割合が多い。

図 1.7 現在の住まい（研究科別、男女別、全体）



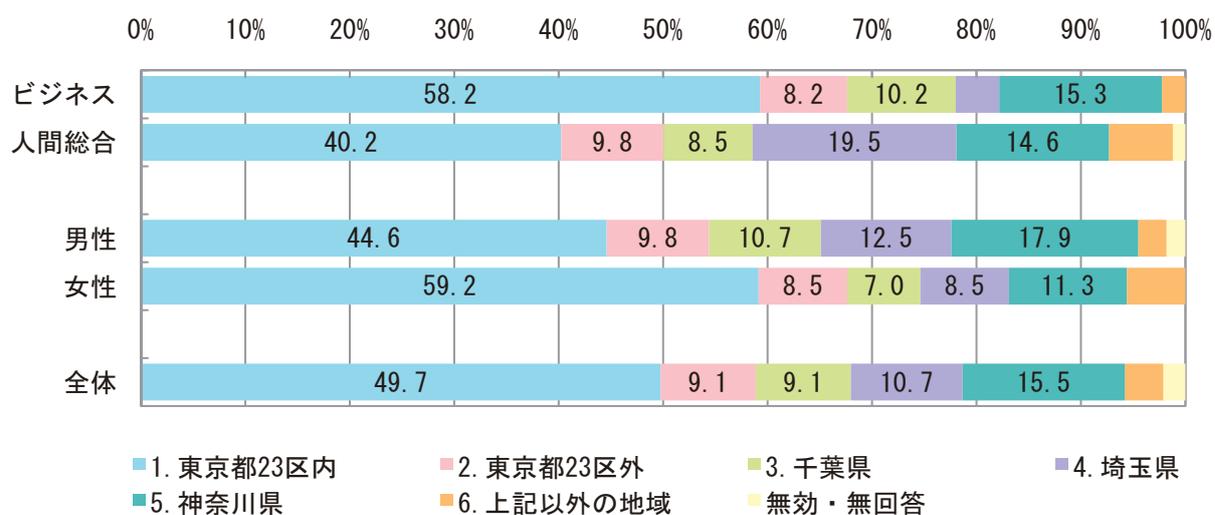
## 1.8 現在の居住地について（問 11）

- ◎約 5 割が東京都 23 区内に居住している。
- ◎東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県で 94%

現在の居住地について尋ねた。その結果、約 5 割（49.7%）が東京都 23 区内に居住している。残りは東京都 23 区外・千葉県・埼玉県・神奈川県がそれぞれ 1 割前後となっている。筑波地区に比べると居住地は広く分布している。

また、上記 1 都 3 県以外の地域を選択したもので茨城県に居住している者は 5 名であった。

図 1.8 現在の居住地（研究科別、男女別、全体）



## 第2章 生活全般について

### 2.1 主たる家計支持者について（問12）

◎東京地区では、9割以上が独立生計者。

主たる家計支持者が「本人」か「配偶者」である場合は91.5%、「父母」である場合は6.4%となっており、9割以上が独立生計者である。人間総合で「配偶者」が少し多い。

表 2.1 主たる家計支持者（全体、研究科別）

		全体		ビジネス		人間総合	
		回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率
1	あなた自身	157	84.0	88	89.8	65	79.3
2	配偶者	14	7.5	2	2.0	10	12.2
3	父親・母親	12	6.4	6	6.1	6	7.3
4	両親以外の親族	1	0.5	1	1.0	0	0.0
5	その他	1	0.5	0	0.0	1	1.2
	無効・無回答	2	1.1	1	1.0	0	0.0

### 2.2 世帯の年収について（問13）

◎年間収入が400万円未満の世帯は13.3%。

世帯の年収について尋ねた。年間収入が400万円未満の世帯が13.3%、1,000万円以上が26.7%を占めている。

表 2.2 世帯の年収（全体、研究科別）

		全体		ビジネス		人間総合	
		回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率
1	200万円未満	8	4.3	5	5.1	2	2.4
2	200万円以上～300万円未満	7	3.7	4	4.1	3	3.7
3	300万円以上～400万円未満	10	5.3	2	2.0	8	9.8
4	400万円以上～500万円未満	16	8.6	5	5.1	11	13.4
5	500万円以上～600万円未満	23	12.3	14	14.3	9	11.0
6	600万円以上～700万円未満	9	4.8	4	4.1	5	6.1
7	700万円以上～800万円未満	13	7.0	6	6.1	7	8.5
8	800万円以上～900万円未満	19	10.2	11	11.2	7	8.5
9	900万円以上～1,000万円未満	23	12.3	11	11.2	10	12.2
10	1,000万円以上	50	26.7	29	29.6	19	23.2
11	分からない	4	2.1	3	3.1	1	1.2
	無効・無回答	5	2.7	4	4.1	0	0.0

### 2.3 奨学金の受給について（問 14）

◎奨学金受給者は1割に満たない。

奨学金の受給について尋ねた。両研究科で、13人（6.9%）が奨学金を受給している。

表 2.3 奨学金の受給（全体）

		全体	
		回答数	回答率
1	受けていない	169	90.4
2	日本学生支援機構の奨学金	10	5.3
3	私費外国人留学生学習奨励費	0	0.0
4	地方公共団体の奨学金	0	0.0
5	日本の民間団体・財団等の奨学金	0	0.0
6	日本学術振興会の特別研究員	0	0.0
7	文部科学省国費留学生	0	0.0
8	自国政府の奨学金（留学生の場合）	0	0.0
9	その他	3	1.6
無効・無回答		7	3.7
合計		189	

### 2.4 「つくばスカラシップ」制度について（問 15）

◎「つくばスカラシップ」の認知度は19.8%。

平成 21 年度に創設された「つくばスカラシップ」制度に関する調査は、当然ながら、今回が初めてである。大学院生（東京地区）で「つくばスカラシップ」について「知っている」が19.8%、「知らない」が78.6%となっている。ホームページ等を活用した積極的な周知や修学支援への拡充が必要である。

表 2.4 「つくばスカラシップ」制度（全体）

		全体	
		回答数	回答率
1	知っている	37	19.8
2	知らない	147	78.6
無効・無回答		3	1.6
合計		187	100.0

## 2.5 希望する経済支援について（問 16）

◎半数近くが何らかの経済支援を希望している。

希望する経済支援に関して、複数回答で尋ねた。問 15 の調査で実際の奨学金受給者は 6.9%であったが、東京地区の大学院生の半数近くが何らかの経済支援を希望しているという結果である。希望する経済支援として「給付型の奨学金」が 31.6%、「授業料免除」が 32.1%であった。今後、給付型の奨学金や授業料免除の拡充を検討する必要があるだろう。

表 2.5 希望する経済支援（全体）

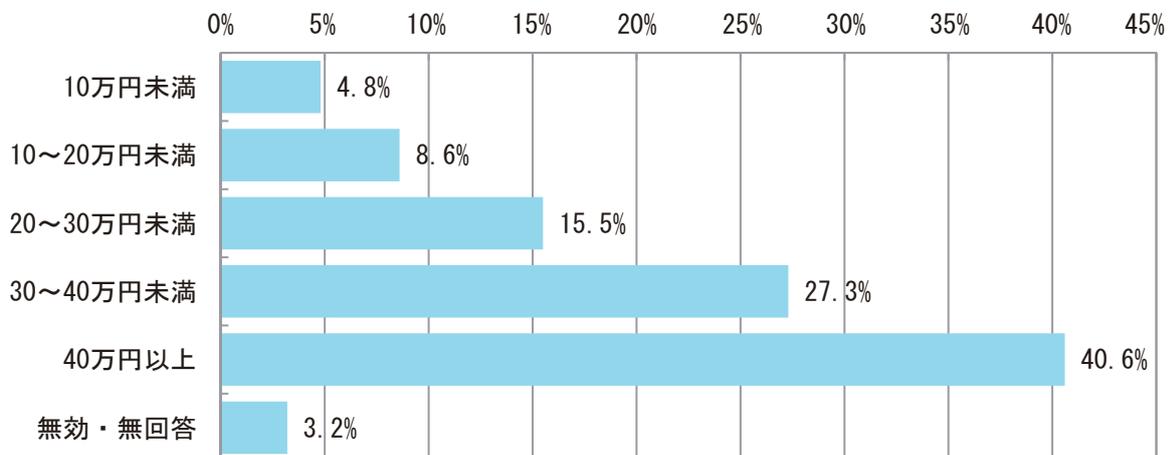
		全体	
		回答数	回答率
1	特に希望しない	82	43.9
2	給付型（返還義務なし）奨学金	59	31.6
3	貸与型（返還義務あり）奨学金	16	8.6
4	授業料免除の拡充	60	32.1
5	入学料免除の拡充	44	23.5
6	一時貸付金	6	3.2
7	その他	7	3.7
	無効・無回答	7	3.7

## 2.6 1ヶ月の収入について（問 17）

◎40万円以上が最も多く全体の約4割。

1か月の税込みの収入を尋ねた。上位2区分を合計すると、回答者のうち3分の2以上が30万円以上の収入となっている。

図 2.6 1ヶ月の収入（全体）

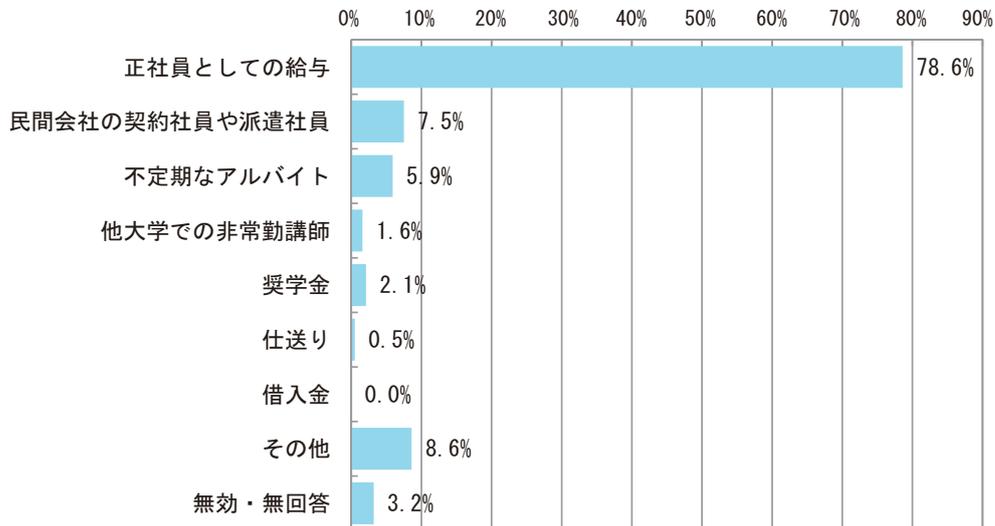


## 2.7 収入源について (問 18)

◎正社員としての給与を得ている者が約 8 割。

収入源について尋ねた。「正社員としての給与」を挙げた者が78.6%を占め、契約社員・派遣社員まで含めると、85%以上が有職者である。問17の結果と合わせ、経済的な基盤はある程度確保されていると見ることができる。

図 2.7 収入源 (全体)

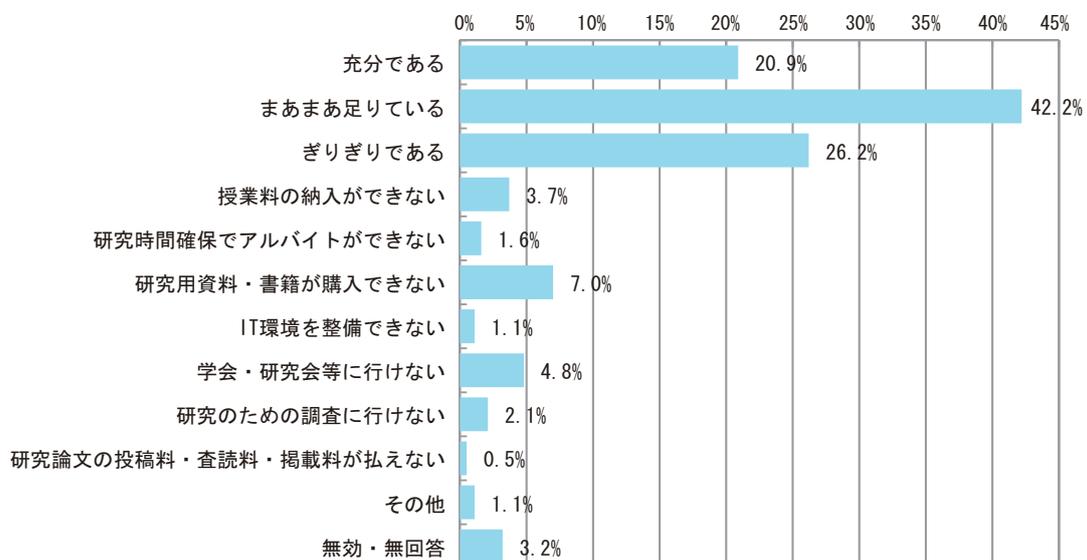


## 2.8 1ヶ月の生活費・研究活動費について (問 19)

◎6割以上が「足りている」。

「充分である」と「まあまあ足りている」を合計すると63.1%となる。一方で、「ぎりぎりである」という回答も26.2%あり、無回答のものを除くと、残り7.5%が「不足」と回答したことになる。図2.8における「授業料が納付できない」以下の項目は複数回答であり、生活費・研究活動費の不足により種々の困難を抱えている学生も存在していることが分かる。「その他」の回答の内容は、ここに挙げられた選択肢のいずれかに該当するとみてよいものがほとんどであった。

図 2.8 1ヶ月の生活費・研究活動費 (全体)



## 2.9 平均的な起床・就寝時刻について（問 20）

◎平均睡眠時間は5時間39分。

平均的な起床時間・就寝時刻について尋ねた。単純に平均を計算すると、「24時43分就寝・6時22分起床」という値になり、これらの差から求めた睡眠時間の平均値は5時間39分である。筑波地区の平均値の7時間00分よりも1時間20分ほど短く、社会人としての多忙な生活がうかがえる。

## 2.10 日常生活の満足度について（問 21）

◎6割以上の方が日常生活に満足をしている。

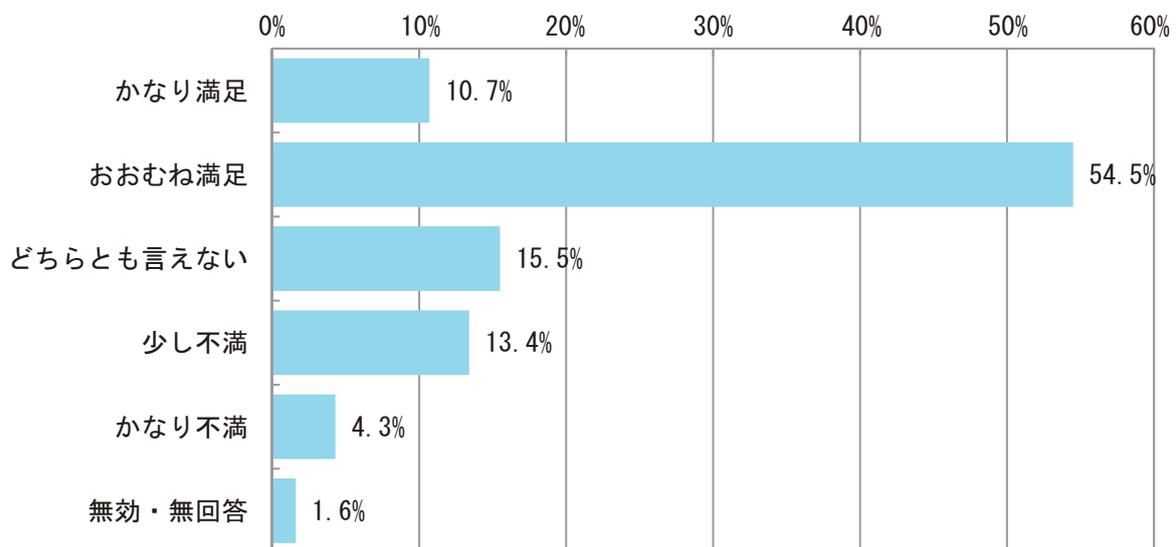
◎男女差はほとんどない。

◎日常生活の満足度は生活費と関連がある。

日常生活の満足度を調査した。「かなり満足」から「かなり不満」までの5段階の項目のうちのひとつに回答してもらった。東京地区の大学院生全体としてみると「かなり満足」と「おおむね満足」をあわせた回答の割合が65.2%だった。反対に「少し不満」「かなり不満」と回答した人の合計は17.5%だった。満足度の値は、筑波キャンパスの大学院生と比べても6ポイント程度高い値になった。

日常生活の満足度は、問19の「1ヶ月の生活費・研究活動費」と高い関連があるようだ。本項目で日常生活が「少し不満」「かなり不満」と答えた人のうち9割は、問19で生活費が充分ではないと回答をしている。一方、問14「奨学金の受給」の有無とはあまり関連しなかった。

図 2.10 現在の日常生活の満足度について（全体）



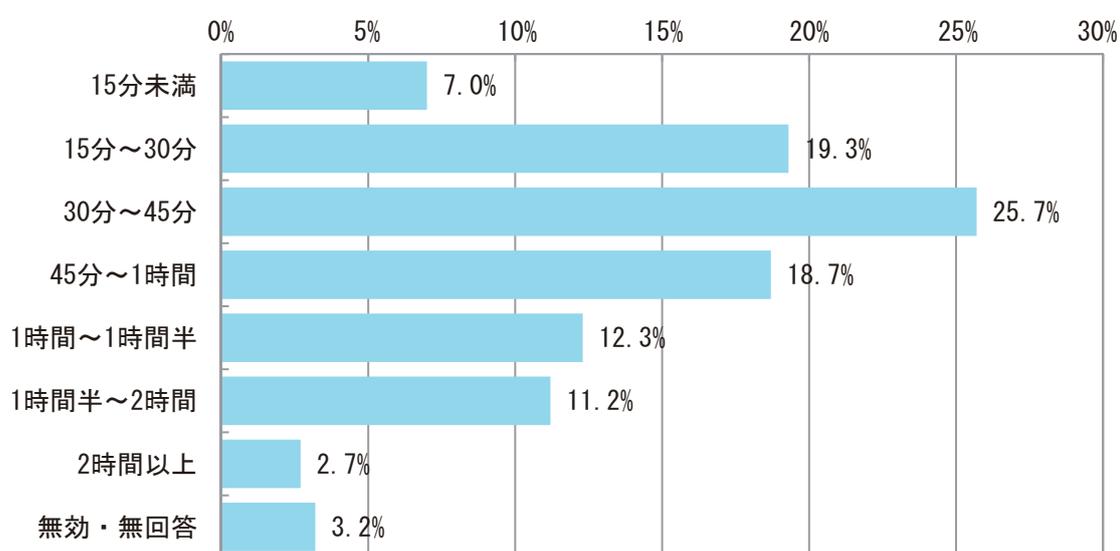
## 第3章 通学・ハラスメント等について

### 3.1 職場からの通学時間について（問22）

◎おおよそ4人のうち3人は1時間未満で職場から通学できている。

東京キャンパスに通う大学院生の職場からの通学時間を調査した。最も多かったのが30分から45分であった。1時間以上かけて通学している人が約4人に1人いた。1時間未満で通学できている大学院生は4人に3人であるから、通学に関する問題はそれほどないと考えられる。通学時間の男女差はとくにみられなかった。

図3.1 職場からの通学時間（全体）



### 3.2 教員によるセクハラ、アカハラ、会社におけるパワハラについて（問 23）

◎セクハラ、アカハラ、パワハラを感じたことがあるのは、3.7%、9.1%、11.7%。

大学院入学後の教員によるセクシャルハラスメント、アカデミックハラスメント、会社におけるパワーハラスメントに関して、「感じたことがあるか」、「感じたことがある場合、どのような人に相談したか」を尋ねた。セクハラを受けたと感じているのは、「感じたことはない」「無効・無回答」を除くと、全体で3.7%、女性では7.0%となっている。同様に、アカハラを受けたと感じているのは、全体で9.1%、会社でのパワハラについては、全体で11.7%となっている。その中で「親しい友人に話した」がやや多く、「誰にも話をしていない」「教員に話した」が数人程度である。選択肢には、「研究科・専攻のハラスメント相談員に話した」「全学に設置されているハラスメント相談員等に話した」もあったが、一人も選択していない（表から削除）。

表 3.2.1 教員によるセクハラ（研究科別、男女別、全体）

	回答数	感じたことはない		感じたことがあるが誰にも話をしていない		感じたことがあり親しい友人に話した		感じたことがあり知り合いの教員に話した		無効・無回答	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
ビジネス	98	63	64.3	2	2.0	5	5.1	0	0.0	28	28.6
人間総合	82	58	70.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	24	29.3
男性	112	73	65.2	0	0.0	1	0.9	0	0.0	38	33.9
女性	71	48	67.6	1	1.4	4	5.6	0	0.0	18	25.4
全体	187	123	65.8	2	1.1	5	2.7	0	0.0	57	30.5

表 3.2.2 教員によるアカハラ（研究科別、男女別、全体）

	回答数	感じたことはない		感じたことがあるが誰にも話をしていない		感じたことがあり親しい友人に話した		感じたことがあり知り合いの教員に話した		無効・無回答	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
ビジネス	98	61	62.2	3	3.1	4	4.1	2	2.0	29	29.6
人間総合	82	51	62.2	2	2.4	5	6.1	1	1.2	23	28.0
男性	112	66	58.9	2	1.8	7	6.3	1	0.9	37	33.0
女性	71	46	64.8	4	5.6	1	1.4	2	2.8	18	25.4
全体	187	113	60.4	6	3.2	9	4.8	3	1.6	57	30.5

表 3.2.3 会社におけるパワハラ（研究科別、男女別、全体）

	回答数	感じたことはない		感じたことがあるが誰にも話をしていない		感じたことがあり親しい友人に話した		感じたことがあり知り合いの教員に話した		無効・無回答	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
ビジネス	98	53	54.1	2	2.0	10	10.2	2	2.0	32	32.7
人間総合	82	51	62.2	1	1.2	7	8.5	2	2.4	22	26.8
男性	112	60	53.6	2	1.8	11	9.8	3	2.7	38	33.9
女性	71	44	62.0	1	1.4	6	8.5	1	1.4	19	26.8
全体	187	106	56.7	3	1.6	17	9.1	4	2.1	59	31.6

## 第4章 健康状態について

### 4.1 健康状態について (問 24)

- ◎男性の約8割、女性の約5割が「健康である」と回答。
- ◎女性および博士前期課程の人の健康不良の割合が高い。

過去1年間の健康状態について、「健康である」と回答した割合は、全体では66.8%であった。しかし、その男女差の開きは大きく、男性では約8割が「健康である」と回答しているのに対し、女性では約5割であった。また、「健康不良で数日寝込んだ」割合についても女性の方が男性の4～5倍多く、女性の健康度が低いことが明らかにされた。「身体の病気で受診・入院」、「心理的問題で相談」、「けがで受診」についても女性の方が多いが、一般に男性よりも女性の方が受診や相談に行く傾向が高いと言われており、本調査の結果もそうした傾向を反映した可能性も考えられる。

また、大学院生を課程ごとに、修士課程、博士前期課程、博士後期課程、専門職学位課程の4つに分類し、それぞれでの集計を試みた。その結果、博士前期課程での「健康である」の割合が低く、「健康不良で数日寝込んだ」の割合が高いことが示された。博士前期課程では女性の比率が高いことから、健康度の男女差が反映した可能性もある。

表 4.1 健康状態 (全体、男女別、課程別)

	全体	男性	女性	修士	博士前期	博士後期	専門職
1 健康である	66.8	79.5	49.3	75.0	54.5	76.5	63.8
2 健康不良で数日寝込んだ (受診・入院を除く)	17.6	7.1	33.8	20.3	30.3	5.9	13.0
3 身体の病気で受診・入院した	8.6	7.1	11.3	3.1	9.1	11.8	13.0
4 精神的な問題で受診・入院した	4.3	4.5	4.2	1.6	3.0	5.9	7.2
5 心理的な問題で相談機関を利用した	1.1	0.0	2.8	1.6	3.0	0.0	0.0
6 けがで受診・入院した	1.6	0.0	4.2	1.6	6.1	0.0	0.0
7 その他	3.2	2.7	4.2	0.0	6.1	5.9	4.3
無効・無回答	2.1	0.9	1.4	1.6	0.0	0.0	1.4
対象者の母数	187	112	71	64	33	17	69

## 4.2 悩みごとについて (問 25)

- ◎最も多い悩みごとは「学業と仕事の両立」。
- ◎次いで多い悩みは「学業や研究の不振」で、女性の 38%が悩んでいる。
- ◎博士後期課程の 3 人に 1 人は「経済状態」に関して悩んでいる。

過去 1 年間に悩んだことの中で、最も多かったのは「学業と仕事の両立」についてであり、社会人大学院生特有の問題が浮き彫りになった。特に男女の差は見られなかった。次に多かった悩みごとは「学業や研究の不振」であり、特に女性の 4 割弱が悩んでいることが示された。しかし、筑波地区の大学院生においては性別を問わず半数以上の方が「学業や研究の不振」での悩みを抱えていることを考えると、東京地区の社会人大学院生においては学業や研究に関する悩みは相対的に少ないと見ることもできよう。また、女性は男性に比べて「自分の精神的・心理的状态」での悩みが多いことも示された。

大学院生を課程ごとに、修士課程、博士前期課程、博士後期課程、専門職学位課程の 4 つに分類し、それぞれでの集計を試みた。その結果、博士後期課程において「経済状態」における悩みが多いことが示された。また、専門職学位課程においては「休学・退学」に関する悩みが多かった。さらに、「教員との関係」「ハラスメント」での悩みの割合がやや高い課程もあり、改善が強く求められる。

表 4.2 悩みごとについて (全体、男女別、学年別)

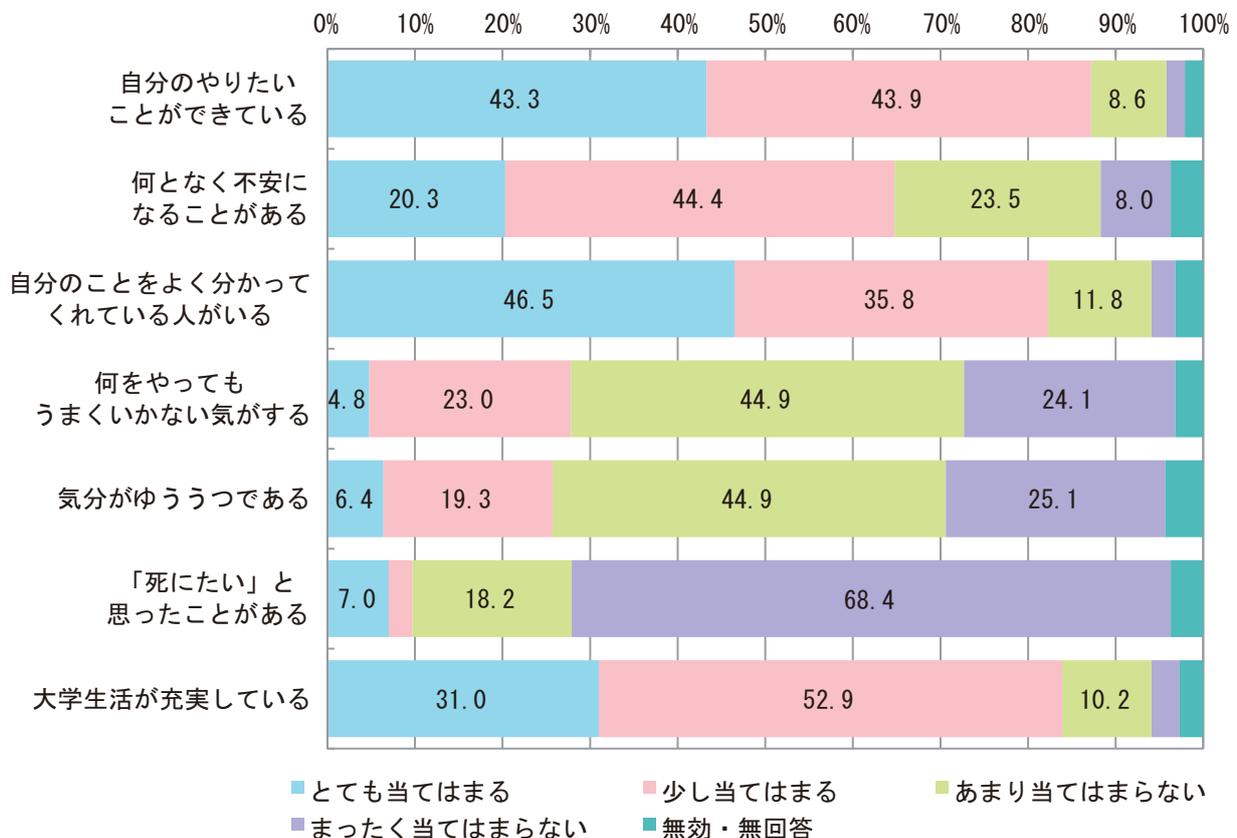
	全体	男性	女性	修士	博士前期	博士後期	専門職
1 学業と仕事の両立	63.1	62.5	66.2	70.3	54.5	64.7	63.8
2 学業や研究の不振	23.5	15.2	38.0	28.1	24.2	29.4	18.8
3 単位修得の問題	9.1	8.9	9.9	6.3	3.0	0.0	17.4
4 休学・退学	3.7	5.4	1.4	0.0	3.0	0.0	8.7
5 転研究科・転専攻	1.1	0.0	2.8	3.1	0.0	0.0	0.0
6 友人との関係	4.3	2.7	7.0	4.7	6.1	5.9	2.9
7 教員との関係	8.0	5.4	11.3	4.7	12.1	17.6	7.2
8 研究室内の問題	1.1	0.9	1.4	1.6	0.0	5.9	0.0
9 恋愛関係	5.9	4.5	8.5	7.8	3.0	0.0	7.2
10 家族関係	13.4	10.7	18.3	14.1	24.2	17.6	7.2
11 自分の性格	7.5	4.5	12.7	7.8	15.2	0.0	5.8
12 自分の精神的・心理的状态	14.4	8.0	25.4	12.5	18.2	17.6	14.5
13 経済状態	16.6	17.0	16.9	10.9	9.1	35.3	21.7
14 ハラスメント	4.8	3.6	7.0	6.3	0.0	0.0	7.2
15 その他	9.1	8.0	11.3	9.4	15.2	5.9	5.8
16 特にない	15.5	17.9	12.7	17.2	15.2	11.8	14.5
無効・無回答	2.1	1.8	0.0	1.6	0.0	0.0	1.4
対象者の母数	187	112	71	64	33	17	69

### 4.3 精神的な健康状態について (問 26)

- ◎ 「やりたいことができている」「わかってくれる人がいる」「充実している」と回答した人は、8割以上。
- ◎ 「何となく不安になることがある」は約 65%、自信のなさや気分の落ち込みは 3 割弱。
- ◎ 「死にたい」と思ったことがある人は 1 割弱。

精神的な健康状態を把握する 7 項目に対する回答を図にまとめた。この結果を筑波地区の大学院生の結果と比較すると、「やりたいことができている」「わかってくれる人がいる」「充実している」という項目については、ほぼ同等かそれ以上の結果を示しており、大学院生活が充実していることがうかがえる。また、「何となく不安になることがある」「何をやってもうまくいかない気がする」「気分がゆううつである」については、筑波地区の結果と比べて低い値を示しており、ネガティブな精神状態も筑波地区の大学院生よりも少ないことが明らかにされた。上記の 3 項目については『学生の健康白書 2005』でもほぼ同様の内容の質問があり、全国平均との比較が可能である。3 項目の全国平均はそれぞれ 4 割弱、2 割程度、13%程度を示しており、東京地区の結果はそれと比べるとやや高いと言えよう。また、「死にたいと思ったことがある」という項目については、およそ 1 割弱 (18 名) の人が過去 1 年間の間に「死にたい」と考えたことが明らかになった。筑波地区の結果と比べると低いとは言え、見過ごすことのできない結果である。社会人大学院生の場合、職場や家庭など大学院以外の場所でストレスを受けることも多いと思われるが、問 (25) の結果からも明らかなように、学業と仕事の両立が大きなストレスとなっており、それが精神的な不健康に寄与している可能性は高い。大学としてどのような支援が可能かを検討していく必要があると考えられる。

図 4.3 精神的な健康状態 (全体)



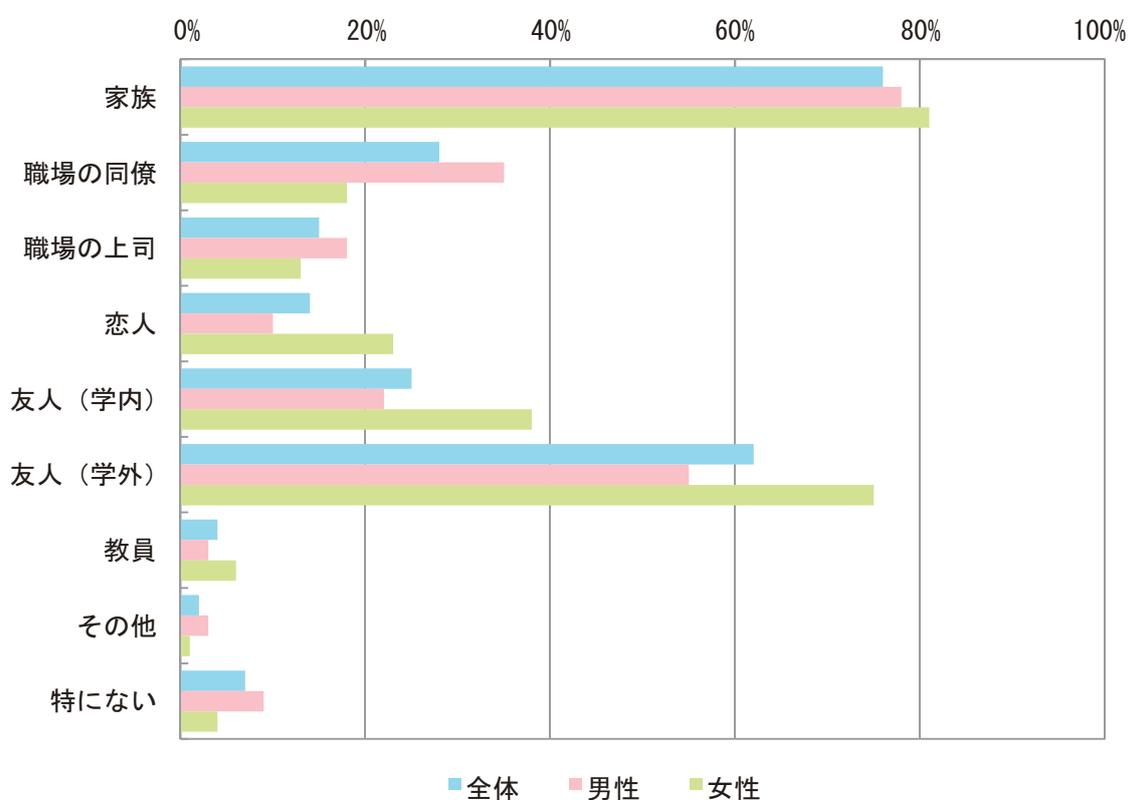
## 第5章 相談相手について

### 5.1 悩みの相談相手について（問27）

- ◎重要なことを相談する相手は、家族と学外の友人。
- ◎教員を相談相手としたのは3.7%、学内の友人は27.3%。
- ◎相談する相手がいない人は7.5%。

重要なことを相談する相手として上位3番目までに選ばれた選択肢を集計したのが下の図である。最も多かったのは家族であり、最も多く1番目に選ばれたのも家族であった（58.8%）。2番目に多かったのは学外の友人であった。学業や研究に関する相談ではなく、自分にとって重要なことを相談する相手を尋ねているので、社会人大学院生において上記2つの選択率が高かったという結果は納得のいくものであろう。3番目については、男女で異なり、男性においては職場の同僚、女性においては学内の友人という結果であった。また、教員への相談を希望する人は全体で3.7%と少なかった。さらに、相談相手が特にいないと回答したのは、男性は8.9%、女性が4.2%と、筑波地区の値と比べて少なかった。社会人大学院生においては、家庭や職場という学外での居場所がしっかりしているため、学内での相談必要性がそれほど高くないのではないかと考えられる。

図 5.1 悩みの相談相手（全体、男女別）

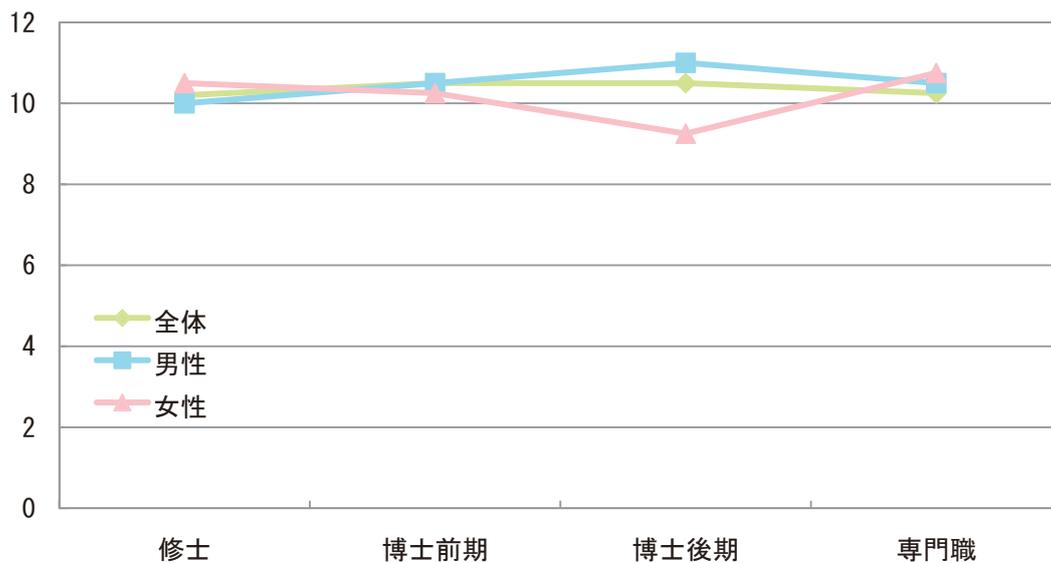


## 5.2 相談しやすい人との接触頻度について（問 28）

- ◎男性よりも女性の方が、相談しやすい人と話す機会が多い。
- ◎男女差は、学年によって異なる傾向がある。

問 27 で重要なことを相談しやすい相手として選んだ人と、どのくらい話す機会があるかを尋ね、その度合いを頻度が多いほど高得点になるように集計した合計が下図である。縦軸が話す頻度の得点、横軸が課程（修士課程、博士前期課程、博士後期課程、専門職学位課程）を示している。その結果、まず全体としては、ほぼその頻度得点に男女差も課程による差も見られなかった。一般に、男性の方が相談することに対して消極的で、その機会も少ないと言われているが、今回の結果はそれとは異なるものであった。対象が社会人であり家庭を持っている人が多いために、男女共に接触頻度の得点が高く男女差が見られなかったのではないかと推察される。さらに、男女と課程の両方を合わせて検討したところ、博士後期課程においては、男性の方が相談相手との接触頻度が高く、女性の方が少ないという結果が示された。しかし、そもそも対象者の数が多くないので、結果の一般化には注意を要する。

図 5.2 相談しやすい人との接触頻度と学年の関連（全体、男女別）



## 第6章 筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について

### 6.1 教員に期待すること（問29）

- ◎「授業内容の充実」を求める回答者が過半数。
- ◎人間総合では「優れた研究者」、ビジネスでは「授業内容充実」を求める声大きい。

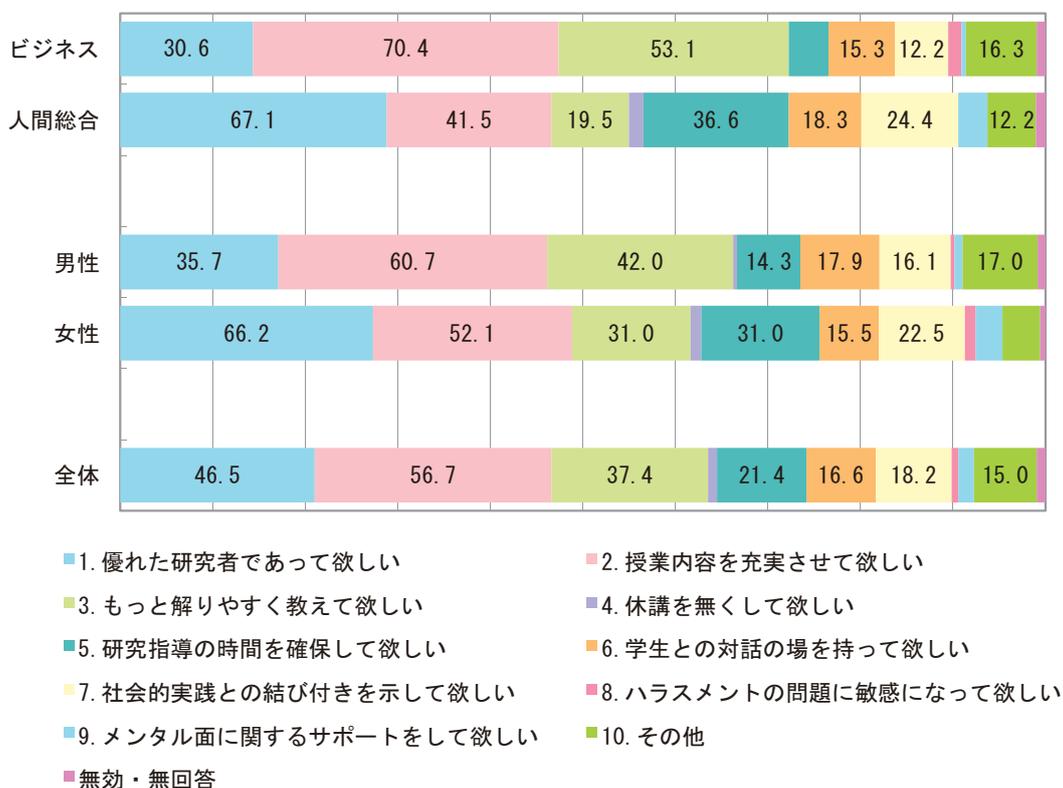
教員に期待することを3つ以内で答えてもらった。選択肢は筑波地区と同様である。

「授業内容を充実して欲しい」と望んでいる回答者が全体の過半数を占めていることが目立つ（56.7%）。「優れた研究者であること」を期待する声もかなり高い（46.5%）が、「授業内容の充実」を期待する声がこれに勝っている。この他に回答率が高いのは、「もっと解りやすく教えてほしい」（37.4%）、「研究指導の時間を確保して欲しい」（21.4%）である。

教育面の期待の高さはビジネスで顕著で、「授業内容の充実」の回答率はビジネス70.4%、人間総合41.5%、「解りやすい教育」の回答率はビジネス53.1%、人間総合19.5%となる。一方、「優れた研究者」の回答率はビジネス30.6%、人間総合67.1%、「研究指導の時間確保」の回答率はビジネス9.2%、人間総合36.6%と、人間総合では研究面への期待が高い。

東京地区では研究科ごとの性別の偏りが大きい。ビジネスでは男性の比率が76.0%と4分の3を占めるのに対し、人間総合では44.4%と半数以下である。そのため研究科ごとの回答分布と性別による回答分布が並行する傾向があり、「授業内容の充実（男性60.7%、女性52.1%）」や「解りやすい教育（男性42.0%、女性31.0%）」の回答率は男性が高く、「優れた研究者（女性66.2%、男性35.7%）」と「研究指導の時間確保（女性31.0%、男性14.3%）」の回答率は女性が高い。

図6.1 教員に期待すること（全体、男女別）



## 6.2 教育面や制度面で不十分な点（問 30）

- ◎カリキュラムが不十分だと感じている声が多い。
- ◎経済的支援に対しても一定の不満がある。

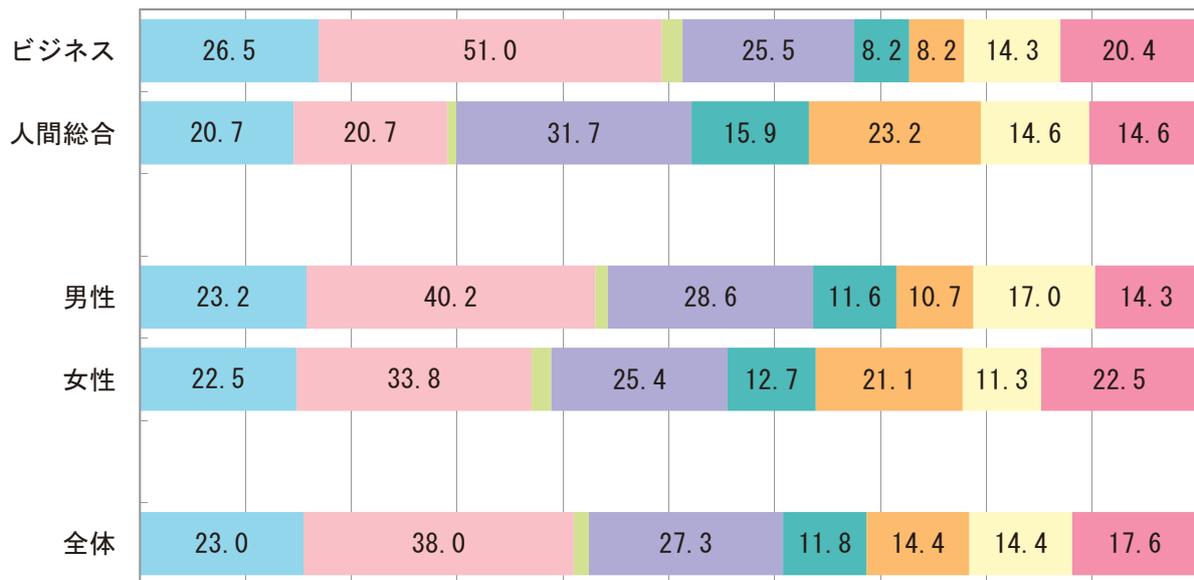
教育面や制度面で不十分と感じている項目を3つ以内で答えてもらった。ただし、筑波地区より選択肢は2つ少ない（「課外教育プログラム」と「就職活動支援」の2つ）。

全体で最も大きいのは、「カリキュラム」に対する不満で、4割に近い(38.0%)。次に回答率が高いのは「経済的支援」(27.3%)、それに「教育研究スタッフ」(23.0%)が続く。

研究科別に見た場合、「カリキュラム」の回答率は特にビジネスで高く(51.0%)、過半数になっている上、人間総合(20.7%)の倍を上回っている。人間総合で回答率が高い選択肢は「経済的支援」(ビジネス25.5%、人間総合31.7%)、「支援室・事務室の対応」(ビジネス8.2%、人間総合23.2%)である。

研究科別の回答率分布はやはり男女別に概ね並行するが、「経済的支援」については人間総合の方が回答率が高いにも関わらず、男性の回答率が高くなっており(28.6%、女性25.4%)、注意が必要である。

図 6.2 教育面や制度面で不十分な点（研究科別、男女別、全体）



- 1. 教育研究スタッフ
- 2. カリキュラム
- 4. 留学制度
- 5. 授業料免除等の経済的支援
- 7. 教員との懇談会
- 8. 支援室や事務室の対応
- 9. その他
- 無効・無回答

### 6.3 整備・充実してほしい施設（問 31）

- ◎図書館の整備・充実を求める声が極めて多い。
- ◎人間総合では IT 環境整備の要望も強い。

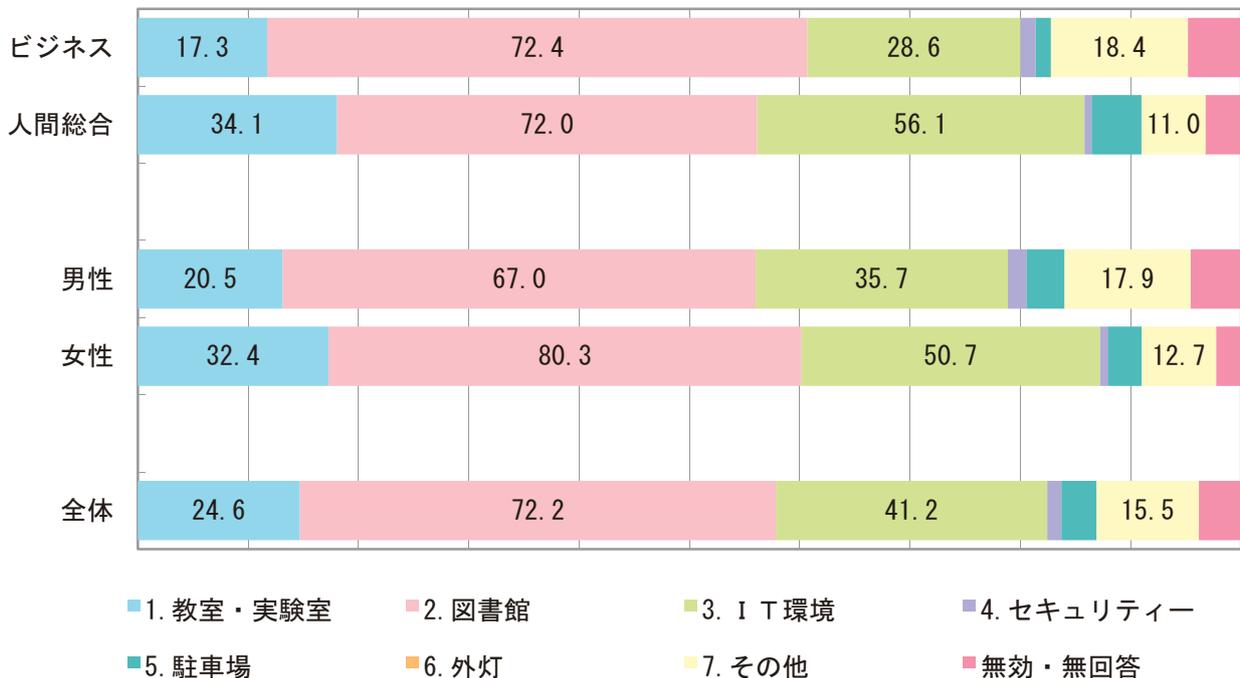
この質問では特に整備・充実して欲しいと感じる設備について、3つ以内で答えてもらった。この質問においても選択肢の数はつくば地区より少なくなっている（「体育施設」や「学内循環バス」など）。

全体を見ると、特に「図書館」の充実を求める回答者が際立って多い（72.2%）ことがわかる。また、「IT 環境」（41.2%）、「教室・実験室」（24.6%）についてもかなりの整備・充実の要望がある。

「図書館」の充実を求める声は東京地区の両研究科に共通する要望であり、ビジネス（72.4%）においても人間総合（72.0%）においても7割を超える回答者が充実を求めている。一方、他の選択肢については研究科ごとの違いがあり、「教室・実験室」の回答率はビジネスでは17.3%だけだが人間総合では34.1%と3分の1以上に達しているし、「IT 環境」についてはビジネスの回答率は28.6%だが、人間総合では56.1%と過半数になっている。この二つの選択肢については人間総合の方がビジネスよりずっと不満が大きくなっていると言えるだろう。

なお、男女差は研究科ごとの差と概ね並行しており、ここでも研究科ごとの男女比の違いが反映されていると考えられる。

図 6.3 整備・充実してほしい施設（研究科別、男女別、全体）



## 6.4 TWINS の満足度 (問 32)

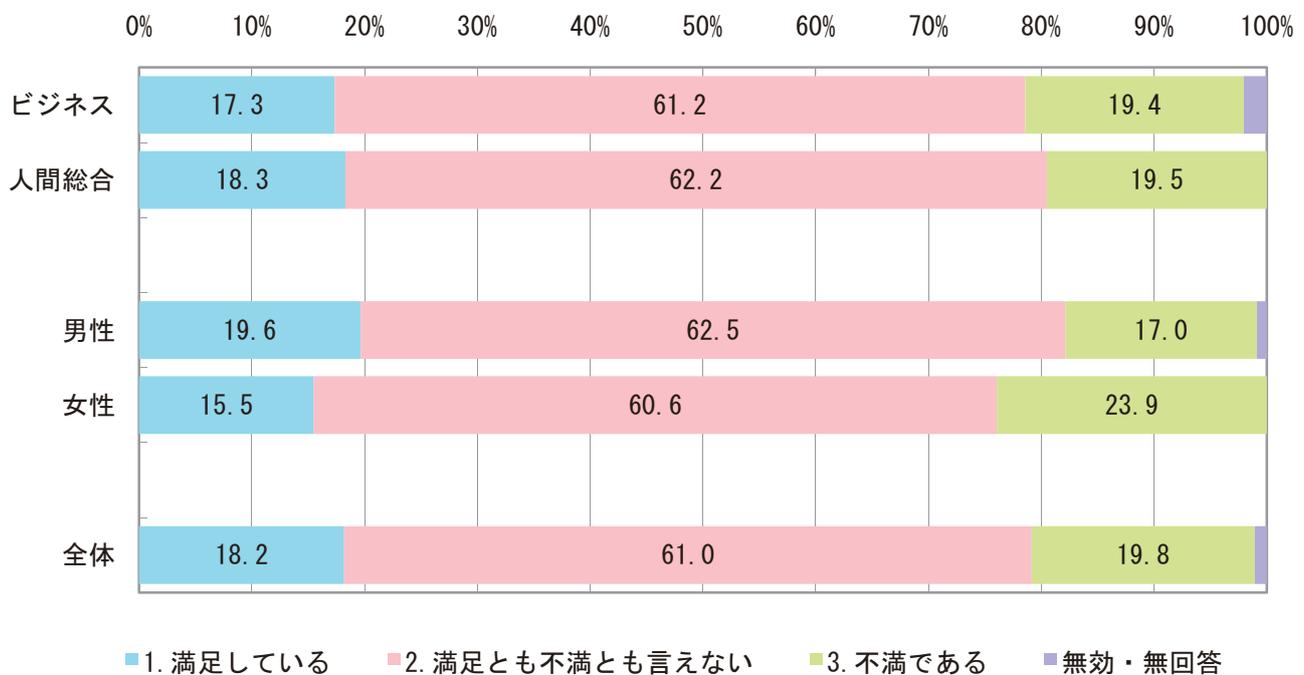
◎不満はほぼ2割で、筑波地区よりも大きい。

TWINS の満足度については筑波地区とは大きく異なる結果になった。東京地区全体の回答率は「満足とも不満とも言えない」が最も高く 61.0% (筑波地区 58.4%)、次に高いのが「不満である」の 19.8% (筑波地区 11.7%)、最も低いのが「満足している」で 18.2% (筑波地区 28.8%) である。「満足とも不満とも言えない」の回答率は大きく変わらないが、「満足」の回答率よりも「不満」の回答率の方が高いのが筑波地区との大きな違いである。

TWINS の満足度は研究科ごとの違いが少ない。ビジネスでは「満足」の回答率は 17.3%、「どちらとも言えない」の回答率は 61.2%、「不満」の回答率は 19.4% である。人間総合では「満足」の回答率は 18.3%、「どちらとも言えない」の回答率は 62.2%、「不満」の回答率は 19.5% であり、ほぼ同じ分布であると言っていいだろう。大学院全体でも筑波地区の図書館情報メディア研究科に次いで TWINS への不満が高いことになる。

ただし、男女別にデータを比較すると、男性の方が不満が少ないことがわかる。男性の「満足」の回答率は 19.6%、「どちらとも言えない」の回答率は 62.5%、「不満」の回答率は 17.0% であるのに対し、女性の「満足」の回答率は 15.5%、「どちらとも言えない」の回答率は 60.6%、「不満」の回答率は 23.9% になっている。これは筑波地区の女性回答者の「不満」の回答率が 9.5% とむしろ男性よりも低いことと好対照になっている。

図 6.4 TWINS の満足度 (研究科別、男女別、全体)



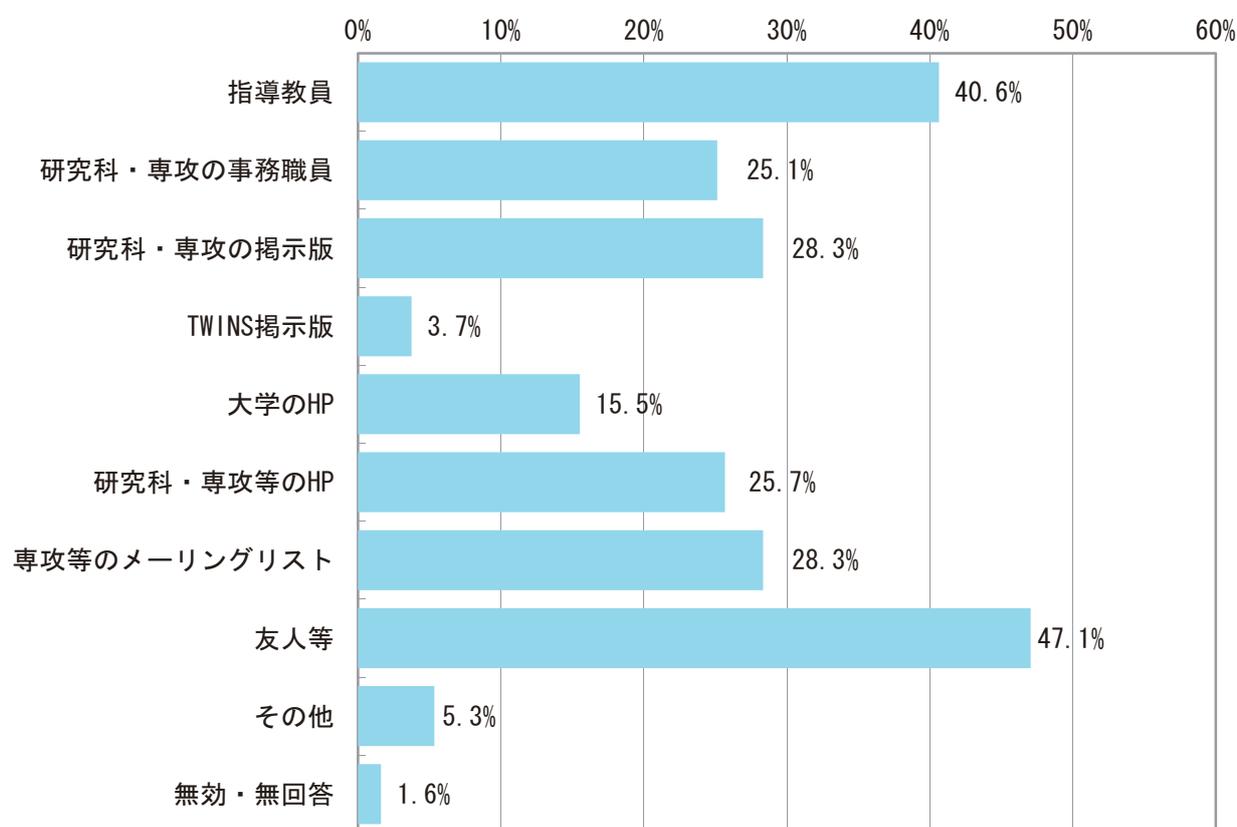
## 第7章 その他

### 7.1 学修・研究や生活に関わる情報源について（問33）

- ◎情報源は、指導教員と友人が最も多い。
- ◎TWINS掲示板はほとんど利用されていない。

学修・研究や生活に関わる一般的な情報を得ようとするとき、主に誰にあるいは何にアクセスするかを尋ねた。最も多く利用されているのは、指導教員（40.6%）と友人等（47.1%）であり、これは筑波地区の研究科と同様の傾向であった。ただし、筑波地区と比べてみると大学のホームページの利用率が低い傾向がみられる。筑波地区と同様にTWINS掲示板はほとんど利用されていない。

図7.1 学修・研究や生活に関わる一般的な情報源（全体）



## 7.2 相談機関の利用希望について（問 34）

◎ワークライフバランス相談の希望率が最も高い。

東京地区では利用率ではなく、4種類の相談機関に関する必要性を質問した。その結果、ワーク・ライフ・バランスに関する希望が42.2%と最も高かった（図 7.2）。ワーク・ライフ・バランスの希望率が高いのは、学生に在職者が多いためであろう。在職者とそれ以外に分けてワーク・ライフ・バランス相談の希望率を求めたところ、予想通り、在職者の方が希望率が高かった（表 7.2.1）。なお、ワーク・ライフ・バランスの希望率は、男性が42.0%、女性45.1%と女性の方が少し高かったが、統計的検定の結果は有意な差とは認められなかった。

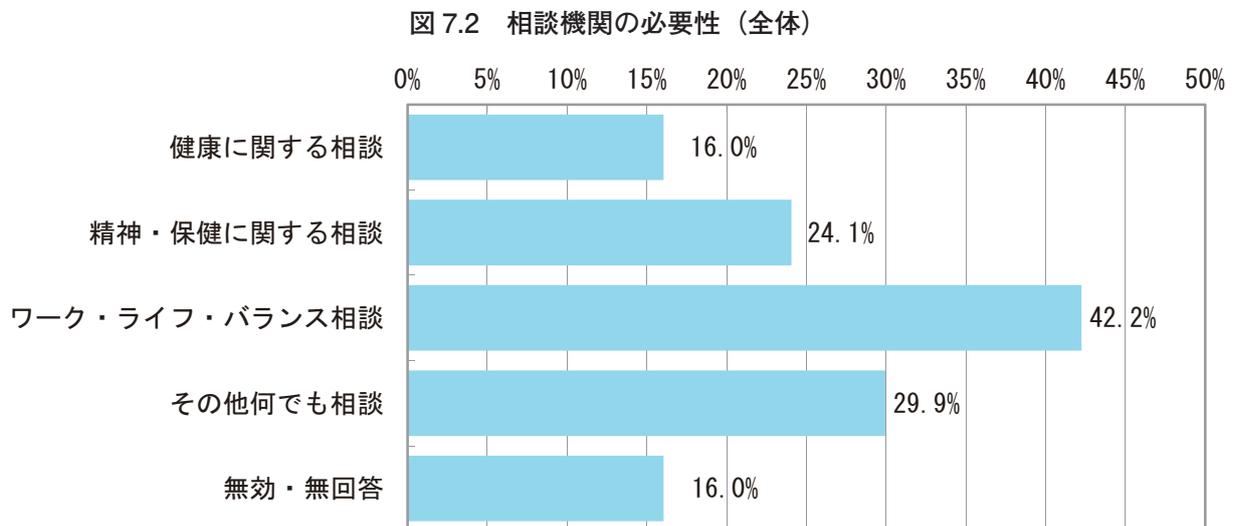


表 7.2.1 職の有無とワーク・ライフ・バランス相談の必要性

	在職者 (N=170)	それ以外 (N=18)
ワーク・ライフ・バランス相談が必要	44.1	22.2

表 7.2.2 相談機関の必要性（全体、研究科別）

	全体 (N=188)	ビジネス (N=98)	人間総合 (N=82)
1. 健康に関する相談	16.0	14.3	19.5
2. 精神・保健に関する相談	24.1	21.4	29.3
3. ワーク・ライフ・バランス相談	42.2	40.8	45.1
4. その他何でも相談	29.9	17.3	43.9

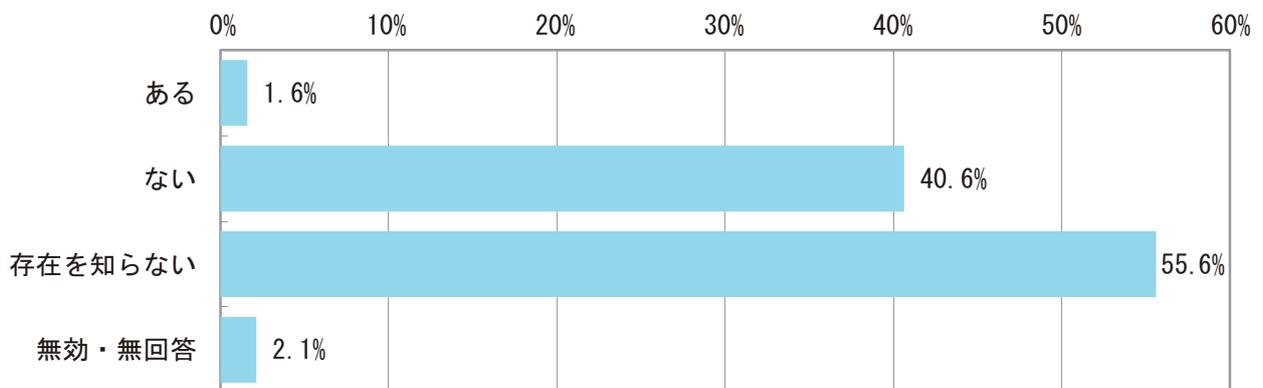
### 7.3 学外研修施設の利用について（問 35）

- ◎学外研修施設の利用率はわずか1.6%で、実質的な利用率はゼロ。
- ◎筑波大学以外の卒業生や留学生の利用率は0%

筑波大学の学外研修施設（山中、館山、石打）の利用率は、筑波地区の大学院生の13.6%をはるかに下回り、わずか1.6%（3人）にとどまった。一方、存在自体を「知らない」とした回答は半数を超えた。

さらに、出身大学別に利用率をみたところ、上記3人の利用者はすべて筑波大学の学群卒であることがわかった（筑波大学の学群卒は、東京地区の回答者には15人しかいない）。したがって、これらの利用者も学群時の利用である可能性が高く、実質的には東京地区の学生には学外研修施設は全く利用されていないと言えよう。

図 7.3 学外研修施設の利用率（全体）



## 第8章 自由記述

### 1. はじめに

東京地区のアンケート有効回答数188のうち55件、すわなち、約3割の大学院生が自由記述欄に記入した。自由記述に関する分析の方法並びに分析結果の記述方法については、筑波地区と同様に、前回の報告書（『平成20年度大学院学生生活等に関するアンケート調査報告書』）に倣い、55件の多様な意見を以下のA、B、Cの観点で分類し分析した。

- A. 制度（経済支援、学生生活支援など）に対する要望・不満
- B. 教職員に対する要望・不満
- C. 施設に対する要望・不満（院生特有のもの）

### 2. 個々の記述内容の概観

#### A. 制度に対する要望・不満

##### (A1) 授業の開始時間

「多くの企業は18時までが就業時間のため遅刻することが多い」「夕食をとるための時間がほしい」「秋葉原から茗荷谷への移転のため通学時間が長くなった」等の理由で、授業開始の時刻を遅らせてほしいという意見があった。具体的には、現行の授業開始時刻である18時20分から、18時30分、18時40分、または19時に変更してほしいとの提案であった。しかしながら、逆に、終業時刻が遅くなると勉強時間、就寝時間に影響があるため、開始時刻を現行のままか、あるいは17時に早めてほしいという声もあった。

##### (A2) 連絡広報体制

校内ネットワーク、専攻の掲示板、TWINS、図書館などのログインごとのパスワード、ユーザー名の統一希望が目立った。また、休講や連絡事項が、学内の掲示板だけではなく、ホームページ等でも分かるようにしてほしいという声もあった。

##### (A3) カリキュラム

社会や産業界に関係する特定の科目の授業を開講して欲しい、また必修単位制度をもっとフレキシブルにすべきだという意見が見られた。

##### (A4) キャリア・就職関連

キャリア・転職・進学に関する情報提供や相談窓口の設置など、具体的な支援体制の確立を希望する声があった。また、「科目履習生にならなくても卒業後のサポートが受けられるようにしてほしい」という声もあった。

##### (A5) 経済的支援

奨学金の給付や授業料免除の選考に際しては、東京キャンパスの学生の特徴を考慮してほしいという声があった。「筑波キャンパスの基準にされると東京キャンパスの学生は免除が受けにくくなる」「世帯収入だけではなく支出（住宅ローン、子供の学費など）の状況等も考慮すべき」といった意見があった。

##### (A6) 今後の制度変更へ向けて

「専攻によっては制度変更が多く、学生の意見を聞くことなく、決定後の説明会も不十分だった」という声があった。また、「社会人学生の負担を考慮して、試験期間開始前に1～2週間ほど試験勉強期間をもうけてほしい」「終了年限と休学期間を延長してほしい」「キャンパスの移転は入学した学生が卒業するまで延期してほしい」といった声もあった。

## B. 教職員に対する要望・不満

### (B1) 教員に対して：講義・指導力不足

授業に対する不満は多く、「授業のレベルが低い」「学生の目的（司法試験合格等）に対して熱意が感じられない」「一部の学生の意見だけを考慮して講義している」「チューター・TA などがいない」「教員の病欠に対する補講などを早めに設定すべき」などの意見があった。

また、教員による指導の充実を望む声が多く、「指導はもっと定期的にしてほしい」「論文答案の添削指導の機会も増やしてほしい」「教員に相談をしやすくしてほしい」といった記述があった。

### (B2) 事務員の院生対応への不満

事務員の対応が丁寧でスピーディーだという声もあれば、「IT 等が適切に機能していない」「スローで機転がきかない」といった意見もあった。また、「具体的な相談を誰にどのような手続きで行ったらいいかかわからない」という声もあった。

## C. 施設に対する要望・不満（空調、IT 設備、売店、図書館）

IT 環境と空調設備の整備、食堂、飲食店、自販機等の設置を希望する声があった。図書館については、図書の実質や空調設備の整備に関する要望があった。また、「法曹専攻の図書館を自由に使えるようにしてほしい」といった意見もあった。

## 3. まとめ

大塚キャンパス校舎のリニューアルのために秋葉原と神保町に設けられた代替教室について、学習環境、施設、設備に関する不満と改善要望が多くみられた。2011 年 9 月の授業開始を目途に、現在の教室は大塚キャンパスに移転する計画であるが、この校舎のリニューアルによって、今回の施設設備に関する改善要望にある程度応えることができるのではないかと期待している。

一方、厳しい時間制限の中で大学院に通っている社会人大学院生特有の問題点が反映されていた。限られた時間の中で、よりスムーズ且つ適切に時間を使用して研究や学習に専念できるよう、学習環境の整備が求められている。また、自由記述の中に大塚キャンパスへの移転に際して授業の始業時刻の検討を要望する声があったが、校舎の移転に伴って想定される学習環境等の変化とデメリットについても留意し、今後の学生支援に取り組む必要があるだろう。

## 平成 22 年度学生実態調査 [大学院]

平成 23 年 3 月発行

編集 学生生活支援室  
学生担当教員会議

表紙デザイン: 田中佐代子 (人間総合科学研究科 准教授)  
発行 筑波大学  
つくば市天王台 1-1-1  
☎ 029 (853) 2959

*University of Tsukuba*

